

Fate/Nexus

月影ノブ彦

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第五次聖杯戦争から一年後、冬木市の近くにある緑川という土地にて聖杯戦争が行われた。それは、本来の歴史では存在し得ない新たな聖杯戦争であった。各マスターの思惑が交差し、戦いが始まっていく。その時、第五次聖杯戦争を生き抜いた者たちは…。

Fate/stay nightの続編という体ながら、どのルートとも繋がらないオリジナル話です。原作知識は各種アニメとWikiが主なので至らない点しか無いかと思われませんが、どうぞお付き合い頂けると有り難いです。

目次

プロローグ	1	彼は何も知らない	89
序章		遭遇	99
生きるべき者	10	逃走	108
没落貴族の末裔	21	接触	117
お姉ちゃんに会いに行く	32	直と瑠璃子 その1	127
金、金、金	39	直と瑠璃子 その2	136
一族の悲願	52	朽ちた教会の男	144
ギャンブラー	62	聖杯と決意	155
シークレット・スイーパー	71	少女の帰国	163
登場人物紹介	82	遠坂凜と草壁真	173
第一章		男は今日も仕事へ行く	184
		僅かな違和感	192
		暴力	203

銀髪の少女	213
開戦くアーチャーVSライダーく	222
追う少女たち	233
金貸しは逃げない	240
一進一退	252
一先ずの決着	261
勝負師の帰還	269
観察する男	275

プロローグ

「……神はサイコロを振らない。

アルベルト・アインシュタイン

「お忙しい中、お集まり頂き、誠に感謝いたします」

厳かな声がそう言って会の始まりを告げた。席についたスーツ姿の人物たちが一斉に声の主へと視線を集める。少しして、その人物は口を開いた。

「…結論から先に言います。先の実験を持って、ようやく我々だけの手で『聖杯戦争』を執り行うことが可能となりました」

「おおー」

「素晴らしい!!」

場は万雷の拍手に包まれた。発言主の女性は拍手が鳴り止むのを待った後、一つ咳払いをしてから、話を続ける。

「…元来、御三家のみで執り行われて来た聖杯戦争。我々はその尻拭いばかりを担当させられて来ました。その歴史は屈辱の一言と言えます」

「全くその通りだ」

「しかし、我々も黙って連中の隠蔽工作に従っていたわけではありません。第一次聖杯戦争から暗躍させていた記録者（レコーダー）の手により、事件を詳細まで記録し、それを我々なりにずっと研究して来ました。そして、その研究がようやく結実し、疑似ではない本物の聖杯を造り上げることに成功したのです」

「うむ。その為に何兆ドルもの予算をこのプロジェクトへ注ぎ込んできたのだ」

「全ては聖杯が叶える願いの為に！」

「…忘れてはならぬのは、今日の為、魔術師協会及び聖堂教会の一部の人間の協力があつてこそのものであるということです。彼らが一枚岩で無かつたのは幸運でした」

「胡散臭い連中だけのことはあるな」

「現在、順調に聖杯戦争へ向けての準備を進めています。近く、開戦となりますでしょう」

「……一つ、いいかね？ミス・ユリエ」

一人の老人が手を挙げた。

「連中の聖杯戦争と同様に、わざわざ争いを起こし、マスター同士を殺し合わせる必要があるのかね？他にもっと効率的な方法があつても良さそうなものだが」

「ミスター・モゲル。ごもつともな御意見です。しかし、残念ですが現状はそれがベスト

な方法なのです。ご理解頂けますと助かります」

「やれやれ、また色々と動かねばならぬのか……」

「ミスター・モゲル。今度のは連中の為でなく我々の為に行うのです。多少は気が楽になりましょうぞ」

「そうではあるが……」

「ミスター・モゲルの言いたいことは分かる。聖杯戦争は単純に金が掛かる。一、二度の実験でさえかなりの額が消えたのだからな。本開催ともなれば、また莫大な金額が動くことは間違いないだろう」

「特に開催地は様々な面で大変だな。選ばれた国の者たちが可哀想で仕方無い」

「オリンピックとは真逆だな」

その言葉に何人かが笑い声を上げた。

聖杯は欲しいが、金は出来る限り出したいくない。そんな思考が目に見えるようであった。

「……で、ミス・ユリエ。今回の開催地は何処かね？」

「……日本です」

「おお、日本か！」

多くの安堵の声が漏れた。

「我が国でなくて良かったよ」

「災難だな、シンイチロウ！」

そう言われ、肩をポンと叩かれる初老の男。シンイチロウと呼ばれた彼は嫌な顔をす
るどころか、寧ろ望んでいたかのように笑う。

「そうですか。我が国ですか。……ミス・ユリエ。日本の何処でやるのですか？」

「……ミドリカワです」

その単語にどよめきが起こる。

「……因縁の地、ですな」

シンイチロウがポツリと呟いた。

「我々主導の聖杯戦争。その一番最初の開催地が、御三家の聖杯戦争の縁の地、冬木市の
近くとは」

「近くだからこそ……です。今回は実験ではない。失敗が出来ないからこそ、何でも利用
するのです。例えばそれが鼻持ちならぬ相手だとしても。条件に近い土地で行えば、成功
率はぐんと上昇しますから」

「ごもつともですな。それで、肝心のマスターについてだが……」

シンイチロウは少し間を空けた。

「御三家の聖杯戦争では聖杯が選ぶそうだが、我々の聖杯戦争ではどう選定を？」

「基本的には、そこもほぼ一緒です。何処もかしこも原型から変えてしまえば、何が起くるか分かりませんからね。予想外の事態を避ける為だのご理解頂きたい」

その発言に、シンイチロウの隣の男が手を挙げた。

「ミス・ユリエ。それはつまり、我々の息のかかった者たちだけで聖杯戦争を行うことは出来ないということかね？」

「残念ながら、そういうことになります」

「Oh、ここまで来て、赤の他人に持つてかれてもしたら堪ったものではないな！」

「最悪関係者が誰もマスターに選ばれなかった…なんて笑い話にもならないようなことにならないのかね？」

「ご安心を。最低、一人は身内をマスターに選ぶように調整が出来ます。もっともその調整は一人にしか行えませんが」

「二人、か。心許ないな」

「なあに、勝てばいいのですよ。ミスター・スミス」

シンイチロウが自信ありげに言う。

「そうでしょう？ミス・ユリエ？」

「ええ。その通りです。幸い、我々の聖杯戦争では魔術回路が無い者でもマスターの資格を有します。対魔術師ばかりでは無いだけでもこちらには有利な材料となりましよ

う」

「それを聞いて安心した。何しろ、私がマスターとして推す人物は魔術の魔の字も無いような男でね。無論、対魔術師であつても十二分に戦えると太鼓判を押せるのだが、そもそもマスターに選ばれなければ意味が無いからね」

「成る程。では、後ほどその人物をマスターとして選定するように調整いたしましょう」
「頼むよ、ミス・ユリエ。協力は惜しまない」

と、その時、シンイチロウの向かいの強面の男が口を開いた。

「……シンイチロウ。分かつてはいると思うが、抜け駆けは許さぬぞ？ そういう条約を結んでいることを忘れてはいないだろうな？」

「勿論、覚えていますよ。心配ならば、私に二十四時間監視をつけてくれても構いませんよ？」

「フン、貴様一人に監視をつけるのにどれだけ費用が掛かると思ってるんだ。まあ、いい。取り敢えずは信頼するぞ、シンイチロウ？」

「裏切ればどうなるか、わかっているな？」

「ええ、ええ。皆様の期待も裏切りはしませんよ」

そう言つて不敵な笑みを浮かべるシンイチロウ。念を押してきた者たちもそれ以上は何も言わなかった。

その流れを断ち切るかのように、ユリエがまた一つ咳払いをする。

「……それでは短いですが、これを持ちまして、本会議を終了いたします」

「有意義な時間だったよ。ミス・ユリエ。忙しい中、時間を作った甲斐はあった」

「聖杯戦争が今から待ち遠しいね。開戦となったら特等席で見させてもらおうとするよ」

「手元にグラスがあれば、我々の聖杯戦争に乾杯……といきたいところだ」

「何にせよ、今まで払った金額に見合う見返りを期待させて貰うよ」

思い思いの感想を告げた後で、この集いは終了を迎えた。

「ミス・ユリエ。お疲れ様でした」

「有難うクロサキ。タバコを頂戴」

クロサキと呼ばれた坊主頭の男はニコリと笑って一本のタバコを差し出す。

「火をお点けしても？」

「お願い」

クロサキがタバコに火を点けると、ユリエが美味そうに煙を吸い込んだ。一息ついたところで彼女が口を開く。

「……俗物の塊共め。聖杯をただ願いを叶える為だけのものと思っただけなのでしょう。

本当に浅はかな連中ですよ」

「ハハハ、手厳しい。そうは言っても大事なスポンサーでは無いですか」

「一部を除いて、金と地位だけしか取り柄の無い連中ですよ。御三家とはまた違った意味で不愉快です。連中と顔を合わせるだけで私の小皺も増えようものですよ。……とここで、クロサキ」

「はい」

「此度の聖杯戦争。その監督役はあなたにやって貰おうと思っています」

その言葉にクロサキは分かりやすく驚きの表情を見せた。

「……これはこれは感謝の極み。記念すべき第一回目の栄誉をこの私にですか？」

「あなた以上に適任者はいませんからね。願わくば、この一回で全てが終わればいいのですけれどもね」

「……謹んでお引き受けいたします。ミス・ユリエ」

クロサキは深々と頭を下げる。

「……頼みましたよ。それでは、早速ですが今から現地へ向かって頂けますか？来るべき開戦までに準備しなければならぬことが多過ぎますので」

「御意に」

そう言うのと、クロサキは無駄な行動をせずにその場から去っていった。

「……やっつと、この時が来たのですね」

ユリエは独りごちる。

「我々の……いえ、私の聖杯戦争。その日がやつと……」

タバコの煙と香りが辺りに充満する。

これが、本来の歴史では起こり得なかった、新たな聖杯戦争。その幕開けとなることをここにいた人物以外はまだ知らない。

序章

生きるべき者

自分には生きる価値など無い。

秋山直は本気でそう思っていた。

「さよーならー」

「またねー」

「おい知ってるか?」

「えーマジで!?!」

放課後の緑川高等学校では、あちらこちらで何気ない日常会話が飛び交っていた。

或る者は友人と。

或る者は教師と。

或る者は恋人と。

楽しさを共有する為、寂しさを埋め合う為、知識を得る為、愛を深め合う為……。それぞれがそれぞれの理由でコミュニケーションを取り合っている。そ

また、中には誰とも繋がらないことを選ぶ者も少なからずいる。秋山直はそういう人間であつた。

「……………」

無言のまま開いた本のページへ目を落とす、ただ目的地へと足を動かす。それが、直の放課後であつた。何処の部にも属さぬ彼は、友人や恋人も連れず、何時もたった一人で帰路に着く。

放課後がそうなのだから、当然普段の学校生活も一人であつた。休み時間は帰宅時と同様に本を読み、昼休みはさつさと食事を終えたと図書室へ向かい、やはり本を読んで過ごす。それが彼の変なことの無い日常であつた。

別段、直はクラスメイトに嫌われてるわけではない。寧ろ、その端正なルックス故に女子の人気は高い方である。実際に見知らぬ女子から告白されたことも何度かあるくらいであつた。だが、彼の方が他人に興味が無かつた。当然、交際を受けたことは一度たりとも無く、そもそも告白されたことでさえどうでもいいと断つたことさえ無かつた。それでも、未だに人気があるのはそれをギリギリミステリアスであると周りが受け止めているからであらう。

直は、他人に自分を見せたことは無い。少なくとも中学、高校と過ごしてきた中で、他人とまともに会話したことなど数える程であつた。だから、クラスメイトや担任が知り

得るのは、彼の成績や記録などのデータでしかない。

直は、一言で言えば優秀であった。学問では常にトップ、運動神経も高い方である。ガリ勉と言われることもあるが、彼自身授業についての勉強をしたことはない。教科書は二度三度読めば全て覚えられるし、数学は公式さえ理解すればいくらでも応用がきく。授業の内容に関しては勉強をする必要が無いのだ。コミュニケーションこそ最悪であるが、その他は完璧に近い青少年であった。特に問題を起こすわけでも無いので、サラリーマン気質の教師たちは必要以上に彼に触るような真似はしなかった。緑川高等学校は名高い進学校というわけではないが、人道的に優れた教育をしているわけでもない。言わば、普通の在り来たりな高校である。生徒の自主性を重んじるという逃げ道で扱いにくい彼を放置していたのであった。当の本人はその方が面倒臭く無くていいとその境遇を自ら望んで受け入れていた。

「……直君、ちょっとそこに正座なさい！」

「……………」

またか、と直は思った。

「…………怒られるようなことは特にしていないと思うのだが？」

「ダメよ！ダメダメ！」

何処かで聞いたことのあるフリーズを口にして、秋山由布子は子供ののように首をブンブンと横に振った。彼女は直の母親……ではない。直の母親は彼が幼い頃に死んでいる。由布子は、父親の妹……つまり、直にとつては叔母にあたる。快活で裏表の無いさっぱりとした性格の女性……であった。一年前までは。

「そんな学園生活は天が許しても、この私が許しません!!」

「別に、誰に迷惑を掛けているわけでも無いし、そもそもアంతアの許しを得る必要が……」

「そういう問題じゃありません!」

由布子はビシツという効果音が聞こえそうな勢いで人差し指を直へ向けた。

「いい? 学校というのは、人間関係を……」

「その話は何十回も聞いた。同じ内容を一言一句、間違えずに言える自信があるぞ」

「そんなことに自信を持たない! あと、何十回も言わせない!」

「はいはい」

直はそう流すと、皮を剥き終えたリングを四等分に切り始めた。

「興奮すると、また倒れるぞ? それにここは病院なんだから静かにしないとイケないんじゃないか?」

「そう思うなら興奮させない! 怒鳴らせない!」

「……努力するよ。ほら、リンゴ切ったからアーンしろアーン」

「アーン……」

由布子は言われた通りに口を開け、直の差し出したリンゴを頬張った。

「ん、甘くて美味しい！」

「……………」

「……ん？何見てるの？」

「……また痩せたのか？」

「あ、分かる？ダイエツトに成功したのよ。ドーしましよ。これ以上綺麗になったら、直君も私の虜になっちゃうわね。キヤー（≡▽≡）」

「……………」

（痩せた、というよりも、痩せ衰えてるじゃないか……）

「……秋山由布子さんは、このままでは長く持たないでしょうね」

主治医が無念そうな顔で直へそう告げる。直も悔しきで唇を強く噛み締めた。

「先生、原因はまだ分からないんですか？」

「……残念ながら。手は尽くしていますが、現状維持さえ厳しいのが正直なところです」主治医は正直に言った。隠されたり、気休めを言われるよりはマシであるが、それで

もその事實は直の心臓を掴むようであつた。

「……何処も悪く無いんですよね？」

「ええ。何度調べても脳や内臓に異常は見られません。しかし、何故か彼女の肉体は日々衰弱していく。点滴などで何とか持たしてはいますが、それも限界が近い。最早、手の施しようがありません」

「……………」

直は思わず頭を掻き毟る。何故、彼女がこんな目に遭わなければならぬのか。

幼い頃に母親が死に、父親は常に仕事で半ば育児放棄状態だつた。そんな直を引き取り、今まで育ててくれたのは由布子であつた。直を引き取つた頃の由布子はまだ二十代半ばで自分の為に時間もお金も使いたい筈であつた。それでも、それら全てを捨てて彼女は直を自分の息子のようになつて育ててきてくれた。何と立派なことだろう。直にとつて、由布子は恩人であり、母親であつた。面と向かつて彼女にその思いを打ち明けたことは無いが、心の中では彼女への感謝を忘れたことなどない。

(……何故、俺のような生きる価値のない人間が生きて、彼女のような人間が死ななければならぬ！)

直は何時からかそう考えるようになっていた。

「……………ねえ」

「……………ん？」

最後のリングゴを喉の奥に入れた由布子が直の顔をじつと見ていた。先程までのおちやらけた雰囲気は一切無い眼差しである。

「直君がそんな風になったのって、“あのこと”が原因なの？」

「……………」

「もし、そうだったら私だけは直君のこと……」

「関係ないよ」

直は急に立ち上がった。

「……………そろそろ面会時間も終わりだし、夕食の準備もしないと。もう帰るよ」

「直君……」

「明日も必ず来るから」

「……………うん」

「クソッ！」

帰宅した直は思わず自室の壁を殴り付けていた。拳の皮がめくれ、血が滲み出す。それでも、壁を殴ることを止められずにいた。

(こうしている間にもあの人は死に近付いていつてる)

由布子が倒れたのは一年前だが、それよりも前から兆候のようなものはあった。当人は気のせいだと笑っていたが、直はこうなる予感をその当時から抱いていた。その時から直は健気にも医者になろうと思っていた。そうして、彼女を治療するのが生まれてこの方夢など見たことも無い彼の唯一の願いであった。だが、医者になるには時間もお金も足りなさ過ぎた。もう由布子の命は幾ばくも無いであろう。日に日に痩せ衰える彼女の肉体がそれを告げている。

(俺の命を……あの人にあげられれば……クソツ、そんな非現実的なことを……)

直は洗面所へ行くと、何度も何度も冷水で顔を洗った。

(落ち着け……落ち着くんのだ。取り乱して何が出来る？何も出来なくとも落ち着け)

普段は冷静沈着な彼も、学校帰りに由布子のいる病院へ寄ると、暫くはこうなってしまう。その度に自身の中での彼女の存在の大きさを思い知るのであった。

(……ん?)

少ししてようやく冷静さを取り戻すと、何やら物音のようなものが聞こえた。泥棒か何かだろうか。直の家は父親の生家であり、由布子と最近までは二人で暮らしていた。外観は中々に立派な家なので、盗みに入ろうと考える輩がいてもおかしくはない。

(物音はあの男の書齋からか?)

直は父親の書齋へ踏み入れたことがない。とうとう会いにさえ来なくなつてから、直

は自分の父親を肉親と思うことは止めた。だから、今まで父親に関するあらゆるものに携わって来なかつたのであつた。

だが、泥棒が入つたかも知れないのであれば話は別である。最悪、自身の生命に関わってくる。

直は警察に電話をした後、初めて父親の書齋へと足を踏み入れた。中は案外綺麗に片付いていた。

(誰も…いない?)

確かに物音がしたのに、誰の姿も見えない。そこまで広い書齋では無いし、隠れるようなスペースも無い。

書齋の中に入って周囲を見回してみる。父親は几帳面だったのか、棚の本がアルファベット順であつたり、あいうえお順になつている。由布子が掃除の時に並べた可能性もあるが、直の知る彼女はこういう並べ方はあまりしない人間であつた。

(ん?)

直は、その中で幾つか順番通りになつていない本を見つけた。こうなつてくると、そこだけ違うのが気になつてくる。直もどちらかと言えば几帳面な性格であつた。居てもたつてもいられず、本を並べ替える。きつちり、若い頃から本を手にとって在るべき場所に差し込んでいくと、最後の一冊を手を取つたところで奥の方にスイッチのような

ものを見つけた。スイッチには蓋が付いており、特定の方法で開閉する仕組みになっているようだ。

(何だ、これは?)

当然、そんなものを押そうなどと直は思わない。だが、物音が再び聞こえてきたら話は違う。

(また物音が…。壁の向こうから、か?)

普段の慎重な直であれば、もっと警戒してこれ以上踏み入ることは無かったであろう。

だが、由布子のことや謎のスイッチという特異な状況が直の判断を僅かに狂わす。直は震える指で怪しげなスイッチを押した。

(!?)

すると、本棚が半分に分かれ、その先の壁がせり上がり、地下への階段を出現させる。まるで、何処そのアドベンチャーゲームのような展開に直は思わず狼狽するが、まるで導かれているかのように地下への階段へ足を進めていた。

直には何故か確信があった。この先に自分が望む何かがある。この時の直はどうしようもない現実を前に何処か狂っていたのかも知れない。

長めの階段を下り終えると、そこは広い部屋になっていた。明かりがない筈なのに明

るい。それは地面が光っているからであった。

「魔方……陣？」

怪しげに光を放つ魔方陣。と、その時、光は強さを増し、まるで爆風のような風が吹き抜けた。

「な、何だっ!?!」

信じられない現象の最中、直は更に信じられないものを見る。魔方陣から人間が現れたのだ。それは美しい女性であった。

女性は目を開くと、驚きを隠せない直へ向けこう言った。

「……我が名はセイバー。貴方が私のマスターか？」

没落貴族の末裔

かつて、日本には久宝院市之助という人物がいた。彼は独学で製糸業を開始すると、それを発展させ、やがて財閥を形成するまでになった。

久宝院財閥は明治から大正にかけて、日本の経済の一部となる。その盛況ぶりに久宝院家の者たちは誰もが永久の繁栄を疑いもしなかった。

しかし、栄枯盛衰は世の常。戦争が始まりそれが激化していくと、久宝院財閥は次第に力と財産を失っていく。そして、戦後の財閥解体がそれに止めを刺した。

独自の路線で成り上がっていった彼は同業者にとって目の上の瘤であった。故に、財閥解体後の財閥解体計画案に彼とその企業の名前は無かったのである。一代で築き上げた莫大な財産はその殆どが国へ持って行かれてしまうと、そのまま久宝院家の名は歴史の影へと消えてしまった。

残された者たちは、僅かに残った財産を基に細々と生き続け、そして現在に至る。

「……………」

久宝院家の末裔、瑠璃子は朝食のトーストを食べ終えると、紅茶の入ったカップに口

をつける。一口含んだだけで、茶葉のいい香りが体中に行き渡るかのようであった。

「……爺や」

「ハッ」

「……今日も素晴らしい香りよ。茶葉は何を使って？」

「お嬢様のお好きなダーズリンでございます」

「そう」

瑠璃子は再び紅茶を口へ含んだ。

「……茜」

「はい！」

名前を呼ばれたメイドが即座に返事をする。

「何か用でございますでしょうか？」

「食べ終わった皿はすぐに下げなさい。何度言えば分かるの？」

「あ……。も、申し訳ございません！」

茜は焦ってパンくずのついた皿を手に取った。それを見て、爺やと呼ばれた老人が瑠璃子へ向かって頭を下げる。

「申し訳ございません、瑠璃子お嬢様。私の教育が行き届いておりませんでした」

「本当よ。あなたともあろう人が、新人の教育も出来ないなんて洒落にもならないわよ」

「その通りで」

老人は返す言葉も無いという風に再度頭を下げた。その様子を冷めた瞳で瑠璃子は見つめる。

「……茶番、ね」

瑠璃子は突如吐き捨てるように言った。

「没落貴族の末裔が金持ちごっこしたところで空しさだけね。得られる満足感なんて皆無だわ」

「瑠璃子お嬢様……!」

「爺や。あなたも無理してこんなままごとにつき合わなくても良くってよ? こんな先の無い貧乏娘のお守りに残りの人生を費やすなんて馬鹿馬鹿しいと思わない?」

「そんなことは……」

「茜もよ。若い身空なのだからもっと自分を大事になさい」

「お嬢様……」

二人は寂しそうな表情で瑠璃子を見つめ返す。

「……何よ、その顔は? お父様もお母様ももう死んでるのよ? 雇い主もいないのに何時まで私の世話をするつもり? 正直、迷惑よ」

「そんなことを仰らないで下さい。……この東雲我聞、ご両親から瑠璃子お嬢様のこと

を頼まれたからというだけでついでにいるわけではございません。純粹に瑠璃子お嬢様のことを慕っているのです。それは孫の茜も同じです」

「その通りですお嬢様。この茜、お嬢様の身の回りの世話をすることこそ自分の生き甲斐と思つてやつております」

「……勝手になさい！」

瑠璃子はそう言つて顔を背けた。

正直なところ、彼女は二人を本気で迷惑だと思つてはいない。寧ろ、幼い頃からずっと一緒だった我聞のことは大事に思つていたし、つい先日メイドとして志願してきた茜にも情があつた。

だが、だからこそ、この二人を自分の人生にとことん付き合わせることに抵抗を感じるのである。現状は両親が残した財産で何とか人並みの生活をしているが、それも何れは尽きてしまうだろう。そうなつた後の人生は悲惨であるということは嫌でも分かる。少なからず大事な二人を巻き添えにしたいくないという思いが彼女の中にはあつた。

我聞も茜も無償で自分の世話をしてくれている。何故だかは瑠璃子自身も分かつてはいないが、それを甘んじて受け入れられるほど彼女は図太くない。それに、二人の優しさに甘え続けていれば、依存してしまつて自立も出来ないだろう。色々な意味で、瑠璃子は二人を自分から離したいと考えていた。

だが、それでもこうして二人は彼女を慕い、忠義心を示してくれるのだ。結果的に、この話は何時も途中で頓挫してしまう。それは、今日も一緒であった。この連鎖は何れ断ち切らねば、と瑠璃子は思う。

「……ところで、お嬢様」

我聞は一枚の手紙を取り出し、さつと話を変えた。

「今朝方、このようなものが届きました」

「手紙？ 差出人は一体誰かしら？」

「クロサキ……と読めます」

手紙の裏に書かれた筆記体の文字を我聞は指差す。

「クロサキ？ お父様やお母様の知り合いにそんな人物がいたかしら？」

「私は聞いたことはありません」

「爺やが知らないなら茜も知る筈が無いわね。捨てておきなさい、そんな不審な手紙」

「内容はお読みにならなくても？」

「……一応、見せなさい」

「はい、お嬢様」

この時、何故瑠璃子は手紙を読もうと思ったのか分からなかった。ただ、急にその手紙を読まねば……という気になったのである。

もしも我聞が確認せずに瑠璃子の言う通り手紙を捨てに行つてたら、その時は彼を制止させていたであらう。

「……………」

瑠璃子是我聞から手渡された手紙を開封し、中の便箋に書かれた文字に目を通す。差出人の名前と同様に筆記体の英語であったが、イギリス生まれの瑠璃子には簡単に内容を理解することが出来た。どうやら何かへの招待状らしい。

「……………聖杯、戦争?」

文中のその単語がやけに彼女の目に付いた。そして、それがもたらす奇跡の内容について。

「願いが……叶う?」

馬鹿馬鹿しい。と、普段であれば一笑に付していたであらう。

だが、何故かそうならない妙なりアリエーがこの手紙から感じられた。

何故だろうと、彼女は自身の記憶を辿って行く。

「……………あ」

それは、幼い頃の今は亡き祖父との会話の中であつた。

「瑠璃子や……………」

「なあに、お祖父様？」

「瑠璃子は魔法を信じるかい？」

「魔法？そんなもの、あるわけじゃないじゃない。おかしなお祖父様」

「ハハハハ。普通はそう思うだろうね」

「？」

「でもね、瑠璃子。この世にはあるんだよ。魔法という名の力がね」

「そうなの？」

「魔法はね。力なんだよ。瑠璃子が頑張つて逆上がりをしたり、お遊戯をしたり、習い事をしたりするのは根源的には同じなんだよ」

「……よくわかんない」

「今は分からなくてもいい。だが、何れは必ず瑠璃子もそれを知らねばならない時が来る」

「ふーん。……瑠璃子も魔法を使えるようになるの？」

「ハハハハ。それは無理だよ。我が一族には魔術回路が無いからね。でも、魔法は使えずとも魔法のことは知つてているんだ」

「どうして？」

「魔法を使う人たちと昔からのお友達だからだよ瑠璃子」

「おともだち？」

「そう。だから、色々知っている。聖杯、聖杯戦争、英霊……」

「……」

「……………」

「……？」

「……いや、何でも無いよ。フフ」

「本当におかしなお祖父様」

「そうだね。おかしなお祖父ちゃんだ」

（魔法……確か、お祖父様が昔そのようなことをお話になられた時に、『聖杯戦争』という言葉を聞いた気がするわ）

瑠璃子は我聞の顔を見る。

「……お嬢様？」

「爺や、あなたは聖杯戦争について知っているんじゃないか？」

「何故、そのようにお思いで？」

「あなた、お祖父様と昔からの知り合いと言っていたじゃない」

「……………」お嬢様」

我聞は大分間を空けてから答えた。

「それをお聞きになられれば、もう二度といつもの暮らしに戻る事が出来ませぬ。それでもよろしいのですか？」

「……訳知りつてわけね」

瑠璃子は我聞の顔をじつと睨み付ける。

「この私に隠し事は止めなさい！私への忠義があるのならば、全てを話すのよ！」

「隠しておかねばならぬものというのもございます瑠璃子お嬢様。話せばお嬢様の……」

「いいわよ。どうせ、今のままなら惨めつたらしい未来しか無いもの。それが好転するかも知れないのならば、取り敢えず知っておきたいわ」

「……例え惨めでも……命の危険は少ない筈ですが」

我聞は瑠璃子に聞こえぬように小声で呟いた。

「……いいでしょう。私の知る限りのことをお話いたしましたでしょう。そう、久宝院家の真実を」

「……そう」

我聞から話を聞き終えた瑠璃子はあまりに荒唐無稽な内容にどういった表情をすればいいのか分らないでいた。

「我が九宝院家が、魔術協会や聖堂教会とやらのスポンサーだったなんてね。あまりに胡散臭すぎて逆にリアリティーがあるわね」

「リアリティーも何も事実です故」

「で、その元スポンサーの末裔に今回の招待状…偶然では無いわね」

「左様で」

「……………」

瑠璃子は身震いする。

「瑠璃子お嬢様。もしや怖気づかれましたか？今ならまだ引き返すことも出来ますが

……………」

「違うわ、爺や。これは武者震いよ」

「！」

何時の間にか瑠璃子の口の端がぐっと持ち上がっていた。

「家系が落ちぶれ、両親も死に、遺産も残り僅か。絶望しかないと思っていた私に訪れた千載一遇のチャンスよ？燃えないわけがないわ」

「お嬢様……………」

我聞は瑠璃子のそういう表情を初めて見た。暫く目を瞑るが、やがて決心したかのよ
うに再び彼女の顔を見る。

「……いいわ。聖杯戦争とやらに是非参加させて貰おうじゃない。そして勝って願いを
叶えさせて貰うわ。その為にも」

瑠璃子は手紙を再び手に取る。

「このクロサキつてのに会いに行くわ」

お姉ちゃんに会いに行く

「~~~~~♪」

草壁真は何やらメロディを口ずさみながら街を歩く。何処かで聞いたことがあるよ
うな、でも思い出せないメロディ。

「……………」

「……………」

街行く人々が思わず真のことにを見る。幼い顔つきに似合わぬ黒いアイシャドウと口
紅、長い黒髪をアツプにし、全身を黒いゴシッククロリータ調の服に包んだ真は一際目立
つ存在であった。時折、左手に抱えたテイベアへ話し掛けているのもそれに拍車をか
ける。真は明らかに周りから浮いていた。

だが、それを差し引いても真は美人であった。故に、すれ違う度に男性の目を引いて
いる。女性でさえ、素直に真のことを可愛いと認識する程である。

だから、真が声を掛けられるのも必然であった。

「へい、彼女！」

人通りの少ない路地に入ったのと同時に背後から声を掛けられ、真はピタツと立ち止

まる。そして、ゆっくり後ろを振り返ると、二人組の男たちと目が合った。

「ヒョー。可愛いね君イ」

「俺らと遊ばない?」

キョトンとした真の顔を見てそう言ってきたのは、大学生くらいと思われる背の高い男と背の低い男であった。不良っぽい出で立ちと顔つきから、あまり素行のよろしい者たちでは無いだろうということが一目で分かる。どうやら、真はこの二人にナンパされたようであった。

「……?」

真は念の為、自分を指差して二人組へ確認する。と、二人はうんうんと首を縦に何度も振って肯定した。

「ねえねえ。君、名前は?」

「何処の子?」

「そのゴスロリは趣味なん?」

「何か答えてよ〜」

二人組はそうやって真へ矢継ぎ早に話し掛けてくる。その目は飢えた野獣、といったところか。何としてもお持ち帰りしてやろうという魂胆が表情から透けて見えた。

「一緒にお茶してくれるだけでもいいからさ〜」

「頼むよ〜」

ニヤニヤと笑いながら男たちは言った。そんなつもりは毛頭無いというのが伺える程に助平心丸出しの顔である。

「……………い、いよ」

真は少し考えるような仕草をした後、そう言つてニコツと微笑む。すると、二人組は互いに顔を見合わせて嫌らしく笑う。

と、その時、真は徐に二人組の内、背の高い方の手を掴む。

「んあ？」

「…………ボクはいいけど、君たちはいいの？」

そう言つて、真は自身の胸へ躊躇なく男の手を押し付けた。

「!?!」

ある筈の感触が無い。女性特有の柔らかなあの感触が。いくら、華奢で胸が小さくともこれは度が過ぎてている。

男がそう疑問を抱いたのと同時に真は口を開いた。

「ボク…………男だよ？」

「げげッ!?!」

男は真の言葉に一瞬で不機嫌な表情になり、その手を強く振り払った。

「ふ、ふ、ふ、ふぎけんなてめえ!!」

「…?声を掛けてきたのはそつちでしょ?」

「うるせえ!!この変態野郎!!」

返す刀で背の高い男は真へと殴り掛かって来た。完全な八つ当たりである。

だが、真は難なくそれを交わすと、バランスを崩した男の軸足を厚底のブーツを履いた足で払った。男は思い切り前のめりで転倒し、顔を地面へ強く打ち付ける。

「ぐへっ!!」

「アハハハ。まるでカエルさんみたいだね。面白〜い」

「て、てめ…」

背の低い方の男がポケットから白く光るものを取り出した。小型のナイフである。

しかし、真は一切動じなかった。

「君もボクと遊ぶの?」

「…?!?」

男は、そう言う真の顔を見て思わず凍ってしまふ。言葉では面白いと言っていた真の目は、全く笑っていないからだ。一切の感情が排除された空虚な目が鈍く光っている。その目で見つめられると、まるでレーザー光線でじわじわと焼かれるような痛みが男の心臓を襲っていた。その視線はまるで、見つめられると石化してしまうというメ

デューサのようである。手にしたナイフが、まるで何の役にも立たないと錯覚させられそうであった。

「て、て、て、てめええええええ！」

「ボクと遊んでくれるんだね？」

真は再びニコツと笑う。その瞬間、強力な殺意を男たちは感じ取った。喧嘩も数える程しかしてないような彼らでさえ感じ取れる程の殺意。それはまるで極寒の地の大雪を裸で受けているような状態であった。

「う、うわああああああああああああ」

背の低い男はナイフを放り捨てると、形振り構わず走り出し、その場から逃げて行つてしまった。

「お、おい、待て！待てってば!!」

背の高い方の男も急いで立ち上がると、逃げた相方の後を追って走って行つた。真の殺意に心から恐怖し、これ以上やり返そうなどとはとても思えなかつた。

その様子を真は何の感慨も無く、ただ見つめている。と、逃げる二人の背中へ指鉄砲を向けた。

「……バン！」

銃声を真似てそう言うと同時に指先から何かのエネルギーのようなものが放たれた。

「がつ!？」

それを受けた背の低い方の男がバタツと倒れた。口から泡を吹き、白目を剥いている。

「お、おい!大丈夫か!？」

「……バン!」

真は躊躇なく二発目を放った。それは、背の高い方の男の側頭部に命中する。まるでハンマーで思い切り殴られたような衝撃に男は一瞬で気絶してしまう。

男たちがぐったりしているのを見てから、真はポツリと呟いた。

「……つまんないの」

真は笑みの消えた心底つまらなそう顔になると、踵を返して再び歩き始めた。

「あくあ。本当につまんない。……ねー?つまんないよねー?」

真は歩きながら左手のテイベアへ話し掛けた。当然ながら、テイベアからの返事はない。だが、真はうんうんと納得したかのように頷いている。

「やっぱり君もそう思うんだね?……アサシン」

真は同意を得られて嬉しいとでも言うように僅かに笑みを浮かべた。

「……でもね、もうすぐ嬉しいこと。楽しいことがあるんだ。楽しいことは君も知ってるでしょ?アサシン」

「テディベアは相も変わらず沈黙を貫いているが、構わずに真は話を続けた。

「嬉しいことはね。やつと会えるんだ。ボクの、お姉ちゃんに。知ってる？ボクのお姉ちゃんは魔術師なんだよ？ボクと同じ魔術師なの。君にも早く会わせたいなあ。きつと気に入ると思うんだ」

そう言う真の顔は何時の間にか満面の笑顔に変わっていた。それだけ見れば、純粹無垢な可愛い少女と言っても差し支えは無かつたろう。

「……早く会いたいなあ。お姉ちゃん」

真は胸に下げたロケットを手に取ると、中を開いた。そこにあつたのは、一人の少女の顔写真であつた。真とよく似た黒く長い髪をツインテールにして、幼いながらも、凛とした自信に満ちた顔つきをしている。真は写真の少女をじーつと見つめる。

「……待っててね。お姉ちゃん。今すぐ会いに行くから」

真はロケットをしまうと、前を向いて歩き続けた。

真は今、向かっている。

もうすぐ「お姉ちゃん」が帰ってくる冬木市へと向かつて。

「大好きだよ。お姉ちゃん」

金、金、金

昼下がりの住宅街。

そこは、街の喧騒とは打って変わって、閑静で落ち着いていた。

早めの買い物帰りの主婦たちが井戸端会議をしたり、まだ幼稚園にも行っていない子供たちの無邪気な遊び声を上げていたり、何一つ変わらぬ日常がそこには存在していた。

「誰が返すかつつ!!」

「ああん?」

「ひいつ!」

そんな平穏とは、大きくかけ離れた会話が、住宅街のど真ん中で繰り広げられていた。

「……お前、今何て言った?」

馬堀政美が、しわくちなやな服を身に纏った初老の男へと詰め寄る。互いの顔と顔の距離は僅か数センチといったところであった。坊主頭で強面の大男がそんな間近に来ると、威圧感がとてつもないものになる。

「どうやら耳悪いんで、よく聞こえなかったよ。悪いけどもう一度言ってくんない?こ

の距離ならよく聞こえると思うからさ」

「あ、あの……」

「ああっ!？」

「ね、ねえもんはねえつつつてんだよ!!」

初老の男は馬堀から距離を取ってそう吐き捨てるように言った。所々、齒の抜けた口からゼイゼイと痰の絡んだ呼吸をする。

「し、知ってつぞ!てめえらみたいなところから借りた金はなあ!返す義務はねえんだよ!」

「……だから返さねえってか?他人様から金借りていて?」

「け、警察呼ぶぞ!!この闇金野郎!!」

初老の男は勝ち誇ったように言った。しかし、馬堀は一切動じる素振りを見せずに顎に蓄えた髭を擦っている。

「……あつそ」

「分かつたらとつとと帰れ!!」

「で、それがどうかしたわけ?」

「ああ!?!」

初老の男は何だコイツ……という目で馬堀を見る。その時、たまたま警官が自転車を漕

いでやって来た。初老の男は渡りに舟とばかりに警官へ声を掛ける。

「おおおい！お巡りさああん！」

「！」

警官は自転車を止めて、二人の元へ近付いていく。

「どうかしましたか？」

「こ、こ、こいつ！こいつを逮捕してくれ！闇金業者だ！このままじゃ、こ、殺される！」

「えい！」

警官は馬堀の顔を見た。警官も身長があつてそれなりに体躯のいい方であるが、馬堀はそれよりも更に大きく、見上げるような形になる。凡そ、二メートルくらいはあるだろう。

「……ちよつとお話いいですか？」

警官が恐る恐る馬堀へと尋ねた。その背後で、初老の男は再び勝ち誇つたように笑う。

しかし、それでも馬堀は動じない。懐から何かを取り出すと、それを無言で警官に見せた。

「これは……認知症ケア専門士の証明書、ですか？」

「……この度はご迷惑をお掛けして申し訳ございません」

馬堀は丁寧な口調でそう言うと、大きな体をくの字に曲げ、頭を下げた。警官は「ああ……」と頷くと、彼の肩をポンポンと叩いた。

「……そうか、大変だったね。まあ、頑張つて下さいね？」

「ご理解頂けて何よりです」

「……………はあ？」

初老の男は二人のやり取りを見て、思わずそう溢した。

「お、おい！アンタ！何してんだ！そいつをとつとと捕まえ……」

その時、馬堀は初老の男の腕を思い切り掴んだ。

「……ハイハイ、早く帰りましょうね。鈴木さん」

「いのでででで!!は、離せ！離せえ〜!!」

「それでは、失礼します」

「お仕事ご苦労様です」

そう言つて警官はその場を離れていった。警官の姿が見えなくなると、馬堀は初老の男を乱暴に地面へ転がす。

「いだう！」

「……鈴木、てめえ手間掛けさせんじゃねえよ」

「な、な、なんでえ!?!」

自分の思惑通りにならなかったことに鈴木と呼ばれた初老の男はひどく狼狽している。馬堀はやれやれと先程警官へ見せたものを再び取り出した。

「……これはなあ、認知症ケア専門士の証明書でな。お前みたいな奴への保険なんだよ」
「認知……症？」

「お前みたいな年齢の奴がお巡り呼んだときにこれ見せるとな。大抵、ボケジジイが暴れて迷惑掛けてるって見なされんだよ」

「なっ!？」

「……資格って大事だよな。知ってるか？今の時代、ちゃんと勉強すりゃ、誰だつてこの程度は取れるんだぜ？」

馬堀は不敵に笑った。そして、鈴木の前髪まみれの髪の毛を思い切り鷲掴みにすると、力付くで引つ張りあげた。

「いでででででで!!抜ける、抜けるくく!!」

「おい、てめえ。もう一度同じようなことしてみろ。その時は地獄見せるぞ？」

「は、は、はいいいい!!し、しません!!二度としませんから離してええええ!!」

「よし。じゃあ、払え」

「ひっ…、い、今手持ちが……」

「手持ちが無いなら恵んで貰うんだな」

「え？」

「幸い、この時間帯はいい感じに主婦とかが歩いてくるからな。土下座して頼めば一人か二人はてめえみたいなクズにも恵んでくれるんじゃないか？」

「そ、そんなあ！」

「やれ」

「あ……ああ………」

鈴木は観念して地面へ座り込んだ。

「……いやあ、アニキは凄いツスわ。結局、あの鈴木から今月の利息分をきっちり回収したじゃないですか。いや、ホントに凄い」

短髪のちよつと頭の悪そうな男が尊敬の眼差しで目の前に座る馬堀へ言った。

場所は変わって、ここは某所のファミレス。鈴木から利息分を回収した馬堀は部下の一人と少し遅めの昼食を取りに来たのであった。

「……藪から棒に何だサブ？仕事だから当たり前前だろ」

「だとしても、アニキの集金率ほぼ百パーセントじゃないですか。マジ尊敬ツスわ」
「声大きいよ」

「あ、すいません……」

サブと呼ばれた部下の男はすぐに声を小さくした。

「おい、サブ。こういう場所で金貸しだってバレるような会話すんな」

「あ！すんません！」

馬堀に窘められ、サブはテーブルに両手をつけて頭を下げた。

「ご注文のイタリアンハンバーグとナポリタンをお持ちしました」

そのタイミングでウェイトレスが注文した品を持ってきた。強面の男二人のこの構図に一瞬ウェイトレスは止まったように見えたが、すぐにトレイの上の料理をテーブルへ並べ始める。

「ん？おい、姉ちゃん。ライスはどうした？」

サブがそう言うのとウェイトレスはハツとした顔になる。

「申し訳ございません。只今、お持ちいたします！」

「おいおい、ハンバーグだけ食うとか有り得ねーだろ。ライスも一緒に持つてくんのが常識じゃねーのか？」

「た、大変申し訳ございませんでした！」

「おい、サブ」

「はい！何ですかアニキ？」

「お前、少し黙れ」

「へ、へえ……」

途端にサブは意気消沈したように黙り始める。次に馬堀はウエイトレスへ視線を向けた。

「あの……」

「……は、はい。何でしょう」

「これ、中身入っていないから新しいのと変えてくれる？」

そう言つて馬堀はタバスコの小瓶をウエイトレスへ渡した。

「は、はい。只今、お持ちします！」

ウエイトレスは急いで厨房の方へと向かつていった。

その後、無事にライスとタバスコは届けられ、馬堀とサブは食事を始める。

「……イタリアンハンバーグって、何処がイタリアンなんスカねえ？ トマトとチーズ使つてるからツスか？」

「何それ？ 俺に聞いてんの？」

「い、いえ、独り言ツス」

「でかいんだよ。てめえの独り言」

うんざりした顔で馬堀はナポリタンへタバスコをかけ始めた。小瓶を小刻みに振つ

て、中の液体を大量にナポリタンに染み込ませる。ぐちやぐちやにかき混ぜた後、黙々とそれを口の中に運んでいった。

「…うへえ。辛くないツスカ、それ？」

「全然」

「そうツスカ」

「無駄口叩いてないでとつと食べ。次の集金があるからな」

「へ、へえ！」

急いでハンバーグとライスを掻き込むサブを尻目に、馬堀はゆっくりとナポリタンを片付けた。

ファミレスで食事を終えた二人はその足で、とあるマンションへと向かった。目的は勿論そこに住む人間である。悪魔だの呪いだのオカルトめいた怪しい研究が趣味の老人であったが、債務者である以上は容赦なく取り立てねばならない。

「うへえ、何時来てもここ不気味なんだよなあ。暗いし、あのジジイ以外は他に誰も住んでいないとしか思えないし、あのジジイも何か魔術の研究とか胡散臭いことしてたし…」

「置いてくぞ、サブ」

「あ、待って下さいよアニキー！」

おどろおどろしい雰囲気の中を全く意に介さずに進んでいく馬堀。サブも慌ててその後を追った。

やがて、四階の奥の方にある部屋の前へ立つと、馬堀は呼び鈴を鳴らす。何度鳴らしても反応が無い為、馬堀はドアを力任せにドンドンと叩いた。

「世良さん。いるんでしょ？出てくださーい！」

そう呼び掛けてもやはり反応が無い。ドアノブを回してみると、どうやら鍵は掛かっていないようだ。馬堀はドアを開けると、躊躇なく中へ入った。サブもその後が続く。中はカーテンを閉めきっているからか、暗黒に近い状態であった。

「うわー！何も見えねえ！」

「……………いちいちリアクション取るな。五月蠅いんだよお前」

馬堀は濃い闇の中、壁に手をつけ、手探りで電灯のスイッチを求める。やがて、それっぽい感触を探し当てたのでスイッチ押しききものをパチツと動かし。と、電気が点く。あまり明るくは無いが、室内の様子は何とか分かる。

「あ、やっと電気が点い……………うわあああああ!!!」

サブが何かを見つけ、驚きのあまり尻餅をつく。そこには壁にもたれ掛かる老人の姿があった。首にはコードのようなものが巻き付いている。

明らかな自殺体であった。

「うわわわわ……ど、どど、どうしやしょアニキ!? け、警察呼びやすか?」

「馬鹿言つてんじやねえ! サツなんか呼んだら事情聴取とかで面倒臭いことになんだらうが!」

「ひっ!」

「……チツ、死ぬなら金返してから死にやがれ」

馬堀は老人の亡骸へ向けて舌打ちをする。突然の死体にも彼は動じなかった。何故ならば、これが初めてでは無かったからだ。債務者の末路は大概こうなる。闇金に手を出すということは、その時点でまともな人生のレールから外れるのと同じようなことなのだ。そうなれば、このように無惨に死ぬか、惨めつたらしく生かされ続けるしかない。若い身空でこの仕事を選び、以来十年以上も続けてきた馬堀はそんな人間を何人もその目で見てきたのである。これもその一つに過ぎない。

「ん?」

よく見ると、老人の周囲には開いた本が散乱している。また、何やら文字か記号のよなものも確認出来た。壁や床にびっしりと記されている。

(遺書……か?)

馬堀は徐に落ちていた本の一つを拾い上げ、読んでみる。薄明かりで見えにくいの

と、見たことも無い文字で書かれていたので内容は全く分からないが、挿し絵の魔方陣らしきものから、オカルトめいた本なのだということは分かった。

(何だこれは?……何れにせよ、これ以上ここに長居は無用だな)

馬堀は本を地面へ捨てると、踵を返して部屋から出ようとした。

と、その時、周囲が突然明るくなる。

「おいサブ!これ以上電気点けんじゃねえ!」

「お、俺じゃ無いツスよ!」

確かにサブはまだ床に尻餅をついたままであつた。それに、電気にしては局地的且つ明る過ぎる。馬堀は背後を振り返つた。すると、そこには何時の間にか一人の男が立っていた。

「!?誰だ、てめえは!」

馬堀が恫喝するかのように聞くと、男は答えた。

「……俺の名はアーチャー。お前が俺のマスターか?」

「ああ!」

(こいつ、何言つてやがる?)

流石の馬堀もこれには戸惑いを隠せなかつた。

そして、彼はまだ知らなかつた。

これから始まること。そして、その重大さを。

一族の悲願

緑川の中心には由緒正しい神社がある。その名も緑川神社といった。

神主の名前は真行寺正幸。家族五人でそこに住んでいる。真行寺家は代々この神社の守人であり、正幸はその十六代目にあたる。

かつては守人として高い霊力を備えて、その土地を代々護つて来ていた一族であった。

霊力とは内に秘めた靈魂を力とし、悪霊、妖、物の怪といった類のものから身を守ること、そして撃退することが可能となる。故に、霊力の高さは一族のアイデンティティであり、一族の象徴であった。

だが、歴史を重ねる内に霊力は段々と失われていってしまい、やがて守人の名も形骸化していく。

真行寺家が霊力を失っていったのは、子孫を作る上で異なる血が混ざっていったのが原因であった。彼らは基本的には近親にて子孫を作っていて、それで一族としての霊力を保っていたのだが、世相の流れがそれを許さなくなる。近親での恋愛、出産は禁忌として激しく弾圧され始めたのだ。真行寺といえ例外でなく、仕方なしに身内以外との

交配を余儀なくされ、現在へと至る。

以前までは、その土地全てを護れる程の靈力を持っていた真行寺家も今では緑川神社さえ護れるかも怪しい程に低下していた。

一族の中には、それを齒痒く思う者も当然いて、正幸もその一人である。失った靈力をおかつてのように取り戻すことは一族の悲願であった。

真行寺家に一枚の招待状が届いたのは、そんな折のことである。

「……………いいか、お前たち？」

「……………」

「……………」

正幸は目の前で鎮座する娘二人を見る。

「お前たちはこれから聖杯戦争へ参加することになる。そのことは理解しているな？」

「……………はい」

「……………理解しています」

娘二人は同じ顔、同じ姿、同じ仕草で同時にコクリと頷いた。

彼女たちは一卵性双生児、所謂双子である。名をそれぞれ一葉、二葉と言った。

前をぱつっつんとした長く美しい黒髪、白く透き通るような肌、黒曜石のような瞳。そ

れらが彼女たちの清楚さを引き立てている。

「……本来であれば、お祖母ちゃんがマスターとして適任だったのだが、ここ最近は体調不良もあってな。だから、その代役はお祖母ちゃん以外で一番霊力の高いお前たちしかないかった。勝つ為にはそれが一番の近道なんだ」

正幸は無念そうな表情をしながら、彼女たちではなく、まるで自分自身へ言い聞かせるように言った。

「……すまないな。変わってやれるものならば変わってやりたい。だが、私は霊力が低いのだ」

「大丈夫よ、お父さん」

「気にして無いわ、お父さん」

一葉、二葉はニツコリと微笑んでみせる。

彼女たちの気遣いに正幸は申し訳無きように頭を下げた。本来であれば、一家の長である自分がマスターとして参加すべきだったのだろう。だが、客観的に見ても、自身の霊力では他の参加者に不覚を取りかねない。それ程までに、娘たちとの霊力には差があった。

霊力は元来、男性より女性に強く受け継がれる性質がある。故に、男性である正幸がどれ程鍛練しようと、母や娘たちの生まれ持った霊力には敵わないのだ。

代々、真行寺家では男子が表立って全てを動かす、女子はその靈力を男子の為に使い続けるという習わしになっていた。時代の移り変わりによつて多少はその役割に変化も生じたが、根本は変わっていない。

「……………」

その時、ガラツと障子を開け、一人の老婆が現れた。

「母さん……!!」

「……………フーン！」

現れたのは、真行寺九十九。

正幸の母であり、一葉と二葉にとつては祖母である。長い白髪とその形相から、まるで山姥を思わせるような姿をしていた。

「正幸。私はやれるよ。ゴホツゴホツ……」

九十九が苦しそうに咳き込むと正幸が心配そうに駆け寄る。

「無茶をしてはいけません。……寝て下さい」

「年寄り扱いすんじゃないよ」

「年寄りじゃないですか！」

「言うようになつたじゃないか」

九十九はニヤリと笑つて見せた。だが、顔色はかなり悪そうで、立っているのがやつ

とに見える。実際、九十九は二月程前から体調を崩してしまっていて、ずっと寝た切りであった。

齢八十三歳。よもやという可能性も十二分にある。

「……正幸、私はやるよ」

それでも九十九は言った。今にも崩れ落ちそうな体とは裏腹に、その目にはキラキラと強い光が宿っている。

「確かに長くは持たないかも知れない。でも、それならすぐに終わらせればいいだけさ。全てが終わってからなら、死んじまっても私としては文句無いね」

「そんな馬鹿なことを言わないで下さい」

「何が馬鹿なことかい！」

そう言うと、九十九は孫娘たちへ視線を向けた。

「……何が悲しくて、前途ある可愛い孫たちを死地へ送らなきゃならんのか。死ぬのはねえ、年寄りのが先なんだよ」

「……それこそ無駄死にですよ。霊力は確かに母さんの方が強いですが、そもそもまともな戦える体じゃない。スタートラインにさえ立てないんですよ？」

「孫死なせるよりはマシだわね」

「母さ……」

「お祖母ちゃん！」

正幸の言葉を遮るように一葉が口を開いた。

「これは私たちが選んだことです」

「覚悟は出来ています」

一葉も続く。

二人はじつと九十九の顔を真正面から見つめた。岩清水の如く澄んだ瞳の中にある確かな光。その光には彼女たちの意思の強さが現れているかのようである。

それを見て取った九十九は、流石に押し黙ってしまった。

「……聖杯戦争に勝ち、聖杯を手に入れる」

「……一族の望みを叶える」

「それが、私たちの」

「願い」

二人はそう言つて九十九の手を取る。

暫くして、九十九もまた無言で彼女たちの手を握り返した。その目には薄つすらと涙が滲んでいる。

それを見守ることしか出来ない正幸は悔しそうに彼女たちから目を背けた。

「あなた……」

そんな彼へ声を掛けたのは、正幸の妻であり一葉、二葉の母である巴であった。

「……巴。今日程、自分が矮小な存在であることを感じた瞬間は無い。本来であれば私がマスターにならねばならなかった筈だ」

「仕方ないわ。それはあなただけのせいではありません」

「……男に産まれてしまった。そのことが既に罪だったのだ」

「いいえ、それは違います。あなたが男で無ければ、こうして私があなたと出会うことも、あの子たちを授かることも無かつたのですから」

「……………」

正幸は無言でその言葉を飲み込む。

「……………ここで過ぎたことを言っても仕方が無い、か。……サーヴァント召喚の儀式を始めるのでしょうか。来なさい。一葉、二葉」

「はい」

「はい」

二人は正幸の言葉に素直に従うと、彼の後を追った。

巴は心配そうに三人を見送り、九十九はさつきと自室へ戻ってしまふ。

正幸たちは外に出ると、そのまま奥の蔵の中へと入った。そこには既に魔方陣が描かれ、儀式の準備が完了していた。

「……全て、クロサキ氏の指示通りだ。さあ、後は二人で仕上げだ」

「……………」

「……………」

二人は同時にコクリと頷くと、共に何やら詠唱を始めた。これもまたクロサキという男から教えて貰ったものである。そうすることで彼女たちの内どちらか一人をマスタ―としてサーヴァントが召喚されるという。

「……………」

正幸はこの土壇場に来て、儀式に対して疑心暗鬼になる。

儀式の準備をしている間は藁にもすがる思いであったが、いざ直前となると妙に冷静になっている自分に気が付いた。

(……聖杯戦争に勝利した者は、自身の願いを何でも叶えることが出来るのです)

果たして、そんな上手い話が本当にあるのか。

あの神父の男は胡散臭くは無かっただろうか。

聖杯戦争が本当にあったとして、果たして自分たちが勝利することが出来るのか。

頭の中ではいくつもの疑念が浮かび上がり、その度にそんなことはないかと自問自答する。

だが、靈力の喪失は最重要課題。持っている靈力をある程度高めることは出来ても、

元の靈力を増やすことは出来ない。

つまり、失われた靈力は通常では取り戻す方法が無いのだ。最早取り返しのつかないところまで来た靈力低下に対しての解決策はこの手段しかないのが現実なのである。

「!!」

と、その時、魔方阵から強い力が溢れてくるのを正幸たちは感じる。瞬間、強い風のようなものがこの場に吹き荒れ、強い光が魔方阵から発された。

「ハ、ハこれは……!?!」

眩い光の中、一人の人間が魔方阵から現れていく。

異人の男性。彼は閉じた目を見開くと、正幸たちをその視界に入れ、口を開いた。

「……我は此度、ライダーの名を名乗らせて貰う者だ。お前が、我のマスターか?」

男は西洋系の顔立ちなのに、日本語で話し掛けて来る。正確には、マスターが理解可能な言語で話すとのことらしいが、そんなことはどうでも良かった。それよりも、男から感じる靈力のような強大な力。それが正幸を震わせる。

「ほ、本当だった……本当だったんだな!」

一先ず、正幸の疑念の一つは解決された。そうすれば、後は目の前の彼を使って勝利するだけだなのだ。

「……勝てる。勝てるさ!」

正幸は確信を持って呟いた。

「先代より衰えたとはいえ、我が一族の霊力は大きなアドバンテージ。そこいらの敵に負ける筈など無い。それに、このサーヴァントとやらの力……」

正幸は歓喜の表情を浮かべる。

「いける……。いけるぞ!!負ける筈など無い!!そうだろ、ライダー……!!!!」

一族の悲願を達成する。

その喜びを想像しながら正幸は叫んだ。

ギャンブラー

カジノ。

それは、快樂と狂気の宴の場。

ある人間は富を求め、ある人間は刺激を求め、数々のギャンブルに挑んでいく。

その結末は神のみぞ知るところであり、一夜で財産を築く者もいれば、一夜で全てを失い素寒貧となる者もいる。

全ては運で、勝つか負けるかというシンプルなルールに人生がそのまま乗っかっていくのだ。

今宵も狂人たちが己の人生を賭けて戦いを挑んでいる。

「Ohhhhhhhhhhhhhhhhhhh!!」

突如、どよめくフロア内。

衆目を一身に浴びているのはルーレットに挑む一人の男性であった。

彼の名は渡口零。

周囲に様々な外国人がいる中、東洋人の顔つきでプラチナ色の髪が異彩を放ってい

る。

「……回せよ」

手持ちのチップ、凡そ数千枚はあるかと思われるそれを一点賭けすると、渡口は挑発するようにディーラーへ言った。まるで負けるわけが無いと確信しているかのようである。

ディーラーはポーカーフェイスをキープしたまま玉をルーレットの中へ放り込む。その手つきはとて鮮やかであった。カラカラと回るルーレットの中で、玉がまるで舞でも踊っているかのように跳ね上がっている。

固唾を呑んで見守るギャラリイたち。その一方で渡口は特に興味も無さそうに欠伸なんかをしている。ルーレットの中さえ見てはいない。

と、その時、ディーラーが僅かに口角を持ち上げる。ギャラリイの中にはディーラーのその表情を見逃さなかった者もいて、「あくあ」と渡口を哀れむように見ていた。

熟練のディーラーであれば、自身の狙った場所へ玉を入れることが出来る。このディーラーは渡口のベットした場所へ入れないように玉を放り、彼の勝ち分の回収を図ったのだ。

卑劣では無いかと思うものもあるだろうが、このディーラーの行為は決して間違っていない。カジノは胴元が勝たなければ経営は成り立たない。どんなに馬鹿ヅキする

対して、渡口はまるでその結果が予め分かっていたかのように冷めた様子でルーレットの方を見向きもしなかった。

そして一言だけ呟く。

「……つまんねえ」

「……また、やっちゃまったのかい？」

大柄な妙齢の女性がタバコを片手に言った。彼女は都心の片隅でたった一人しがないうバーを経営している。カジノからも比較的近く、一勝負を終えた後の者たちの憩いの場であった。もつとも、最近是不景気のせいか客足も遠のいていて、客と言えば目の前でダルそうに酒を飲むプーチナヘアーの東洋人しかいないくらいなのだが。

「……アンタ、そんなことばっかしてたら、何時か本当におっ死んじまうよ？」
当の渡口はグラスに入ったビールを一気に煽り、何処吹く風である。

「……死にてえんだよ。俺はな。それも、ボロ負けしてな」

「何を馬鹿なことを言ってるんだい。酔っ払ってるのかい？」

「俺が酔わないこと、ママなら分かんだろ？」

そう言つて渡口は空になったグラスをママと呼ぶ女性へ差し出す。すると、彼女は手

際よく冷蔵庫からビールを取り出し、新しいグラスの中へ注いだ。

「はこよ」

「ああ……」

渡口はグラスを受け取る。グラスの中は泡に蓋をされた琥珀色の液体で満ちていた。渡口は暫くそれを見つめた後、一気に喉の奥へと流し込んだ。丁度良く冷えたものが泡の刺激と共に体の中を通っていく。

「……美味い」

「……しかし、勿体無いねえ。何で勝った分の金の殆どをばら撒くようなことすんだい？アタシだったらそんな大金入ったら一生遊んで暮らしたいけどね」

「……………」

つい三時間程前、カジノで大勝した渡口は手に入れた大金を持ってとあるビルの屋上へ行くと、飲み代分だけ取ってからそれを地面へ向けて文字通りばら撒いたのである。

突如、雨のようにドル札が降ってきて街は大混乱となったのであった。

「……別に、俺は金が欲しかったわけじゃないからな」

「じゃあ、何で賭け事なんかするんだい？賭け事なんて大概が金欲しいからやるんだろ？」

「……勝負さ」

「勝負？」

「……ヒリつくような勝負。刺激的で、常に死と隣り合わせな、そんな勝負がしてえんだよ」

「……相変わらず狂ってるね、アンタ」

ママはやれやれと肩をすくめて見せた。

「で、そんな勝負は出来たのかい？大勝したみたいだけどさ」

「……あんなのは勝負とは言わねえよ。勝つことが最初から決まってるようなのは勝負とは言わねえ」

「凄い自信だねえ」

「事実さ。俺は生まれてこの方、こういつた勝負に負けたことねえんだよ」

「そうかい。だのに、何でカジノへ行くんだい？もうこの街のカジノは殆ど出禁になつてんだろ？」

「……そんな勝負が出来るのが、そこしかないからだよ」

「アンタさあ。さつき、ボロ負けして死にたいとか言つてなかった？だつたらその辺でごろつきに喧嘩売つてきたら？すぐに願いが叶うだろうよ」

「……違う。そういうことじゃねえんだよ」

渡口はそう言うのと、つまみのマカデミアナッツを口へ放り入れる。

「……俺は、別に自殺したいわけじゃねえんだ。殴り殺されたいわけでもない。全身全霊を賭けた上で敗北し、死ぬ以外の選択肢が無くなる……死ぬなら、そんな最期を迎えたんだ。当然、最初から負けるつもりなんて一ミリも無い。その上での敗北が望みなんだよ。俺に勝ちの芽が全くない勝負だったら、それはただの自殺だろ？……そんな風に厳選していくと、結局最終的にはギャンブルに行き着いちゃうんだよ」

渡口は自嘲気味に笑った。

「ギャンブルは互いの運否天賦。ただ、それだけのシンプルな勝負だ。だから、いい感じにヒリつく。その時の運が足りない方が負ける。それはやってみるまでは分からねえな？ 刺激的でこれ以上無いくらいの平等さだろ？」

「なら、何でそんなに退屈そうなんだい？」

「……結局、最後には勝ちまうからさ。過程でどれだけ苦戦しても結果はいつも同じ。今回もそうだ。あのディーラーが最後に外してくるのは分かっていた。だから、それが失敗する方に賭けた。相手は熟練だ。失敗する確率なんて一パーセントに満たないだろう。勝負するのも馬鹿馬鹿しい賭け……だからこそ、ヒリつく。これで負ければ完璧だったんだが、どうやらギャンブルの女神は俺をとことん好きらしい。途中で分かっちゃまったよ。……これで、どうやって楽しめって言うんだい？」

「……そいつは難儀なことだ」

「……もつと俺に相応しい、もつともつとヒリつくような戦いがしてえんだよ」
「はいはい。……とここでさ、そいつはなんだい？」

ママはくわえタバコのまま渡口の持つ大きめの本を指差した。

「大事そうに抱えちやってさ。随分とアンタに不釣り合いに見えるけど、何の本なんだい？」

「……ああ、これか？ちよつと前に何処ぞの石油王とやらとギャンブル勝負した時に戦利品で貰ったんだよ。モノホンの魔術書らしい」

「魔術書？ちよつと眉唾過ぎないかい？」

「俺も最初はそう思ってた、小説感覚で読んでただけだよ。読み進めてくと意外と面白んだよ」

そう言うのと渡口は笑ってみせる。まるで少年のような無邪気な笑顔であった。

「特に気に入ってるのが、この本の中に書かれてる『聖杯戦争』って奴さ」
「何だいそりや？物騒な名前だけど」

「選ばれた七名がそれぞれサーヴァントとやらを呼び出して、最後の一人になるまで戦い合うんだと。勝ち残った者は聖杯により何でも願いが叶うらしい」

「……馬鹿馬鹿しいにも程があるね。まさか、そんなもん信じてんのかい？」

「ああ、信じてるさ。これ以上無いくらいのチャンスだと思ってるよ。最初のサーヴァ

ントの時点で運が絡んでるのがまたいい。こういうのは俺の力を活かせるからな。ただの喧嘩とは全然違う、正に俺の望んだ勝負の形だよ」

「……呆れた。アンタは相当なりアリストだと思ってたんだけどねえ。まさか、こんなお粗末なお伽噺を信じるなんてさ」

「そのくらい、俺は退屈なのさ。今も、な」

渡口はそう言うのと、ジーンズのポケットに突っ込んでいたくしゃくしゃのドル札数枚をカウンターへ置いた。

「……」馳走さま。多分、暫くはここへは来ないよ」

「暫く……って、またどっかへ行くのかい？」

「ああ。だけど、行くってよりは帰るって方が正しいかもな」

「帰る?..」

ママがそう聞き返すと、渡口は笑みを浮かべながら答えた。

「ちよつと日本へ帰るわ」

シークレット・スイーパー

シークレット・スイーパー。

政府公認の殺し屋集団。

それは、相次ぐテロ行為や関係者への暗殺行為に業を煮やした政府が作り上げた特殊機関であり、政敵を抹殺するのが主な任務であるという。

某国にて、政治犯罪が多発していた頃、そんな都市伝説が民衆の間で広まっていた。突拍子も無い話であるが、当時はかなりの人間に信じられていた。何故ならば、ある時期を境にその国ではそういった事件がピタリと起きなくなつたからだ。更にそれだけではなく、政府にマークされていた要注意人物が次々と変死体で発見されたのである。とても偶然とは思えぬそれらの出来事から、民衆はこぞつてシークレット・スイーパーの存在を口にした。

「政府に逆らえば、シークレット・スイーパーに消されるぞ！」

「シークレット・スイーパーなんている筈がない！ただの妄想だ！」

「しかし、現に反政府の連中が死んでいるじゃないか！」

やがて、その存在は民衆の間で激しい論争をも巻き起こすことになる。この事態を重

く見た某国政府は異例の発表を行ってシークレット・スイーパーの存在を否定し、それ以降は触れることさえしなかった。公式の一応の発表に論争の熱は冷めていき、やがて噂は風化して現在へと至る。

なお、先の変死体の事件について、その真相は未だ明らかにされてはいない。

「諸君！我々国民はこのままでいいのか?! いや、良くなどない!!」

狭い部屋の中で一人の男が熱く演説を行っていた。感情を包み隠さず、強く握る拳を何度も振り上げ、思いの丈を熱弁している。部屋いっぱい聴衆たちも固唾を呑みながら、男を見つめていた。

「我々は我々の手によってこの国をあの無法者たちから取り戻さねばならない！今すぐにだ!!」

「そうだそうだ！」

「腐敗した政府など打ち壊せ!!」

「殺せ殺せ!!」

演説が進むにつれ、場が一体となっていく、周囲を狂熱が支配していく。やがて集団は個となり、目的の力へと変わっていくのだ。そう、暴力という名の力へ。

朝陽を取り戻す会。

元々は現政府に対する不満や怒りを持った者たちで結成された組織であった。当初の活動はデベートを行ったり、政策に対するデモ行進を行ったりと比較的穏やかなものであったが、近年は過激化の一途を辿り、議員の襲撃や爆破予告など行動が直接的になっていった。今ではテロ組織として指名手配されるまでになっている。

本日は彼らの決起集会であった。組織の主要メンバーも全員参加している。こうして士気を高め、これより破壊工作を行おうというものであった。

なお、今まで壇上で演説していたのは組織のリーダー、段田一郎である。演説を終えた彼は、他の幹部たちが座っている席へと戻っていった。

「……さて、質疑応答に移る」

進行を担当している者が聴衆へと問い掛ける。ことを起こす前の最終確認のようなものであった。

「はっ」

聴衆の中で真っ先に手をピンと真っ直ぐ挙げた者が一人。進行役の男はその人物を指差した。

「その挙手した者。名前を名乗れ」

「はい。甲斐丙と申します」

「カイ・ヒノエ……変わった名だな」

そう言うと、進行役の男は書記係と思わしき者へ視線を向けた。書記係と思わしき男は、名簿のようなものを確認した後、進行役の男へ首を縦に振って返す。

「……よし。同志甲斐丙、前へ出る」

「はっ」

甲斐丙と名乗った人物が言われた通りに前へ出る。彼はスラツとした体格の背の高い男性で、フワツとさせた髪を金髪に染めていた。何よりも目を引いたのは、彼が般若のお面を付けていたことである。とは言え、そこまで周囲は彼のことを不審がってはいなかった。組織が組織だけに、身バレしたくない者たちも中にはいて、そういった者の中にはこうした変装をしている者もいるからである。

「……では、質問を許す」

「有り難うございます。まずは皆様こんにちは」

甲斐丙は穏やかな声でまず挨拶をした。緊張などは微塵もなく威風堂々とした様子である。

「それでは質問を。段田殿は、もしも人生の最期に好きなものを何でも食べられるとしたら、何を食いたいですか？」

場がしんと静まり返り、空気が凍りつくのが見て取れた。

「……同志甲斐丙、ふざけているのか？」

暫くして、段田が怒気を孕んだ声で問い質した。

しかし、甲斐丙は至つて真面目な顔と声音で答える。

「はい、ふざけていますよ。質問には特に意味などありません。……ちなみに私は寿司を食べたいですね。好きな店がありまして、その穴子が絶品なんですよ」

「……もう良い。下がれ」

「穴子が絶妙な煮加減なのもそうですが、やはりあの熟成したタレ。あれを口にしたら他の穴子など、とても食べられませんよ」

「もう良いと言っている!!」

「……どうやら、段田殿にはそういったものは無いようですね。残念ですよ」

「貴様、ふざけるのもいい加減に……」

「もつとも……」

それは一瞬の出来事であった。

怒つて前へ出た段田の首が、まるで最初からそうなるかのようにポーンと吹っ飛ぶ。その場にいた全員が何が起きたのかまるで理解出来なかつた。

「それを言つたところで、別に食べさせてあげようとか、そういうことでは無いのですけれどね」

甲斐丙は般若の面の下でニヤリと笑う。彼の手には長ドスが握られていた。

段田の首が壁に当たって跳ね返り、血しぶきをあげながら聴衆たちの方へ飛んできたところで、彼らは何が起こったのかを理解した。まるで輪唱のように悲鳴が次々と上がっていき、我先と逃げ出そうとする。

しかし、甲斐丙の次の行動は素早かった。奥にふんぞり返っていた幹部連中数名が動き出す前に全員斬首すると、進行役の男や書記係の男まで残らず斬り裂く。その間、僅か数秒程度。人間業では無かった。しかも、刃には一切の血液が付着してはいない。あまりに甲斐丙の剣の振りが速過ぎて、血がつかないのだ。

「さて、次はと」

甲斐丙は懐から何やら丸い物体を取り出すと、その上部のピンを外した。小型の手榴弾である。それを彼は逃げようとする聴衆たちの中へ躊躇無く投げ入れると、素早く先程まで演説が行われた教壇の裏へ隠れた。直後、強烈な爆音と爆風が巻き起こる。

「……………」

焼けた肉と血の臭いが一段と濃くなる。甲斐丙は、すくつと立ち上がると、室内を見渡した。地面は元は人間であつたらうバラバラになつた肉片や血溜まりで埋め尽くされている。また、爆心地から遠かつた者たちも破片が体のあちこちに突き刺さつて半死状態であつたり、吹き飛ばされた衝撃で手足が有り得ない方向に曲がるなど、息はあつても到底無事とは言えない状態であつた。

「……おやおや。火薬が少なかつたですかね？手製の爆弾なのでこういうことがよくあるのですよ。すぐに死ねなくてお辛いでしょ」

そう言うのと、甲斐丙は懐から完全密封の大きい水筒のようなものを取り出し、その身を周囲へ撒いた。油と鉄の混じつたような臭いが辺りに広がる。

「あと少しの辛抱です。もうじき楽になりますよ」

出入り口まで死体と半死人の中を悠々と歩く甲斐丙。去り際に火を点けたジツポライターを放り投げた。それが地面へ落ちるなり、物凄い勢いで火柱が上がっていく。炎の舞を背に、甲斐丙はその場から去っていった。

「苦勞」

そう言つて外で甲斐丙を待っていたのは、白髪の初老の男であつた。スーツ姿で威風堂々とした立ち姿である。

「お父さん！」

甲斐丙は面の下に明確な喜びの感情を表に出して、初老の男のことをそう呼んだ。

「わざわざ来て下さつたのですか？」

「なあに。久々に息子の顔が見たくなつてな」

「嬉しいなあ……」

甲斐丙は少し照れ臭さもありつつ、それでも本気で嬉しそうに言った。目の前の人物が彼にとつてどれだけ大切なのか、が第三者からも伝わるようである。

「向こうに車を停めてある。立ち話もなんだから、取り敢えず来なさい」

「はー」

食い気味で甲斐丙は即答した。初老の男はうんうんと頷くと、彼を連れて歩いていく。

暫くすると、細長い車が見えてきた。闇に溶けるような真つ黒のリムジンである。二人の姿を見るなり黒服の人物が後部座席のドアを開け、待ち構える。

「……後は頼んだぞ」

「……………」

すれ違い様に初老の男は黒服の男へそう耳打ちした。黒服の男はただコクリと頷く。

二人がリムジンに乗り込むと、黒服の男がドアを閉め、直後に発車された。

車内は外見同様に豪華で、本革張りのシートは勿論のこと、テーブルの上にはフルーツとシャンパンが置かれていた。初老の男はシャンパンを開けると二つのシャンパングラスへ注ぎ、その片方を甲斐丙に渡す。

「……一先ず、今宵の仕事の成功に乾杯といこうじゃないか」

「は、はい!!喜んで!!」

甲斐丙は嬉々としてグラスを受け取ると、面を僅かにずらしてから、それを一気に飲み込んだ。初老の男はその様子を嬉しそうに見つめた後、同じようにグラスの中身を飲み込む。

「……改めて、ご苦労だったな。我が息子よ」

「はい。お父さん。今日もお父さんの邪魔をするゴミ虫どもを葬り去ってやりましたよ！」

「相変わらず見事な仕事っぷりだな」

「今回は相手も間抜けでしたよ。決起集会ということで凶器を持参してもすんなり中に入れましたから。予め潜入していたというのもあって、連中は私のことを疑いもしなかったですよ」

「……お前がいてくれて本当に助かっているよ。何せ、世の中には私の行く手を阻む者が多いからな」

「お父さんの障害になるものは全て取り除く。それが私の使命であり、私の生きる理由ですから。当然のことをしましたまでですよ」

「頼もしいな」

初老の男はにんまりと笑うと、予め切り分けられていたメロンの一欠片を口の中へ運んだ。

「……いいメロンだ。決め細やかで繊細な味なのは勿論のこと、熟れ過ぎず適度な硬さを残しているのに噛むととてもジューシーだ」

「なるほど。では、私も頂きます。……確かにこれは美味しい。甘過ぎないからくどくないですね」

「……お前に話がある。一つ、頼まれてはくれないだろうか？」

「お父さん。私がお父さんの頼みを断つたことがありますか？」

「そう言ってくれると思っていたよ」

初老の男はメロンをもう一欠片口に入れ、軽く咀嚼した後に飲み込んだ。

「お前には、これに参加して貰いたいんだ」

「……『聖杯戦争』？何なのですかこれは？」

「平たく言えば、殺し合いだよ」

「なるほど。私の得意分野ではありませんか」

「そうだろ？詳しい話はこれから会う者が話してくれるだろう」

「分かりました。……今から楽しみですよ。お父さんの役に立てることが」

武者震いに打ち震える甲斐丙。

「必ずや、お父さんの希望を叶えましょう」

「吉報を待っているよ」

「はい！」

そうして二人を乗せたリムジンは闇へと消えていった。

登場人物紹介

登場人物紹介

秋山直（アキヤマ ナオ）

十七歳。緑川高等学校へ通う二年生。

成績優秀で運動神経も高い。容姿も良い方で女生徒からの人気も密かに高い。

皮肉屋で他人との関わりをあまり好まないが、決してコミュニケーションが苦手なわけでは無く、友人にあたる人物も何人かいる。

謎の衰弱に見舞われた叔母を救うために医者を目指していた。

趣味は読書。

秋山由布子（アキヤマ ユウコ）

三十六歳。

直の父親の妹で、直にとっては叔母にあたる。

快活で裏表の無い性格。多少、子供っぽい言動がある。

年齢よりも若く見られる容姿ではあるが、年齢のこと言われると少し凹む。全体的に

スリムな体型で背も女性にしては高い方。

元々は一流商社のOLであったが、彼女の兄が直を置いて失踪したのを切っ掛けに退社。以降は直を引き取り、友人から紹介されたバイト先で働きながら母親代わりに彼を育ててきた。

謎の衰弱に襲われ、一年前に倒れてからはずっと病院のベッドで過ごすことになる。

九宝院瑠璃子（クホウイン ルリコ）

十八歳。

城風女子高等学校の三年生。

かつて日本経済の中心にいた九宝院家の末裔。

気の強い性格で曲がったことを嫌う。故にキツイ言動も多く、一見冷たくも見えるが、その実自分よりも相手のことを第一に考える優しさも持ち合わせている。

癖っ毛を気にしているが、生まれつきなので半ば諦めている。

好きなものは紅茶。

東雲我聞（シノノメ ガモン）

七十歳。

長年、九宝院家に仕えてきた執事。生涯分の賃金を稼いだと自称していて、今はほぼ

無償で瑠璃子の世話をしている。

東雲茜（シノノメ アカネ）

十九歳。

我聞の孫娘で、メイドとして瑠璃子に仕えている。祖父を尊敬していて、彼のようになりたいたいとこの道を選んだ。我聞と違い、賃金は貰っている。

草壁真（クサカベ マコト）

十四歳。

れつきとした男子ではあるが、中性的な顔立ちと華奢な体格に加え、女装趣味から少女とよく間違われる。なお、女装の際にはゴシックロリータ調の服を好んで着ている。

一人称はボク。

何を考えているか分からないようにでいて、利己的な一面もある。

元々は外国に住んでいたのだが、“お姉ちゃん”に会う為に日本へとやって来た。

馬堀政美（マホリ マサミ）

二十八歳。

闇金で働く強面の大男。坊主頭に顎だけ髭を蓄えている。また、その身長は約二メー

トルで、まるでプロレスラーのような屈強な肉体を誇る。

見た目通り喧嘩には滅法強く、ヤクザを相手にしても一切怯まない胆力を持ち合わせている。その一方で、慎重な一面もあり、無駄な騒ぎはなるべく避けるよう考えて行動することも多い。

他者に対して容赦が無く、債務者からの回収率がとても高い。

好きな食べ物はナポリタンとハンバーグ。また、甘いものも好む。

池田三郎（イケダ サブロウ）

二十五歳。

政美の部下で通称はサブ。

お喋りで何か喋っていないと落ち着かない為、政美へ無駄に話し掛けてはいつも怒られている。

金髪に眉ぞりという敵つい見た目だが、喧嘩の腕は大したこと無く、頭もかなり悪い。政美をとにかく心酔している。

真行寺一葉（シンギョウジ ヒトハ）

十六歳。

青葉学園に通う高校一年生で緑川神社の巫女。

前をぱつつんとさせた美しい黒髪と黒曜石のように深い目が特徴の神秘的な雰囲気を持つ少女。

二葉とは一卵性双生児であり 彼女が姉。

真行寺の女子ということで先代には及ばないものの高い霊力を持つ。

真行寺二葉（シンギョウジ フタハ）

十六歳。

青葉学園に通う高校一年生で緑川神社の巫女。

一卵性双生児の為、一葉と全く同じ容姿をしている。

姉同様、真行寺の女子として高い霊力を持つ。

唯一、姉と違うのは左利きだということ。

真行寺正幸（シンギョウジ マサユキ）

四十五歳。

一葉、二葉の父親で緑川神社の神主。

男子として生まれたが為に霊力はそれ程高くはなく、それをいつも悔いている。

真行寺巴（シンギョウジ トモエ）

四十二歳。

一葉、二葉の母親。

彼女は真行寺の一族ではなく、平凡な家庭の出である。

穏やかな性格で、苦惱する夫正幸を常に支える献身的な女性。

真行寺九十九（シンギョウジ ツクモ）

八十歳。

正幸の母親で、一葉と二葉にとつては祖母にあたる。

本来であれば彼女が戦いに赴く予定であつたが、老衰により体を壊してしまい、泣く泣く孫娘たちに託すこととなつた。

現在の真行寺家では彼女が一番の靈力を持っている。

渡口零（トグチ レイ）

二十六歳。

プラチナヘアの男性で生粋のギャンブラー。

金を稼ぐことよりも勝つか負けるかのスリルを味わう為にギャンブルに身を投じている。

不遜な性格で自信家。

頭脳明晰ではあるが、知識に基づいた行動よりも運任せの行動を好む。

生まれてから賭け事で負けたことが一度も無いという強運の持ち主。

甲斐丙（カイ ヒノエ）

年齢不詳。

すらつとした長身で、細身でありながら、物凄い力と運動神経を持っている。

甲斐丙という名前は勿論偽名だが、好んでその名を使っている。

生い立ちからその素性まで謎に包まれた人物。

遠坂凜（トオサカ リン）

留学先のロンドンより一時帰国したツインテールの少女。

かつて、冬木町で起きた聖杯戦争の参加者であり生存者の一人。

黒崎礼吾（クロサキ レイゴ）

丁寧な口調で話す背の高い神父風の男で、今回の聖杯戦争の監督役を務めている。

謎が多い。

第一章

彼は何も知らない

「何なんだ……一体？」

直は目の前で起きたことにただただ呆然と立ち尽くしていた。無理もない。床に描かれた魔方陣のようなものから、人間……それも西洋人の女性が出現したのだ。映画やアニメの中などであればともかく、そんなことは起きない筈の現実で、である。驚くなどという方が難しい。夢で無ければ、自身の頭がおかしくなつたと判断すべき事柄である。

「……………」

西洋人の女性は真剣な眼差しで、じつと直の顔を見つめている。『我が名はセイバー』と、彼女は先程名乗っていた。それが彼女の名前なのだろうか。よく見ると中世の貴婦人が着るような服の上に甲冑のようなものを身に付けていて、些か軽装ではあるが、女性の騎士という風に見受けられる。

「お前は……誰だ？」

直は尋ねた。

「……それは、私の名では無く、私が一体何者なのか、という意味でしょうか？」

セイバーが尋ね返す。

質問に質問で返されるのは解せなかったが、取り敢えずはこちらの意図を理解してくれたらしい。直はコクリと頷く。

「……なるほど。と、いうことはあなたは意図的に私を呼んだというわけでは無いのですね?」

「……当たり前だ。そうでなければ『お前は誰だ?』なんて聞くわけがないだろ。それよりも、こつちの質問に答えてはくれないのか?」

「……失礼いたしました」

セイバーはそう言うのと謝罪の意味を込めて頭を下げた。言葉遣いとは裏腹に尊大そうな感じであったが、こうして素直に自分の非を認めるところを見ると、礼節はしっかりしているみたいである。

「その前に一つ、了承を願いたいのですが、よろしいでしょうか?」

「何だ?」

「どうも私の頭の中には記憶と情報の欠落が見られます。それ故、あなたの疑問の全てには答えられないかも知れませんが、それでもよろしかったでしょうか?」

「……それが本当かどうかを判断する材料が俺には無いわけだが。都合の悪いことは忘れたで済まされるかも知れないしな」

「こればかりは信じて頂くしかありません。ただ、一人の騎士として、あなたの質問に対して嘘偽り無く答えると誓いましょう」

「誓うだけなら誰だって出来る……まあ、いい。取り敢えず聞くだけ聞くとするよ。全てはそれから判断することにする」

「分かりました。では、私が一体何者なのかということについて、でしたね？私は今回の聖杯戦争においてセイバーのクラスを拝命することになったサーヴァントです」

「……また、知らない単語が出て来たな」

直はうんざりしたように言った。

「聖杯戦争だのサーヴァントだの、一体何なんだそれは？」

「聖杯戦争とは、その名の通り聖杯を求める戦いのこと。そして、サーヴァントとは、マスターと共にその聖杯戦争を戦う者のことです」

「戦うって、どうやって？剣でも振るうのか？」

「はい。それぞれがそれぞれの武器を持ち、最後の一人になるまで戦います」

「冗談で言ったつもりだったんだがな……」

あまりに率直なセイバーの返答に直は目眩がしそうになった。

「……その言い方だと、まるで殺し合いをするみたいじゃないか」

「その表現は間違いではありません」

「……大体、聖杯、聖杯って、一体何なんだ？それは殺し合いまでして手に入れる価値のあるものなのか？」

「ありとあらゆる願いを叶えるもの。それが聖杯です」

「……………ハハッ」

思わず、直は変な笑い声を上げてしまう。セイバーを名乗る彼女の口から出て来るのは、あまりに荒唐無稽なことばかりである。普通であれば一笑に付すような話だろう。

だが、それらを語るセイバーの顔は真剣そのものであった。端的ではあるが、言葉を選び、本当に嘘偽りの無いように言おうとしているのが、彼女のその真つ直ぐな表情から嫌でも伝わってくる。少なくとも彼女の中では今までの言葉は真実なのだろう。

「……それが嘘か本当かは別にして、お前が嘘を言っていないのだということは分かったよ」

「そうですか。理解して頂いて助かります」

「普通なら気でも触れているのか？と、言いたいところだが、生憎とお前が現れたところをこの目で見てしまったからな」

百聞は一見にしかず。

直は実際に彼女が魔方陣のような紋様の描かれた床より出現するところを見ている。それが無ければ、世迷い言を言うキガイ女と警察にでも通報していただろう。あの瞬

間があつたからこそ、彼女の話にはある程度の信憑性が生まれるのだ。

「……そう言えば、お前の質問にはまだ答えてなかつたな」

直は思い出したかのように言った。

「あなたがマスターか？」 だつたな？ だつたら、答えはノーだ。何故ならば、俺が俺の意思でお前を呼んだわけじゃないからだ。お前が呼ばれた場面にたまたま俺が出てきた。それが正確な表現だろうな」

「そうですか。ですが、私はあなたがマスターであると確信しています」

「何故だ？」

「その手です。そこに刻まれているのは令呪ではありませんか？」

「何？」

直はセイバーの指差す左手を見る。すると、そこには何やら紋様が刻み込まれていた。

「何時の間に……」

少なくとも、今の今まで左手に痛みや違和感などは無かつた。また、書斎に入る前にはこんな紋様など無かつたと記憶している。恐らくはセイバーの出現に驚いている間に知らず知らず刻み込まれたのだろう。

「……度々すまないが、これは一体何だ？」

「それは令呪と言います。マスターの証のようなものであると思つて頂ければよろしいかと」

「何故、俺にこんなものが？」

「それについては、確かなことは言えません。恐らくは、サーヴァントが呼び出された時点であなたをマスターとするような術式がされていたのでしよう」

「一体、誰がそんな……いや、ここが何処かを考えれば思い当たる節しかないな」

「ここは、直の父親の書齋の地下。長年誰も入った形跡の無い状態から推測するならば由布子では決して無いだろう。で、あれば、一人しかいない。」

「あの男か……」

直の父親、秋山虹彦は直の幼い記憶の中では何時も書齋に引き籠もり、何かの研究を行っていた。それが何だったのかは当時の直には当然のように理解出来なかったが、今考えれば真つ当な研究ではなく、何処かオカルトじみたことをしていたように思う。

「あの男はいなくなつた後でも迷惑を掛けてくるか……」

直は憎々しげに言つた。

「この令呪とやらは、差し詰めあの男の置き土産といつたところか」

「令呪がある以上、あなたが私のマスターということになります」

「勝手に話を進めるな！俺は納得もしていなければ、そもそもまだ何も理解してはいな

い」

そう言つて直はセイバーに背を向けた。そして、改めてこの地下室内を見回してみる。

広い空間ということ以外は何も無いに等しい部屋である。棚も何も無く、床に描かれている魔方陣とそこから出現したセイバーだけが、ここが外部から隔絶された異空間であるということを表示していた。

「……取り敢えず、上へ戻ろう」

「はこ」

セイバーがすぐに返事をしたが、別段直は彼女に言つたわけではなく、独り言のようなものであつた。

そのまま二人は無言で書齋への階段を上る。書齋へ出るなり、開かれていた出入り口が音を立てて閉じていった。どうやら誰かが出てから入ると自動で閉まる仕組みのようだ。どうやって動いているのか分からないが、そんなことよりも直には考えることがあつた。

(この書齋に、あのセイバーとかいう女が話したようなことに関する何かがあるといいのだが……)

わざわざ書齋に隠し部屋なんてものを作るからには、ここで先程の魔方陣に関する何

からの研究を行っていたという可能性は高い。出て行く時にその類の資料を処分したという可能性もあるが、今はここしか当てはないのだ。セイバーからの情報だけでは、あまりに一方向過ぎるし、それだけを鵜呑みにするのは危険である。もっと多角的に情報を得なければ、正しい判断は下せない。

さしあたって、書齋の中でこのことに関連しそうな資料を探すことから直は始める。生まれた時から住んでいる家ではあるが、この書齋は殆ど初めてのようなものであった。だが、書齋の中を物色している内に、何処か見覚えのあるような既視感を抱き始める。どうも、幼い頃にこの部屋へ入ったような気がするのだ。

(何故だろうか?あの男の部屋になど入る筈も無いのに)

家庭を省みず、ただ自身の研究に没頭し、妻の死にさえ無関心であった虹彦のことを直は物心がついた時から嫌悪していた。憎悪と言ってもいい。その感情はそのまま父親との距離となり、気が付けば虹彦は直の前からいなくなっていた。当然、直の記憶の中に父親との思い出など皆無であった。

だが、それは物心がついてからのことであって、それ以前の乳児期のことを直はよく覚えていない。もしかすると、そのくらいの頃の虹彦は一人の父親として接してくれていたのかも知れない。

(俺は果たしてあの男のことをちゃんと理解していただろうか?)

ふと、直はそんなことを思った。

ただ、それでも虹彦が母親を見殺しにしたこともまた事実である。また、幼くして母親を失った子供に対して無関心のまま姿を消したことも。それを考えると、気まぐれで抱いた父親への感情もフツと消えてしまう。

(今は、あの男のことよりも情報だ)

直は集中し直すと、改めて書棚の一つ一つを確認していく。

一方で、セイバーはただその様子をじっと見守るだけであった。

「……取り敢えずは、こんなところか」

書斎の棚という棚を探して、自身の望む情報の載っているような本や資料などを集めると、それはかなりの量となった。

一般的な物理学やら科学やらに紛れて、魔術や心霊などに関する内容のものが多く存在していた。ざっと読んだ限りでは、如何にも胡散臭さしか感じられないようなものから、かなり現実的な視点でそれらについて考察したものなど様々である。

その中で、取り分け直の目を引いたのは虹彦のレポートであった。書きかけで放置されていたものであるが、読むと聖杯という単語が何度か出て来るのだ。それも、先程セイバーが言ったような意味合いで使われているようである。肝心のレポートは結論を

出さぬまま途切れていたが、一つ確信出来たことがあった。

(あの男は聖杯を、聖杯戦争を知っていた。それも、大分昔からだ)

虹彦が失踪したのは十年以上前。少なくとも、その頃には聖杯戦争というものが存在し、虹彦はそれを知り得る立場にいた。

(ますますもって、あの男がきな臭く感じられてきたな……一体、奴は何を知っていたんだ?)

直は残りの資料にも目を通す。時刻は間もなく二十時を迎えようとしていた。

遭遇

書齋の中で今回の怪異についての情報を探していた直であったが、結果的に有意義な情報を得ることは出来なかった。

唯一と言っていい収穫は虹彦のレポートであるが、これも書きかけの上、内容は仮説に基づく仮説であって、直が今すぐに欲しい情報では無かった。

「ある程度予想はしていたがな……」

目の前に突然人間が現れたり、殺し合いをするのだと言ったり、そんな常識の外の事象についての情報など容易に開示するとは思えない。仮に資料があったとしても、そう簡単に他人の目に触れるような取り扱い方はしないであろう。

「……もうこんな時間か」

気が付けば、時計の針は十時を回ろうとしていた。途端に空腹が直を襲ってくる。今から作るのも面倒だが、そもそも冷蔵庫は空に近かった。ならば、出前でも取ろうかと思っただが、生憎と何時も出前を取っている店は定休日であった。また、こういう日に限って買い置きのカップ麺や冷凍食品は無い。

「仕方無い、か……」

直は近くまで買い出しに出掛けることにした。我慢するという選択肢もあったが、気分転換に外の空気が吸いたくなったのだ。近く、と言っても、立地的に駅の方にまで行かねばコンビニやスーパーは無い。大抵の場合は学校帰りのついでに買い物済ませるのだが、それが今日であったことを直はすっかりと忘れていたのであった。やはり、病院へ行った帰りというのは、どうも冷静ではいられなくなる。

「……何処へ行かれるのですか？」

玄関口へ向かう直を見てセイバーは言った。

「……買い物だよ。弁当か何かでも買ってこようと思つてな」

「では、私も御一緒します」

「何故、そうなる？」

「あなたが何時、他のマスターに狙われるか分からないからです。その時に私が側にいられなければあなたを守ることが出来ません」

直はハア、と溜め息を吐いた。

彼にとつて、何よりもまず一番に得体の知れないのは、目の前の彼女である。彼女と距離を取りたいという意味もあつての外出なだけに、一緒に並び歩くなど考えるだけで頭痛がしてくる。

「……頼むから、少し一人にさせてくれ。お前といると、頭がおかしくなりそうになる」

「それは出来ません。みすみすマスターを見殺しにするなど、主に仕える騎士としてあつてはならないことです」

「また騎士気取りか。もう、いい加減にしてくれないか？大体、他のマスターがいたとして、俺がマスターだって、どうやって見抜くんだ？お前みたいな如何にも怪しい奴と一緒にいる方が、寧ろ自分がマスターだと宣伝しているようなものじゃないのか？」

「だとしても、あなた一人危険に晒すよりはマシです。……一つ、無礼を承知で言わせて頂きますが、あなたは肝心なことをお忘れです」

「何？」

「私が呼び出され、あなたはマスターとなった。その時点で、あなたが望むと望まざるとに関わらず聖杯戦争に巻き込まれているということですよ」

「……………」

「あなたは先程、理解も納得もしていないと仰られました。それはごもつともですし、その為に私が答えられることは答えました。あなたが十分に理解し、納得するまで、私は何時までも待ち続けるつもりです。ですが、既にあなたは私共々狙われる存在だということをお忘れなく」

セイバーは窘めるように言った。

それは、正にその通りで、彼女という存在が目の前にいる以上、事態はとうに起きた

後なのだ。直がマスターであることを否定しても、その証は既に左手に刻まれている。

以降のことは、直の気持ち次第。言ってみれば我が儘のようなものである。それは、直自身が一番理解していた。

「……分かった。なら、もう何も言わん。付いて来たいなら勝手にすればいい」

直はそれだけ言うのと、セイバーへ背を向けた。

よくよく考えれば、彼女の言うことは決して間違いでは無いのだ。

現状、自身が特異な状況であることは間違いないが、それが直の身にだけ起きているとは限らない。もしも、他の誰かの前に自身と同じようにサーヴァントと名乗る者が現れ、そいつがサーヴァントの言ったことを鵜呑みにし、行動していると仮定した場合、直はターゲットの一人ということになる。人並み以上の運動神経を持つ直でも喧嘩は殆どしたことはないし、戦闘経験などある筈もない。一人でいたところを狙われたら為す術がないのは純然たる事実である。

ただ、あくまでこれは仮定の話。そもそも、どうやって相手がマスターかどうかを見分けるのか直には分からない。令呪がマスターの証のようなものらしいが、こんなものはいくらでも隠すことは可能である。

だが、過去にも聖杯戦争があったというのであれば、当然マスター同士は互いを認識し合っていた筈である。つまりは、何らかの方法でマスターを見抜くことが出来るのだ

ろう。慎重に慎重を期すのであれば、少なくともそういうことが可能であるという前提で動いた方がいい。

直はそれらのことを踏まえた上で、セイバーの同行を認めた。

しかし、流石に甲冑のような服のまま外を歩かせるのはあまりにも目立ち過ぎるので、直は由布子の部屋から適当な服を取り出して彼女へ渡し、着替えを待った。

「……何をしているんだ俺は」

思わず声に出して愚痴ってしまう直であった。

コンビニで晩食用のつけ麺と缶コーヒーを購入すると、直は夜のひんやりとした空気を感じながら、駅前通りの歩道を歩いていた。そのすぐ後ろをセイバーが無言で付いてきている。彼女が今着ているのは、由布子が着ていた白いブラウスと女性用のジーンズであった。胸の辺りが多少キツそうであったが、セイバーは特に文句も言わない。

(……多少は気分転換になったかな)

少し距離を歩くことで、先程よりも心なしか冷静さを取り戻せたと直は感じていた。

(……とは言え、手掛かりが何も無いのでは、事態の進展も何も無いんだがな)

現状ではあまりに情報が少な過ぎるのがネックであった。手掛かりはゼロに等しい。

(やはり、この女に聞くしか無いのか?)

すぐ後ろを歩くセイバー。彼女に尋ねれば、取り敢えずは直の疑問に答えてくれるだろう。信憑性こそ定かでは無いが、それを言い出したら虹彦のレポートだつて十分疑わしいわけだし、キリがない。

（仕方がない、か……。今思えば、何故頑なにこの女と話すのを躊躇つたんだろうな。やはり、先程までの俺はどうかしていたようだ。まあ、だからと言って、この女の言うこと全てを鵜呑みにするつもりは無いが）

あくまで参考程度に。直がそう考えるようになったのも外の夜気にあたつて大分頭が冷えたからだだろう。

「……セイバー、聞きたいことがある」

「はい、何でしょう？」

「聖杯戦争は一体、誰が何の為に始めたものだ？」

「分かりません」

「……いきなりだな」

「申し訳ございません。しかし、分からないものは分からないのです。記憶の欠如なのか、元々知らなかったのかは定かではありませんが、あなたにお伝え出来るような情報を私はどうやら持つてはいないようです」

セイバーは相も変わらず一点の曇りも無いような目をしている。

「……そうか。ならばもう一つ聞くが、お前は一体誰なんだ？」

「……申し訳ありませんが、それはお答え出来ません」

セイバーはやや間を空けてから言った。先程とはニュアンスが少し異なる言い方である。

「……一転して、今度は知らない教えない、か。理由は聞かせてくれるのか？」

「はい。それはあなたが弱いからです」

「……ハッキリと言ってくれるな」

「気分を害してしまったことは申し訳ありません。しかし、失礼ながら、あなたからは魔力をあまり感じません。魔力をあまり持たぬ人間が、何故召喚を行うことが出来たのか、今でも不思議に思っているくらいです」

「まあ、魔力なんて持つてない人間の方が大半だと思うがな」

「魔力を持たぬということは、私はあなたから魔力の供給を受けることがあまり出来ません。本来であれば、私は自身を霊体化して姿を第三者へ見せぬようにすることが可能なのですが、魔力の供給が無い為、それも叶わぬのが現状です」

「またも初耳だな。魔力とやらがあれば、そんなことまで出来たのか。ますますもって、お前の存在が謎だな」

「我々、サーヴァントの正体は英霊……つまり、かつて英雄として崇められた者が守護霊

と化した存在なのです」

「今度は幽霊か。もう、何でもありだな」

直は苦笑する。

「先程までの話を踏まえると、お前も名のある英雄の内の誰かということなのか？」

「はい」

セイバーは即答した。

「なるほど……。確かに歴史に名を残す程の英雄であれば、その正体を知られるのはデメリットが大きいな」

「はい。あなたにもつと力があれば、共に並び立つ者として私の真の名を教えても問題は無いのですが、そうでない以上、無闇に話せば敵に知られる可能性の方が高い。故に、お教えすることは出来ないのです。不服かも知れませんが、ご理解下さい」

「……理解も何もあまりに内容がぶつ飛び過ぎてて疑うことさえ馬鹿馬鹿しくなってくるな。今時のファンタジー小説だって、もっとリアリティがあるぞ」

直は半ば呆れ気味に言う。

彼はあまり読まないが、ライトノベルのような荒唐無稽な世界観である。英雄だの霊体だの、色々と混ざり過ぎで、これが小説ならどう收拾をつけるのか気になるところであつた。

そんな感じで歩いてみると、駅の改札口前に差し掛かっていた。こんな時間でも流石に駅は人の往来が多い。直はこの駅から何時も学校へと通っている。

ふと見ると、男女の二人組が駅の真ん前に突つ立っているのが目に入った。まるで何者かを待ち構えているかのようである。

また、この男女が不思議な組み合わせであった。方やお嬢様学校として名高い城風女子高等学校の制服を着た癖つ毛の少女。方や長身の明らかに日本人ではない風貌の男。カップルにしても異質過ぎる組み合わせである。

「……………いたぞルリコ」

男の方が少女にそう告げる。男の視線は明らかに直とセイバーを捉えていた。

少女はコクリと頷くと、腕を組みながら一歩前へ出て、直たちを見ながら言った。

「……………あなた、マスターね？」

ニヤリと少女は笑う。

その顔には得体の知れない自信が浮かび上がっていた。

逃走

突然現れた謎の二人。

その内の一人に「あなたはマスターか？」と尋ねられる。

もしかしなくても、この二人は直と同じ境遇の人間：つまり、聖杯戦争に関わる者たちであろう。

「……あら？ 黙りかしら？」

少女は返答の無い直たちを見て口を開いた。

「まあ、確かに今の質問に対して、＼はい、私はマスターです＼なんて馬鹿正直に答えはしないでしょうね。でも、私には分かるのよ？ そっちの彼女がサーヴァントだってね！」

そう言つて少女はセイバーを指差した。

「ふふふ、まさかこんなに早く他の参加者が現れるなんて予想もしていなかったかしら？ そんな顔をしているわね」

「……………」

「また黙りですか？ あまりのことに声が出ないといったところかしら？ いいわ。先に話し掛けたのは私。ですから、礼儀として先に名乗ってあげましょう」

少女は長いスカート裾を持って、直たちへ向かつて礼儀正しく頭を下げて見せた。「私の名前は九宝院瑠璃子。以後、お見知り置きを……って、ちよつと待ちなさい!!」瞬間、直は臨戦態勢だったセイバーの手を取ると、そのまま駅の中へと走っていた。「マスター!!」

「いいから黙って来い!!」

直はそう言うと、セイバーの手を引いたまま柵を飛び越え、駅構内を走る。

「ちよ、ちよつとお客さん!!」

駅員が慌てて呼び止める頃には二人は人の往来の中に消えていた。

二人組、特に少女の方は、ポカンとした様子でそれを見ているだけであった。それだけ、直の行動は突発的であったということだろう。

「……ルリコ。追わなくていいのか?」

「……い、今行こうと思ったところよ!」

男にそう言われ、ハツとなった少女は急いで柵を飛び越えよう……と、したところで止まってしまう。

「……ふ、フン! 今日のところは見逃してやろうじゃないの!」

駅員の視線から逃れるように改札へ背を向けた少女は、そう言つて男の方へ戻つていく。男はやれやれと肩をすくめて見せた。

「……追つて来てはいないようだな」

あの二人の姿が見えないことを確かめると、直は少し乱れた息を整えながら休憩スペースに設置された椅子に腰掛けた。

直のよく利用するこの駅は最近完成した複合施設と繋がっている為、改札口を二つ通り抜ければその中に入ることが可能なのである。流石にこの時間帯は殆どの店が閉まっているか、閉める準備をしているところなので昼間程の活気は無いものの、人の往来は決して少なくない。

(……しかし、何故、奴らは分かったんだ?)

直は先程の二人組のことを改めて思い浮かべた。

(マスターか?……と聞いてきたことから考えて、奴らも聖杯戦争の参加者な筈だ。いくら、この女が悪目立ちするような存在とはいえ、こうもピンポイントで特定出来るものなのか?)

直はチラツとセイバーを見る。

(服装も変えているし、パツと見はただの外国人にしか見えなと思うが……。緑川は都心では無いとはいえ、決して小さい町ではない。外国人の旅行者や滞在者も少なく無いのだがな)

彼らはどうやって直たちのことを見分けたのか。

(まさか、日本人と外国人の組み合わせ全てにああやって声を掛けた訳でも無いだろうに……。そういうことが可能な奴もいるだろうとは思っていたけど、流石に不意討ち過ぎたな。昨日の今日でこれとは先が思いやられる)

直はハアと溜め息を吐いた。

(……自分と同じような境遇の奴を目の当たりにすると、嫌でも聖杯戦争のことを信じざるを得なくなるな)

あの二人組の存在、それが直に思い知らせる。直が既に当事者なのだ、ということ。半信半疑であった……いや、そう思いたかった直の希望は脆くも崩れ去った。これは悪い夢などではなく現実なのである。

(最早、やるしかないってことなのか。戦わなきゃ……)

「……マスター」

考えにふける直へセイバーが不服そうな表情で話し掛けてきた。その理由が直にはすぐ思い当たった。

「……不満そうな顔だな」

「何故、あのような行動を？……先程の二人。恐らくは他のマスターとそのサーヴァントでしょう。私には彼らを迎え撃つ準備は出来ていました」

「顔に似合わず、随分と物騒なことを言うな」

直は意外そうな顔でセイバーを見た。大分走つたのに彼女は息一つ乱れていない。

「気高い騎士様はそんなに殺し合いをしたかったのか？」

「そういうわけではありません。しかし、相手の手の内さえ見ずにいきなり敵前逃亡など……」

「“情けない” 或いは“私の実力を信頼していないのではないか” といったところか？」

「はい。失礼ながら、その通りです」

セイバーはハッキリと言った。

「……驚いたな。出会って間もないのに、もう信頼されていると思つていたのか？俺はお前のことを知らないし、お前だつて俺のことを何も知らないじゃないか。そんな互いに何も知らない状態で未知の敵と戦おうなんて博打もいいところだ。有り得ないよ」

対して、直はそうキツパリと言い切る。

「戦うのであれば、万全に万全を期した上でだ。さつきはあまりに突然過ぎた。まさか、こんなに早く向こうから接触してくるとは想定していなかったよ。何か仕掛けるには後手に回り過ぎで、どう考えても相手の方が有利。何にしても、あまり望ましい状態とは思えない。だから、逃げた。情けないと思うなら、勝手に思つてくれていい。それに、

逃げたからこそ分かったこともある」

「と、仰りますと?」

「……まず、奴らが無関係な人間の多い中で問答無用に攻撃を仕掛けてくるような屑ではないということ。少なくとも、一定以上の常識に則って行動しているということだ」

無秩序な暴力。それは、何事も理詰めで行動する直にとつては天敵に等しい。

ただ、少なくともあの二人組はそういうタイプでは無いようだ。

「それと、あの男のサーヴァントは恐らく自由意思で行動しないようにされている可能性が高い」

「何故、そう思われるのですか?」

「逃げた俺たちをすぐに追っ掛けて来なかつたからだ。あいつらと対峙した瞬間、お前が特に俺の指示も無く戦闘体勢に入ったのを見るに、サーヴァントはマスターの指示が無くとも自分の判断で動けるのだろうか?ならば、あの女がボーツとこちらの動きを見ている間にも、あのサーヴァントだけは俺たちを追っ掛けて来た筈だ。それが無かつたということは、あのサーヴァントは女の指示が無ければ勝手な行動は出来ないような命令がされているのだろう」

「なるほど。令呪があればそれは可能でしょう」

セイバーのその言葉に直は一瞬、ピクツとなる。

「……そうなのか？」

「はい。令呪を使うことでマスターは我々サーヴァントへ絶対に覆すことの出来ない命令を下すことが可能です」

「……そういう大事なことを今説明するのか？」

「申し訳ありません。しかし、私が呼び出された直後のあなたに説明してもあまり意味は無いだろうと思ひまして」

「まあ、それは確かにそうなんだが……。賢明な判断、痛み入るよ」

直はそう皮肉ると、肩をすくめた。

「じゃあ、あの女は令呪を使つたんだろう。そうになると、俺の考えにまた一つ、確信を持てるな」

「確信？」

「あの女はプライドが高く、そしてナルシストだ。これは不意打ちなどが出来たにも関わらず、わざわざ自分から前に出て来て、更に名前まで名乗り上げようとしたところからも伺える。そういう人間だから、サーヴァント自身に判断させて動かすよりも、なるべく自分の命令を聞かせたいと考える。戦うのがサーヴァントであっても、その指示を出しているのはあくまで自分だという前提が欲しいのさ」

「言われてみると、あのサーヴァントは自分の判断で動こうとはしなかった……。その

推測は当たっている可能性が高いと思います。ところで、もし仮にあのサーヴァントが追って来ていたら、その時はどうされたのですか？」

「その時はお前が守ってくれるんじゃないのか？」

直はフツと笑う。

「……今にして思えば、奴らはそもそも戦いに来たのでは無かったような気がするな。これから戦うって感じの口調や雰囲気じゃ無かった。もしかしたら、ほんの挨拶程度のつもりだったのかも知れない。挑発のつもりか、何らかの交渉の腹積もりがあったのかは定かではないけどな。もしも、最初から戦うつもりだったのならば、他にいくらでもやりようはあっただろう」

「確かにマスターの方に殺気はありませんでした」

セイバーは胸の支えが少し取れたような表情に変わっていた。

「そこまで考えていたのであれば、私からこれ以上申し上げることはございません」

「三十六計逃げるに如かず、か。まあ、相手の素性も多少は分かったから、それを収獲とするか」

「そうなのですか？」

「あの制服は城風女子のものだ。ただのコスプレじゃなければ、あの女はその生徒である可能性が高いだろう。ならば、今度はこちらから接触するという手もある」

「今度は我々が先手を取るということですね」

「ああ。奴らもまさか逃げた相手がすぐに会いに来るとは思わないだろう。意表を突けるかも知れない」

直はニヤリと笑う。

(上手くいけば、こちらの欲しい情報が得られるかも知れないしな)

同じように聖杯戦争に関わる人間であれば、直の知らないことを知っている可能性は十分にある。実際にそれを聞き出せるかどうかは神のみぞ知るところだが、何も進展が無いよりはいい。

(ただし、戦う可能性もある。だからこそ、確実にこちらが先手を取らなければならぬ)

その為の接触。結果的に相手にされたことをやり返す形になる。

(全ては明日、だな)

ふと、直は持っていたコンビニの袋に視線を向けた。走ったせいか、中のものがひっくり返ってしまっている。

(……やれやれ。この始末もどうつけたものか)

直は苦笑した。

接触

翌日。

「……行くぞ、セイバー」

「はい。昨日のマスターのところ、ですね？」

「そこ以外の何処へお前を連れて行くんだ？」

直は当然のように言った。

昨夜の二人組は今の直にとつては脅威の一つであると同時に貴重な情報源でもある。聖杯戦争に関する情報に乏しい直にとつては、危険を冒してでも接触する価値のある者たちではあつた。虎穴には入らずんば虎兇を得ず、という奴である。

「学校はどうされるのですか？昨日のマスターと同様にあなたも学生であるとお見受けしますが」

「学校はサボる」

「学生の自分は学業では無いのですか？」

「単語や公式を覚えさせられるだけなのを学業というのならそうかもな。それに、いく

「何でも、お前を学校へ連れて行けるわけが無いだろ」

ちよつとそのコンビニへ行くのと、学校へ行くのでは、同じ外出でもまるで大きく違つてくる。そもそも、部外者であるセイバーを学校の中になど入れられないだろう。

セイバーは、魔力が十分にあれば自身を霊体化して第三者から見えなくすることが出来ると言つていた。可能であれば、それが一番ベストな方法なのだろうが、セイバーが言うには生憎と直に魔力は無いようだ。

一応、直は成績的に問題は無く、出席日数が足りないというわけでも無い。一日、二日、学校を休んだところで問題にはならないだろう。

「風邪を引いた。ということにしておけばいい。うちの担任は、その程度で仮病を疑いはしないだろうし、仮に疑われたところで何もしないだろうからな」

直の学校の教師はその程度の教育理念しか持つていない。それに、本日行く予定の城風女子と直の通う緑川高等学校は場所も離れているので、知り合いに鉢合わせることも殆ど無いだろう。

(……それに、確かめたいこともあるしな)

昨日の少女は、サーヴァントと思わしき男の姿を堂々と晒していた。あれだけ目立つ存在を隠そうともしていなかったのを見るに、彼女も直と同様に魔力を持つていない可

能性が高い。

(……しかし、魔術なんて非科学的で非現実的なもののことを考えないといけないとはな)

直は生まれてこの方、魔術なんてものは見たことも聞いたことも無く、存在すら信じていなかった。魔術を使う人間……つまり魔術師といった類にも全く縁が無い。幼い頃からそういつたファンタジーめいたものに対して、直は何処か冷ややかな一面を持っていたのである。サンタクローズの存在も幼稚園に行き始める前には、もう信じていなかった。

そんな彼が、それらのことに今こうして立ち向かわなければならぬというのは実に皮肉めいている。

「マスター」

セイバーが徐に口を開いた。

「マスターの目的が戦闘では無いことを承知の上で言わせて頂きますが、もしも期せずして戦闘になった場合、マスターの命を第一に考え、あなたの判断を仰がずに私の意思で動かさせて頂くことがあるかも知れません。予めご了承願えますでしょうか？」

「ああ、分かった。だが、それはあくまで戦闘になった場合だけだ。それ以外では、あまり勝手に動いてくれるなよ？」

「はい。分かりました」

「じゃあ、行くぞ」

「は、」

直はセイバーを連れ、家を出た。

今度は自ら他のマスターへ接触する為に。

城風女子高等学校。

緑川にある女子高で、所謂お嬢様学校である。

昨夜出会った二人組、その少女の方はその学校の制服を着ていた。必然と彼女がその生徒であるという推測が成り立つ。

そういうわけで、直とセイバーは城風女子へと訪れたのであった。

時間的には昼休みといったところで、門前にも人の往来が見て取れる。

今も、三人の大人しそうな女子たちが何か買うものでもあるのか、門から外へ出ようとしていた。

「すみません」

直は、早速目に付いたその三人組へ声を掛けた。少女たちは直に気が付くと一斉に足を止める。

「私たちですか？」

三人組の内、長い髪の少女が口を開いた。伝統あるお嬢様学校へ通うだけあって、清楚な雰囲気を全身から醸し出している。それは彼女だけでなく、他の二人も同じであった。

「見たところ学校の関係者では無さそうですが、何か御用でしょうか？」

「人を探しているのですが……この学校に九宝院瑠璃子という人はいますでしょうか？」

昨夜の少女がそう名乗ろうとしていたことを直は思い出す。

「九宝院さんですか？ 知っていますけれども……」

少女は怪訝な表情になった。

「九宝院さんとは、どういったご関係で？」

当然の疑問を彼女は口にした。

そもそも、直たちは明らかに外部の人間である。警戒されても仕方が無い。

「……昨晩、連れがお世話になりました。その御礼とその時に預かったものがあつたので返しに来ました」

「預かったもの……ですか？」

「はい」

「……何分、プライベートなもので、他人を仲介して渡すのも憚られかと思われま
す。すぐに済ませますので、九宝院さんをこちらへ呼んで頂きますでしょうか？」

本当の理由など告げられるわけも無いので、直はそう嘘を並び立てて答えた。隣にい
るセイバーのことも一応これで説明がつく筈である。

「そう…ですか。分かりました。ここへ呼んでくれればいいんですね？」

少女は相変わらず怪訝な表情のままであったが、直が表面上は丁寧に取り繕っていた
こと。また、理由にも一応の筋が通っていたことから、一先ずは了承してくれたよう
である。他の二人へ断りを入れてから校舎の方へ向かって行った。

直とセイバーはそのまま彼女が戻って来るのを待つことにした。

少しして、目当ての人物は腕を組みながらこちらへやって来た。

呼びに行ってくれた少女は役目を終えると、他の二人を連れてその場から去って行っ
た。

「私を呼びつけるなんて、何処のどなたかし…?!？」

昨夜の少女…九宝院瑠璃子が見てはいけないものでも見たかのような表情でこちら
を見る。

「あ、あなたたち…?!？」

瑠璃子は腕を組みながら、その場に固まってしまふ。案の定、彼女は驚きを隠せない

でいた。

突然の訪問者。それも、昨夜逃げに行った者たちが、翌日こうして目の前に現れるなど予想だにしていなかったようである。

直の思つた通りの反応であつた。

「昨夜ぶりだな」

先手を取れたことで、直は余裕を持った様子で彼女と対峙する。昨夜とは逆の状況であつた。

「……あの男はいないのか？」

彼女と一緒にいたあの背の高い男の姿は見えない。見えないだけで霊体となつて彼女の側にいる可能性もあるが、セイバーが何ら反応を見せていないのを見るにそれも無いだろう。

「いい、いるわけではないですよ！付いて来るつて言つてたけど断つたわよ!!」

そして、サーヴァントが側にいないことを彼女自らが答えてくれた。そういう情報を漏らしてしまう辺り、かなり動揺していることが伺える。

「な、何しに来たのかしら!？」

瑠璃子は逆に語気を強めて尋ね返してきた。だが、一方で言葉が震えてしまつてい

直は何となく拍子抜けしてしまった。昨夜の行動から、九宝院瑠璃子という人物は好戦的なタイプだと思っていた。確かに気は強いみたいではあるが、それに体がついていないようである。サーヴァントが側にいないということ弱気になっているのだろうか。

もしかすると、彼女は争いごとや駆け引きに向いているタイプでは無いのかも知れない。

「何しに来た……つて、そんなのは見て分かるだろ？」

「分かるわけ無いでしょ！」

「お前と俺はマスターなんだろ？……だとしたらすることは一つしか無いと思うが」

「!!ま、まさか……」

直のその言葉を聞いて、瑠璃子は青ざめた。

「ランサーがいない内に私を始末するって腹積もりね!？」

「そうか。お前のサーヴァントはランサーというのか」

「っ!!」

彼女はまたも口を滑らしてしまっていた。このまま揺さぶっていれば、一方的に情報を引き出せそうな気さえしてくる。

「……確かに、始末するのであれば、サーヴァントが側にいない今が絶好の機会だな」

直は不敵に笑ってみせる。無論、そのつもりは無い。

「ふ、フーン！そっちがやる気ならば、この令呪を使って今すぐここにランサーを呼ぶまでよー！」

瑠璃子はそう言うと、右手に刻まれた令呪を直へ見せ付ける。なるほど、令呪にはそういう使い方があったのか、と直は言葉に出さずに思った。聞いてもいないのに情報の開示をしてくれるとは期待を裏切らぬ言動である。

「さあ、やるの!?やらないの!？」

瑠璃子は相変わらず強気な態度だけは崩さない。どうやら、自身が先程から墓穴を掘っていることに気が付いていないようだ。

「……ここでやり合ったら人目につくんじゃないのか？」

直は冷静に言った。もうすぐ昼休みも終わりかという時間ではあるが、まだ周囲には人がいる。当然、直と瑠璃子のやり取りもチラチラと見られていた。

「そ、そうだけど、そっちがやる気なら仕方ないじゃない!!」

瑠璃子は周囲も気にせず半ばヤケクソ気味に言い放った。ともすれば、このまま戦いを始めてしまいそうな勢いである。流石にそれは直の望む展開ではない。

「……俺は別に戦いに来たわけじゃない。そうだろ？」

「はい。マスター」

直はセイバーにもそう言わせて、争うつもりが無いことを示した。

「……………どういふことかしら?」

瑠璃子は半信半疑で尋ねる。自分が相手の立場なら、当然そんな言葉など信じられないだろう。と、直は思った。だが、本当にそのつもりが無いのだから仕様がな

「……………言葉通りの意味だ。戦う為に呼んだわけじゃない」

「戦う為で無ければ、一体何なのかしら?」

そう問われて、直は一瞬考えた。そして、思い付いた言葉を彼女へ告げる。

「手を組まないか?」

「は?」

思いもよらぬ提案に瑠璃子はポカンとした表情を浮かべるだけであった。

直と瑠璃子 その1

夕方になり、放課後の生徒たちが帰路に着き始めるこの時間帯は何処か寂しさを感じてしまう。オレンジ色に染まる空がすぐに夜の闇に溶けてしまうからだろうか。二十四時間という時間の中で、この哀愁の時はあまりにも短い。

「……か……」

直はメモに書かれた住所及び店名と目の前のドアに書かれた文字を見比べながら言った。

喫茶「アクア」。

駅前の古びたビルの二階にある喫茶店である。

昼頃の九宝院瑠璃子との接触。会話の途中で昼休みが終わりそうになったこと。また、学校の門前では落ち着いた話が出来ないということ、直たちは放課後に違う場所で落ち合うということに決めたのであった。その際に彼女から指定されたのが、この喫茶「アクア」である。

直は早速ドアを開けて中へ入った。ドアに付いている鈴がカランカランと鳴る。

「ごらっしやいませ」

すぐにウエイトレスらしき女性がそう言つて直たちを出迎える。二十代後半といったところか。きびきびしつつも落ち着いた雰囲気を持つ女性である。

「お席へご案内します。二名様でよろしかったですか？」

「いえ、後で連れが来ます」

「分かりました。では、こちらへどうぞ」

ウエイトレスに案内されて、直とセイバーは店の奥の方へと向かった。見回すと店内も大分年季の入った様子で、あちこちに改修の跡が見られる。それでも残つた部分は、まるでひと昔以上前の喫茶店の様であった。あまりこういった場所へ来たことの無い直でさえも何処か懐かしさを感じていた。店内に漂う豆から挽いているコーヒーの香りと大き過ぎない音量の落ち着いたジャズが心地よい。

「ご注文が決まりましたらお呼び下さい。それと、全席禁煙ですのでご了承下さい」

「分かりました」

定型文のような質問。この手の店ではお決まりのやり取りなのだろう。だが、それに煩わしさを感じないのは、彼女の接客の仕方が堂に入っているからだろう。

「さて……」

待ち人が来るにはまだ時間がある。それまでただじつと待つというのも店に迷惑なので、何か注文しておこうと、直は近くのメニューを取った。パラパラとめくって見て

いると、これまた喫茶店らしいメニューがずらつと並んでおり、各種コーヒーやその他の飲み物、軽食、デザートの種類が並んでいる。そして、そのどれもが学生には気軽に頼めそうもない価格であつた。

(……道理で俺以外に学生客がいないわけだ)

駅前には他に安価なチェーン店のコーヒーショップがある。学生連中はそちらへ行っているのだろう。逆に言えば、こんな店を指定してくる辺り、あの少女が他の学生とは違うのだということ伺わせる。いくらこれから他人に聞かせられないようなことを話すとはいえ、他に場所の選択肢はあつた筈。その上で、この店を即座に指定したのは、彼女が少なからずここに通い詰めているということであるのだろうか。

直は、メニューの中から一番安価なコーヒーを二つ注文した。特に高いものを頼む理由も無く、腹も減っていないから妥当なところだろう。紅茶という選択肢もあつたが、直はコーヒーの方が好きであつた。

注文から数分でコーヒーが運ばれてくる。直は熱い内にカップへ口をつける。

「……………」

一番安価なものを頼んだ筈だが、存外味も香りもいい。値段に見合つた、いや値段以上の味に感じられた。他のチェーン店のコーヒーショップで一番高いものを頼んでもこれと同じレベルの味は出ないだろうということが容易に推測出来る。そのくらい

コーヒーそのものの質が違っていた。

「……悪くないな」

直はせっかくなので上質なコーヒーの味を楽しむことにした。

ふと見ると、セイバーも美味しそうな表情を浮かべていた。昨日もぐちやぐちやになったコンビニのつけ麺を美味しそうに食べていたが、サーヴァントも人並みに食事はするらしい。こうして見ると普通の人間と何ら変わらないようにさえ見える。

「……私の顔に何かついていませんでしょうか？」

直の視線に気付いてセイバーが言う。

「……思い出しただけだ。お前がじろじろ見られても仕方のない存在だつてことをな」

直はそう言うと、カップに残った中身をくいつと飲み干した。

そうしている内に約束の時間が訪れる。と、同時に鈴の音が聞こえてきた。誰かが喫茶店のドアを開いたようだ。視線をそちらへ向けると、瑠璃子が如何にも常連といった顔つきで中へ入って来るのが見えた。一人きり。服も昼間の時のままで、どうやら学校から直接こちらへ来たようである。

「！」

瑠璃子は直たちに気が付くと、真っ直ぐに向かつて来た。歩き方に心なしか優雅さを感ずる。

「……待たせたかしら？」

そう言つて、彼女はすぐに直たちの真向かいの席へ座る。

「早速、話を……と、言いたいところだけれど、先に注文をしてもよろしいかしら？」

「……別に構わないが」

「どうも」

瑠璃子はそう言うと、ウエイトレスを呼びつけた。

「いつもの頂戴」

「分かりました」

注文を受けたウエイトレスは、微笑みながらコクリと頷き、去つて行つた。

彼女たちのやり取りから見ると、瑠璃子はやはりこの常連客らしい。

「……それで、お昼の話の続きなのだけれども」

おしぼりで手を拭きながら瑠璃子が切り出す。

時間を置いたからか、昼の時よりは落ち着きを取り戻しているようで、声も震えてなく堂々とした物言いである。本心はともかく、こちらが彼女にとつての第三者へ見せる表の姿ということなのだろう。

「私の聞き間違いで無ければ、”手を組みたい”。そう言つたように聞こえたのだけ

れ」

「ああ。そう言った」

直は即答する。

「何か問題でも?」

「問題も何も……私とあなたは敵同士でなくて?」

「確かに。でも、最終的に対立することになるうとも、それまで協力し合う。なんて、よくある話だろ? 歴史上でも物語の中でもな。個人が個人に立ち向かうよりも戦略の幅が広がるし、ずっと有利になる。そちらにもメリットのある話だと思うがな」

「メリット?」

瑠璃子はせせら笑った。

「戦う前に逃げ出すような臆病者と組むことにどんなメリットがあるのかしら?」

「その臆病者が突然現れたくらいで動揺して、うっかり情報を漏らすような人間もどうかと思うがな」

直がそう切り返すと、瑠璃子は「うっ」と、言葉に詰まり始めた。

「……そ、それはそれとして、いきなり組もうだなんて、そんな話を信じられると思って? しかも、見知らぬ敵の提案なんて」

「……まあ、俺があんたの立場なら信用はしないな。まずは疑ってかかる」

「ほら見なさい! その話は前提からして無理があるので無くて?」

瑠璃子は勝ち誇つたように言い切つた。すると、間もなくウエイトレスがコーヒーを運んできた。ふと鼻に入る香りが直が頼んだものと一緒であつたが、直は何も言わなかつた。

瑠璃子はカップを受け取ると、優雅な手つきで口元へ持つていき縁に唇をつける。

「……決裂、ね」

コーヒーの余韻を楽しんだ後に瑠璃子はポツリと言つた。

「ま、薄々分かつていたことでしょうけれどもね。こうして、改めて会つてあげたのも、それを言いに来ただけ。これ以上、交渉の余地なんて無いって。その為の時間をわざわざ作つてあげただけでも有り難いと思ひなさいな」

「……………」

「……何か言いたそうな顔ね」

直の表情を見て瑠璃子は言つた。

「言いたいことがあるなら言いなさい。それを聞くくらいの時間はあるから」

「……そうか。なら、言わせて貰うが」

直は真正面から瑠璃子のことを見つめる。その視線は先程よりも強くなつていた。

「お前さ……」

「？」

「馬鹿だろ？」

「……………はあ？」

突然の罵倒に瑠璃子は思わず口からそう漏れ出してしまっていた。

「馬鹿とは一体どういうことかしら？事と次第によつては……」

「その質問が既に馬鹿としか言いようが無いのだが……」

直は瑠璃子の言葉を遮る。

「お前、何で一人なんだ？」

「え？」

「何で一人なんだと聞いている」

「も、もしかして、ランサーのことを言っているのかしら？だったら、置いてきたって言ったじゃない。連れて行けるわけ無いでしょ、あんな……」

「……………そうじゃない。何で、敵の前で一人“なんだ？”

「!？」

直の冷たい視線に、瑠璃子は今更ながら自身が置かれている立場に気が付いた。

目の前には敵のマスターとサーヴァント。

本来ならば、危険なシチュエーションである。

「……………」

「……………」

直は視線をセイバーへ向けた。直後、彼女は無言で立ち上がる。

「ひっ!？」

恐怖に思わず顔が引き曇る瑠璃子。その目は彼女を見下ろすセイバーへと釘付けになっっている。

「……………」

セイバーは何も言わない。

威圧感たつぷりに、ただじつと瑠璃子を見下ろすだけであった。

直と瑠璃子 その2

「あ、あああ……」

瑠璃子はまるで金魚のように口をパクパクとさせていた。目の前にはこちらを見下ろすセイバーの冷たい瞳。人目も憚らずに、ここで殺るつもりである。少なくとも、彼女にはそう見えた。

ランサーを呼ばなければ！

そう思いはするけれども、口も体も動かない。ただ、目の前の出来事をその目に映すのみであった。

ここまで自分が本番の実戦に弱かったとは。

相手を見くびっていたのと同時に自分を高く評価し過ぎていた。例えば、どんな状況でも上手く振る舞える、自分ならばやれる、と。

その自信の根拠の一つには得意のフェンシングがあつた。学校の部活動でやっているものだが、センスがあつたのか、あれよあれよという間に不動のエースにまで上り詰めていた。試合でもいい成績を残していたので、それが何時からか彼女の自信となっていた。

そして何よりも、日本の歴史を作ってきたという自身の家系、その子孫であるというプライドこそが、彼女の揺るがぬ自信を生み出していたのであった。

だが、その自信による期待は沸き上がる恐怖心によつて脆くも崩れ去つた。無理もない。彼女は殺す、殺されるなど、今まで無縁の人生を送つて来たのだから。フェンシングでは流石に人の命まで取らない。命の懸かつたやり取りとはこんなに恐ろしいものなのか。こうして相手と対峙するまで、全く実感が無かつた。

それに対して向こうはどうだろうか。目の前の少年は自身とさして変わらぬ年頃の筈。なのに、瑠璃子よりも堂々としている。まさか、こういつたやり取りは初めてでは無いのだろうか。だとしたら、売つてはいけない相手へ喧嘩を売ってしまったようなもの。その代償はあまりにも大き過ぎる。

「……………ツツ!!」

覚悟さえも出来ず、瑠璃子はただ現実から逃げる為だけに目を閉じた。

「……………これでよろしかったですか、マスター?」

「ああ。予想以上に効果てきめんのようだ」

二人のそんな会話が耳に入って、瑠璃子はハツとなる

「……あ、あなたたち、まさか!？」

「どうやら気付いたか」

直は思い通りという風に勝ち誇った笑みを僅かに浮かべる。

「……いくら何でもこんな場所で戦うわけが無いだろ。ましてや、殺すなんて有り得ない」

「そう言うと直は、律儀に立ったままのセイバーへ視線を移す。

「俺はあらかじめこいつに言っておいたんだ。俺が目線を送ったら、立ち上がって相手を見下ろせ、とな。ただ、それだけだ。案の定、お前は勝手に勘違いし、ビビって何も出来なくなった」

「……………」

「ある程度はそうだろうと思っていたが、もう疑う余地は無いな。ハッキリ言っておいてやる。お前は、この手の戦いには全く向いてない」

「……………!!」

(瑠璃子。お前は戦いには向いていないようだ……)

今よりも少し前に聞いた言葉が瑠璃子の頭を過る。その発言主は彼女のサーバント、ランサー。令呪を使った直後に放たれた言葉であつた。

(見てなさい！この私が戦いに向いていないかどうか、すぐに分かるわ！)

ムキになつての反論。正に売り言葉に買い言葉であつた。

自身の資質を問われるような従者の物言いに対して、瑠璃子は結果で持つてそれを示そうと考えた。他のマスターを採したのもその為である。手取り早いのは勝負を仕掛けて、それに勝利すること。至極単純で確実な証明方法であつた。

しかし、ようやく見つけた相手は自身を見るなり逃亡した。あまりに突然のことに彼女は追い掛けることさえ出来なかつた。気が付いた時にはランサーから助言を貰うという屈辱。言われた通りに追い掛けるのは自身のプライドが許せなかつた。

戦う前に逃げるような相手など、倒したところでその勝利の価値などたかが知れていゝ。勇敢に向かつてきた相手を打ち負かしてこそ、その勝利に価値が生まれる。

そう自身を納得させ、その日は帰つた。思えば、この時、瑠璃子の方こそ戦いから逃げていたのかも知れない。

その翌日、逃亡した相手が突然現れ、自身を心理的に追い詰め、あまつさえにはラン

サーと同じ台詞まで吐かれる。この時、彼女の胸に去来したのは紛れもなく敗北感であった。

結果から見れば、瑠璃子は戦う前から既に敗北していたのである。

「……………!!」

瑠璃子は顔を真っ赤にしながら直たちを睨み付ける。だが、直の言ったこともまた事実である。それを身を持って実感したのは記憶に新しい。それ故に返す言葉もすぐには浮かんでは来なかった。

「……………俺と手を組め」

そんな瑠璃子の心情を表情から察した直は改めて告げる。

「それが、互いにとつて、現状の最善だ」

「……………その、ようね」

僅かに残ったプライドで瑠璃子はそう言うに止めた。失態を見せた恥はそう易々と忘れられないが、だからと言って、このまま主導権を相手に渡したままでは良くはない。少なくとも、これ以上の弱味を見せてはいけなさと瑠璃子は強がって見せる。

一方で、直もこれで相手を屈伏させられたとは思っていない。だが、これから先の行動においてイニシアチブを取り易くはなつたのは事実。それは決して小さくは無い。手を組むことさえ叶いそうに無かつた先刻までとは大きく違う。後は如何様に彼女と

付き合っていくかが鍵となるだろう。

「早速だが、お前の知っていることを教えて貰おうか」

さしあたっては情報交換である。

「情報……ね」

瑠璃子は少し困ったような表情になる。

「私も別に詳しいというわけじゃ無くてよ？」

「だが、俺よりは知っているのだろう？ 令呪の使い方にしろ、俺よりも一歩踏み込んだことを知っていたのだからな」

「逆に聞かせて貰うけど、あなた……名前は何でしたっけ？」

「秋山だ」

「秋山さんは何処までご存知なのかしら？」

「何でも願いを叶えるとかいう聖杯をめぐるって殺し合いが行われていて、俺はその参加者になった。そのパートナーとして、こいつみたいなサーヴァントとかいうのが現れた。そして、俺以外にも同じ境遇の人間がいるらしい。……今のところはそれだけだ
な」

「そう。基本的な部分は知っているようね」

「……もつとも、情報のソースはこの女なので、その情報が正しいかどうか。また、こい

つが嘘を吐いていたとした場合も含めて、それらを見破る術は俺には無いがな」

「私は嘘を言ったつもりはありません」

セイバーが反論するように言った。

「騎士として、仕えるべき主へ嘘偽りを申し上げるなど、あつてはならぬことです」

「それを信じる信じないは俺の判断でもあるがな」

「そんなこと言っていたら、私の言うこともそうなんじゃないのかしら？」

瑠璃子は少し呆れ気味に言う。

「慎重なのは結構ですけども、疑い過ぎると人間不信になるのではなくて？」

「寧ろ、そのくらいで丁度いい。疑いの気持ちを忘れた時に人は裏切られるのだからな。

それに、全部が全部を疑ってるわけじゃない。確信に至るまでは保留しておくだけだ。物事というのは、積み重なった事実を見ていけば、大体の場合は真実へ行き着く。

その為にも多角的な情報は必要だろう？」

「そう。だとしたら、残念な話だけど、私の知っていることも大体はあなたと同じよ。ご期待に添えそうに無いわね」

「つまり、お前もサーヴァントから聞いた情報のみということか」

「……少し違うわ。勿論、ランサーから教えて貰ったこともあるけど、この度の戦争、その基本的な情報はクロサキから聞いたのよ」

「クロサキ……？」

新たな固有名詞を耳にして、直は思わず前のめりになる。

「何者だ？ お前の身内か何かか？」

「違うわ。教会の神父で、聖杯戦争の監督をしているそうよ」

「教会の神父……。監督……。胡散臭い以外の何者でも無いな」

「ええ、全く。その一点に関しては秋山さんと全く同じ考え。今でもそうおもっているもの」

クスクスと瑠璃子は笑う。先程まで恐怖におののいていたとは思えない程に余裕を取り戻しつつあった。立ち直りは早いようだ。

「……そうね。私に聞くよりも、クロサキに聞いた方があなたの望む情報が得られるのでは無いかしら？」

「確かに気になる存在だな。そのクロサキという人物は」

「ならば、今から会いに行きましようか。丁度、私も彼に聞きたいことが出来ましたし」
突然の提案。願ってもないことではあるが。

「……罠の可能性は？」

「……とことん、呆れましたわ。慎重なもの過ぎると病気ね」

瑠璃子はそう言うと、オーバー気味に肩をすくめて見せた。

朽ちた教会の男

「……着いたわ。ここよ」

瑠璃子に案内されて、直たちはクロサキという人物がいるという教会へとやって来た。

その教会は、駅からそれ程離れていなかった。路地へ入って、人通りが大分少なくなり始めた辺りで屋根の上の十字架が僅かに見えてくる。注意深く見なければその存在に気付かぬ程に希薄でありながらも、一度気が付くと妙に心に残る。遠くから見た印象はそんな感じであった。

そして、いざ目の前まで行くと、やはり強烈な印象を見る者に与える外観をしていた。朽ちかけたその小さな教会は、闇を纏い始めた外気と合わさり、まるでホラー映画の舞台のようであった。周囲の閑静な住宅街とはまるで色が異なっている。錆びた門が嚴重に閉まっていて、それが重苦しい雰囲気を一層演出していた。

(……こんな所に教会なんかあったのか)

教会を見た直が最初に抱いた感想はそれであった。生まれた頃から住んでいる街。それも、家からそこまで離れているわけでは無いこの場所に教会があったことなど、直

は今日まで知らなかった。もしかしたら、地図などで教会の存在を目に入れたことは過去にあつたかも知れないが、気に留めるといふ程では無かつたのだろう。

「さあ、入りましようか」

瑠璃子はそう言つて教会の門へと手をかけた。来訪者を拒むかのように閉まつていた門は、鈍い音を立てながら意外とあつさり開いていく。まるで、門が直たちの入場を許可しているかのようであつた。

(……………)

直は、ふと後方のセイバーを見た。警戒心を解いてはいないものの、必要以上に周囲を気にしているという様子も無い。取り敢えずは、すぐに身の危険が襲うという事態にはならなさそうである。

教会の中に入ると、これまた不気味な雰囲気醸し出していた。埃臭く、生活感が全く無い。相当な年月ここが使われていないのだということを実に示している。

入つてすぐに見える礼拝堂への扉には鍵が掛かつていないようで、これまたすんなりと開く。礼拝堂は外観から想像するよりは広い感じであつた。僅かな淡い灯りが点いているようで、間も無く夜になるのに真つ暗ではない。すぐ外が荒れに荒れていたのに対して、礼拝堂の中は意外とちゃんとしていた。

「ん……………」

奥の方をよく見ると、一人の男が長椅子の端に座っていた。神父の服を着ているが、この教会の関係者といった感じには見えない。この男がクロサキだろうか。

「……お待ちしておりました」

男はそう言うのと、すつと立ち上がる。背丈が高く、妙に威圧感のある男であった。また、五分刈りにした頭を金色に染めているのも印象的である。まるで暴力団組員のような風体と神父服のミスマッチから織り成す男の胡散臭さは想像以上ではあるが、それが逆に聖杯戦争という非現実的な物事の関係者であるということに信憑性を持たせている。

「あなたが、最後のマスターですね？」

男が尋ねてくる。まるで、質問の答えは最初から分かっているぞ、とでも言いたげな顔であった。

「……そのようだ。あなたがクロサキか？」

「はい。その通りです」

男はにっこりと微笑んだ。

「私の名前は黒崎礼吾。黒崎と呼び捨てで結構です。この度の聖杯戦争の監督役を務めさせて頂いております。以後、よろしくお願いいたします」

丁寧な物言いですらうと、黒崎は胸に手を当てて頭を下げた。慇懃無礼という感じ

でもなく、普段からこういう喋り方をする人間のようである。

「……早速だが、聞きたいことがある」

直は、すぐに本題へと入った。

「はい。私に答えられることでしたら、何でもお答えいたしましょう」

黒崎は微笑みを浮かべながら言う。

多少の含みは持たせているものの、情報提供を厭わないのであれば、遠慮の必要はないだろう。

「……聞きたいのは、このふざけた戦争のことだ」

直は、当初から抱いていた疑問をぶつけた。何となく巻き込まれた形になってはいるが、肝心な説明をセイバーからしか聞かされていない。そのセイバーも記憶が曖昧だと言っているのだから、直を参加者だと言い張るのならば、監督役である黒崎にはちゃんとした説明を行う義務がある筈だ。

「聖杯戦争をふざけた戦争と仰られますか」

「ふざけていないのなら完全に狂ってるだろ。願いが叶う聖杯とかいう眉唾物をめぐって殺し合いとか、正気の沙汰じゃない」

「あなたは何処まで聖杯戦争のことを御存知で？」

「今言った以上のことは知らない。が、それだけでも、まともなものじゃないってことは

判断出来る」

「確かに、まともではありませんね」

主催者側の人間である筈の黒崎は、直の言ったことをあつきりと肯定した。だが、それが本心なのか、ただ直に合わせただけなのかはその表情から窺い知ることは出来ない。黒崎はその顔に笑みこそ浮かべてはいるが、内面の部分を一切表には出していなかった。

「でも、それはあくまで一般常識、一般的な倫理観という括りの中で、です。そこから一歩出てしまえば、それはまともなことになるのです」

「……聖杯戦争の是非については、これ以上話すつもりはない。水掛け論になるだけだろうからな」

「賢明な御判断で」

「聖杯戦争とやらの存在自体も今更否定はしない。実際にあるのだろう。こいつらがいるわけだからな」

直は、セイバーと瑠璃子へチラリと視線を向けて言った。

「俺が聞きたいのは、聖杯戦争とは一体何なのか。何故そんなことが行われるのか。そもそも願いを叶える聖杯なんてものは本当に存在するのか。取り敢えずはその三点だ」

「なるほど。では、私にお答え出来る範囲でお答えしましょう。まず、第一点目」

そう言うと、黒崎は人差し指を立てた。

「まずは聖杯戦争とは何か？これは、その名の通り聖杯をめぐる争いのことです。極端な話、聖杯を欲する者同士が争い合えば、それはもう聖杯戦争なのです」

黒崎から返ってきた答えは、セイバーから聞いた内容とさして変わらぬものであった。

「……御不満な表情ですね。分かってます。この程度の情報は既に知っているのでしよう？でしたら、もう少し踏み込んだことをお話しするとしましょうか。つまりは聖杯戦争のルールについてです」

「回りくどいことを言わないで、すぐに話してはくれないのか？」

「物事には順序というものがあるのです。焦りは禁物ですよ？」

随分と勿体振った言い方なのは、自分のペースに相手を巻き込もうという算段なのか。

直は、苛立ちを抑えながらも黒崎の話に耳を傾け、必死に情報を得ようとする。

「まずは、前提として聖杯によって選ばれた七人のマスターとそのサーヴァントが生き残りを懸けて戦うこと。こう聞くと物騒ですが、完全に相手の息の根を止める必要はございません。要するに、相手が二度と戦えなくなれば良いのです。相手マスターの殺害はあくまで方法の一つでしかありません」

「二度と戦えない状態というのはどう判断する？」

「言葉通りです。サーヴァントを失い、マスターの戦う意思さえも完全に失われれば、それは最早二度と戦えないということに他なりません。その時は、この教会が脱落したマスターを手厚く保護いたしましょう」

「逆に言えば、サーヴァントがいなくなってもマスターに戦う意思があれば負けではない。ということか」

「もつと言わせて頂ければ、マスターがサーヴァントより先にやられてしまった場合でもサーヴァントに戦う意思が残っていれば、聖杯戦争を続行出来るのです。無論、どちらかが欠けてしまえば大きな戦力ダウンとなってしまうことには違いありませんがね」

「……つまり、手っ取り早く雌雄を決するにはどちらか、或いは両方を殺すのが確実、と？」

「そう考えるマスターは多いかも知れませんがね」

含みのある物言い。もしかしなくとも、相手マスター及びサーヴァントの殺害が聖杯戦争のスタンダードなのだろう。

「なお、戦い方は自由ですが、ただ逃げるだけ逃げ回り、結果的に運良く最後の一人になったとしても聖杯を得る資格は与えられません。聖杯はあくまで戦いの果てに得られるもの。柵からばた餅で得られるものではありません」

「戦略的な撤退はどう判断する？何も真正面からぶつかるだけが戦いじゃないだろ？」
「無論、それは問題ございません。逃げるのが問題なのではなく、戦いを最後まで拒むことが資格剥奪の要因となってしまうのです。聖杯を求めるのであれば、くれぐれもお気を付け下さい」

その点で言えば、直は戦いを避けることはしたが、拒んでいる訳ではない。いぎ、その時が来れば戦う覚悟はある。流石に殺すまではいかないが、決して日和るつもりはなかった。

「……その辺の情報は初耳だったな」

「それは良かった。私も説明した甲斐があったというものです。それでは、次に令呪について説明しましょう」

黒崎はそう言うのと右の手の甲を直へと向けた。そこに紋様は無く、あくまで説明の為にそういうポーズを取っている様である。

「マスターは令呪を使うことで、サーヴァントに対して三回までならば、絶体遵守の命令を下すことが出来ます」

「どんなことでも……というのは一体どの程度のことまでを指すんだ？」

「どんなことでもです。殺せと命令すれば殺しますし、死ねと命令すれば死にます」

「……………」

直は改めて左手の紋様を直視する。たった三回とは言え、こんなものが一つの命を思うがままに操れるとは。そこまでの強制力があるとは思ってもいなかった。

「……まあ、自殺はともかく、殺害に関しては令呪を使用せずともサーヴァントはやつてくれるでしょう。それが彼らの使命なのですから」

「……………」

黒崎がそう言った時、セイバーが少し不快そうな表情をしたのを直は見逃さなかった。令呪で殺害を命令する必要がある場合を何となく察する。

「まあ、自分のサーヴァントとは仲良くやった方がいいですよ。余計な令呪を使うことも無くなりますからね。……或いは、こういう使い方もあります。サーヴァントを瞬時に遠くへ飛ばしたい時、または遠くのサーヴァントを瞬時に近くへ呼びたい時……。それらの時に令呪を使用すれば、それが可能となるのです」

「そういう使い方も出来るのか……」

「令呪は使い方次第で戦況を大きく変えます。大事に使うことをお勧めしますよ」

「だとさ」

「な、何よ!?!」

急に振られた瑠璃子が顔を真っ赤にしながら言い返す。思い当たる節があるといった表情。直が昨日推察した通りだとすれば、彼女に令呪の無駄遣いをしたという自覚が

芽生えたのだろう。

「ちなみに、相手マスターの同意を得られれば、令呪を移植することも可能です。また、同意を得られない場合でも、相手マスターから奪うことは可能ですので、そのことを念頭に入れておいた方がよろしいかと」

「……なるほどな。結局、そうやって殺し合いへと繋がるように出来ているんだな」

少しうんざりとした表情で直は言った。

「令呪があれば有利。ならば、相手を殺してでも奪い取ろうと考える奴は必ず出て来るからな。参加者が複数人いるのであれば、尚更だ」

「あくまで、それは方法の一つですよ」

黒崎は尚もその部分を強調する。

「……聖杯戦争の基本的なルールについては以上となります。分からないことがあれば、何時でもこの教会を訪ねて来て下さい。私は常にここにいますから」

とても生活感の無いこの場所に常にいる。黒崎の発言はどのようにも信用におけないような気がしてきた。

「次に、何故、聖杯戦争が行われるのか？これについてお答えいたしましょう。それは、聖杯が求め、また聖杯が求められるからです」

「……………？何を言っているんだ？」

「つまりは、人々が聖杯を求める時、聖杯もまた人々を求める。故に聖杯戦争は始まるのです」

「ニーチェの様に言うな。そんなんで納得しろと言うのか？」

「私は話せることを話しました。後はそちらの御判断です」

「……………」

直は何も言わなかった。先程ルールについてはあれだけ話してくれたのに、このことに関しては明らかに的を射てない返答。これ以上の追求をしたところで時間の無駄であることは想像に難くない。

逆に言えば、マスターである人間には話せぬ事情があると言っているに等しいとも言える。

「納得して下さったようで何よりです」

「……………」

明らかに納得したという表情ではない直を見ながら黒崎はうんうんと頷く。

「では、最後に聖杯の存在についてお話ししましょう……」

聖杯と決意

黒崎という男はどうにも掴めない人物であった。

丁寧且つ感情表現たっぷり説明はしてくれるのだが、そこから本心は見えず、何を考えているのか分からない。情報に嘘は無いのかも知れないが、大事な部分は隠している。そんな印象を直に抱かせた。

「……聖杯。それは、器。ありとあらゆる願いをかなえるものです」

「そんなことは既に聞いたことの繰り返しだ。それを信じる。とでも言うのか？ 無茶を言ってくれるな。何でも願いが叶うなんて、今時雑誌裏の怪しい広告ですら言わないぞ」

「しかし、事実なのですから仕方がありません」

「……どの道、証明することなんか出来ないだろう？」

「ええ。物的に証明することは確かに出来ませんねえ」

その点について黒崎はあっさり認めた。

「しかし、それでも敢えて言わせて頂くのであれば、聖杯はあるのです」

「大体、聖杯って何だ？ 言葉通りの意味では無さそうだが……」

「聖杯とはあくまで器です。膨大な魔力を有する器。それを聖杯と呼ぶのです」

「また魔力か。魔力つて一体何だ？ 魔力は何でも出来るといふのか？ 馬鹿馬鹿しいにも程がある」

「しかし、その根拠はあなたもその目で既に御覧になつていないのですか？」

そう言つて黒崎は、セイバーの方へ視線を向けた。

「……サーヴァント、か」

魔方陣から現れた、明らかに普通ではない人間。今も、直の後ろで周囲に気を配つてゐる彼女の存在は、聖杯戦争というものが空想の産物では無いことを証明しているようなものであつた。そこは、直も認めざるを得ない事実の一つである。

「……しかし、何でも願いを叶えるなんて、やはり信じられない。あまりに都合が良すぎる！」

直はそれでも聖杯の存在、特に何でも願いを叶えるという部分を信じることは出来なかつた。

もしも、本当に願いが叶えられるのであれば……。直の脳裏には、由布子の顔が浮かんでゐた。現代医療では彼女の謎の病気を治療することは不可能。未来に期待しても希望は薄く、そもそも未来は無いと宣告されてしまった。そんな彼女を救うことが出来るかも知れない。

ファンタジーな事柄に否定的な直にそんな夢を抱かせる程、聖杯は魅力的な存在であった。しかも、それを手にする権利がそれこそ柵からぼた餅の如くもたらされたのだ。御都合主義があまりに過ぎるではないだろうか。

無論、それも全てが事実であるとしたら。という前提ではある。が、打つ手無しであつた直にとつては、聖杯の存在は希望以外の何者でもない。だからこそ、必要以上に慎重になる。

「心中お察しいたしますよ。聖杯の存在を信じたい。でも、裏切られるのは怖い。……端的に言えば、そういうことでしょう？」

直の表に出さぬ葛藤を黒崎は察して、そう結論付ける。

それは、半ば凶星であつた。色々な理由をつけて聖杯の存在を疑っているのは、逆に言えば聖杯が存在して欲しいからとも言える。叶えたい願ひがある直にとつて、聖杯は降つて湧いた奇跡であつた。例え、殺し合いという障害が立ちはだかつていても……である。だからこそ、それを経てまで求めた聖杯が実は存在しませんでした。となるのだけは避けたい。もし仮に、そんなことになつてしまつたら、直の心は深いダメージを負つてしまうだろう。二度と立ち直れぬかも知れないくらいダメージを……。

「大変御悩みのようで……」

黒崎は言葉を発しなくなつた直を見て言つた。それさえも最初から織り込み済みと

いった表情である。

「……でしたら、こういうのはどうでしょうか？」

そう言うと、黒崎は直の肩へ手を置いた。そして、何やら呟く。

「……!?」

次の瞬間、直は意識を失う。そして、糸の切れたマリオネットの如くその場に前のみで崩れ落ちる。

その場にいる全員がへと視線を集中させた。

「マスター!!」

いの一に声を上げたのはセイバーであった。そして、すぐに剣を構えるような仕草の後、黒崎へ斬り掛かる動きを取る。

「……慌てないで下さい」

黒崎はそう言って手で彼女を制止する。その表情は何一つ変わらないままであった。直の首筋へ手を置くと、先程と同様に何かを呟く。すると、直の目がカツと見開く。

「……………カハッ！ゴホッゴホッ！」

直は急激に咳き込むと苦しそうに身を起こそうとした。自身の身に何が起きたのか、まるで理解出来ない。ただ一つ言えるのは、つい数秒前まで自分は死んでいた。失神や昏倒の類では無く命が終わっていて、その実感が全身にある。

「何を……した？」

「私の魔力をあなたの心臓に注ぎ込み、止めさせて頂きました」

「な……に……？」

「これが魔術です」

黒崎はにっこりと笑った。

「疑り深そうなああなたには、ただ披露するよりもこうして実際に体験して頂いた方が理解も早いかと思ひまして、失礼ながら魔術を使わせて貰いました」

「……ふざ、けるな」

「ええ。そのお怒りはごもつとも。誠に申し訳ございません」

黒崎は深々と頭を下げる。

「……ですが、これで御理解なされたかと思ひます。魔術はこうして人の命さえ操ることが可能なのです」

実際にそれを体験した直にとつて黒崎が言ったことの説得力は多大であった。直は無意識に自身の心臓の辺りをギュツと掴む。

「……私は正式な意味での魔術師ではありませんが、それでもこのくらいは出来るのです。御理解頂けましたか？」

「……………」

「御理解頂けたようで何よりです」

再び頭を下げる黒崎。直は勿論だが、セイバーまでもが厳しめの視線を彼に浴びせていた。

「……とは言え、やはり個人の魔力では出来ることにも限界というものがありません。ここで出て来るのが聖杯なのです。先程も申し上げました通り聖杯は個人では所有出来ない程、膨大な魔力を有します。どうです？大抵の願いを叶えても不思議では無いと思いませんか？」

「……………」

「無論、ここで引き返すのもあなたの自由です。その時は聖杯戦争が終わるまで我が教会があなたの生命の無事を保障いたしますし。さて、どうしますか？」

「……なるほどな。欲しがる人間がいるだろうというのには理解出来た」

直は完全に納得こそしてはいなくとも、魔力の可能性については内心で認めつつあった。本職の魔術師では無いと自称する黒崎。そんな彼でもあんなことが出来たのだ。膨大な魔力を持つ聖杯が願いを叶えるというのも信憑性が出て来る。

「……答えは最初から決まっている」

直はそう言うに止めた。確信にまで至らずとも、魔術の存在はその体に刻み込まれている。少なくとも、魔術ならば直の願い……つまりは、由布子の治療が叶うのでは、と

いう希望を抱くことは出来た。それならば、この一見イカれた殺し合いに身を投じる価値もあろうというものだ。

直にとって、自分の命などその程度の価値しか無いのだから。

「……いい眼差しです。その御覚悟、聖杯戦争へ本格的に参加する意思と見なさせて頂きます」

黒崎は大歓迎だと言わんばかりに両手を広げて直を迎え入れた。

全てがこの男の手の平の中にあるような違和感は拭えない。だが、直にはそんなことはどうでも良かった。

目の前に信じるに足る希望がある。それだけが今宵の大きな収穫であった。

(……勝つ。勝つて聖杯とやらを手に入れてやる。それが俺の命の使い方だ！)

直はグツと手に力を入れる。その様子をセイバーはただ見守るだけであった。

直とセイバーは瑠璃子と別れ、家路についた。瑠璃子は何やら黒崎へ聞きたいことがあるという。それにまで付き合う義理も無く二人は教会を後にしたのであった。連絡先は既に交換済みなので、何かあれば連絡を取り合うことは可能だろう。

「……………」

「……………」

二人は共に無言であつた。元々、気軽に何かを話し合うような感じではなかつたが、教会へ行つてからは明らかに雰囲気が変わつていた。

特にセイバーは、目の前で主をみすみす殺されるという失態を犯したことが尾を引いているようであつた。だが、無理もない。黒崎には敵意も殺気も何も無かつたのだ。セイバーでなくとも、彼の行動を予見して防ぐことは難しかつたであろう。そのくらいあの黒崎という男は不可思議な存在であつた。

「~~~~~♪」

ふと、二人の耳に誰かの鼻歌が聞こえてきた。見ると、目の前を一人の少女が歩いている。少女はゴシッククロリータに身を包み、テディベアを大事そうに抱えていた。人気があまりないこの道を行くには、あまりに特異な格好をしているように見える。

「……………」

「~~~~~♪」

二人とその少女はそのまますれ違い、何事もなく通り過ぎて行つた。

少女はそれから少し歩いた後に立ち止まり、振り返らずに呟いた。

「…………今潰しちやつたら面白くないよね」

少女はフツと笑うと再び歩き出した。

少女の帰国

——それは、直がセイバーと出会う前日のことであつた。

「久し振りね。この町も」

冬木町の駅改札から出た少女が感慨深そうに言った。長く艶やかな黒い髪をツインテールに結んだとても美しい少女は、その細長く華奢な手で身の丈半分近くあるトランクの取っ手を掴んでいる。

少女の名前は遠坂凜と言つた。留学先のロンドンより、長期の休暇を利用して一時帰国してきたのであつた。

「たつた一年いなかつただけなのに、まるでそう思えないわ……」

凜は暫しの間、目を閉じた。

「色々あつたから、かしらね？それとも……」

脛の裏に浮かぶのは、この町で起き、彼女が経験した出来事の数々。そして、その中で出会つたある人物のこと。

「彼、元気かしら……。今日、帰つて来るつて伝えてないから、きつとビックリするで

しようね」

その人物のことを思うと彼女の顔には自然と笑みが浮かんでいた。何処かいたずらっ子っぽい表情である。

「や。行きましようか」

凜は誰に言うでもなくそう呟くと、トランクを引き摺り始める。駅前バス停は時刻表を見る限り二十分近く待つ必要があったので、タクシー乗り場の方へ向かった。丁度一台のタクシーが停まっていたので、それに乗ろうと、彼女は少し駆け足気味になる。だが、その歩みはすぐに目の前を遮る何者かによって止められてしまう。避けようと進路を変えると、その人物もまた彼女と同じ方向へ体を向けた。

「失礼！」

よくあることだと凜はまた別の方向へ進路を変えようとすると、再びその人物は彼女の前を塞ぐ。そんなやり取りが二度三度も続けば、偶然ではなく相手が故意に道を塞いでいるのだと彼女も気が付く。

「……あー！」

凜が足止めを食らっている間に、停まっていたタクシーは他の客を乗せて行ってしまう。周囲に他の車両は見当たらず、新たにタクシーなりバスなりが来るのを待たなければならなくなった。少なくとも、十数分は待つ羽目になるだろう。

「……ちよつとアナタ。何のつもりかしら？」

凜は声に明らかな苛立ちを含ませながら言った。彼女の行く手を塞いでいたのは、同じくらいの背格好をした少女である。ゴシックロリータの服装に身を包みティディエアを抱えていた。顔は俯いた姿勢の為か長い前髪が目の部分を覆い隠していて、鼻から下半分しかよく分らない。だが、知っている人物でないということだけは彼女にも何となく分かった。

「アナタが通せんぼしてくれたお陰でタクシーに乗りそびれちゃったじゃない。どうしてくれるのかしら？」

「……………」

ゴシックロリータの少女は何も言わない。ただ、じつと前髪の奥に隠された瞳でじつと見つめてくる。

「黙ってないで何とか言いなさいよ！」

凜は思わず声を張り上げた。別にタクシーに乗り損ねたことを怒っているわけではない。自身の邪魔をし、その理由も告げない目の前の無礼者に腹が立ったのだ。

と、ゴシックロリータの少女は、急に両方の口角を持ち上げ、バツと顔を上げた。

「やつと会えたね……お姉ちゃん！」

とても嬉しそうな響きを含んでゴシックロリータの少女はそう言った。

「……………ハア？」

凜は突然、「お姉ちゃん」と呼ばれて困惑する。彼女の知る限り、このような妹は存在しないからだ。彼女にとつて妹と呼べる人物は一人しかいないが、少なくとも目の前の少女ではない。また、姉妹的な意味ではない「お姉ちゃん」だとしても、何故このタイミングで、しかもそれを嬉しそうに言うのか理解出来ない。

「……………何言つてんのアンタ？」

「嬉しいなあ。ずっと、ずっと逢いたかったんだ！」

「人の話を聞きな……………」

「お姉ちゃん大好き!!」

ゴシッククロリータの少女は妙にハイテンションでこちらの言うことに一切耳を貸さうともしない様子。

（……………新車のストーカーか何かかしら？）

近年は同性のストーカーも珍しくないと言う。凜は、彼女が関わってはいけない種類の人間だとすぐに理解した。

「……………もういいわ」

先程までの怒気はすっかり抜けていて、面倒臭さの方が大きくなっていった。凜は今やいち早くこの場から去りたくてたまらなくなる。

「お願いだから、そこをどいてくれないかしら？」

「何で？ せっかく会えたのに……」

「しつこいわね！ いい加減にしないと警察呼ぶわよ！」

「……そんなこと言わないでよ。ねえ、『凜』お姉ちゃん
!？」

その一言で凜は警戒を更に強める。

「……何で私の名前を知っているわけ？」

『凜』という名前自体は、そこまで珍しい名前というわけではない。だが、偶然の人間違いというには、あまりにピンポイント過ぎる。少なくとも、目の前のゴシックロリータの少女は、こちらが『遠坂凜』であるということを知り、それを承知の上で接触してきている。と、考えた方が自然だろう。

「何で知っているかって？」

ゴシックロリータの少女はニヤリと笑う。顔を上げた際に見えた彼女の目は眼下に濃い隈が出来ていたが、何処か自身の目に似ているような気がした。

「それはボクがお姉ちゃんの家族だからだよ」

あまりにハッキリとそう言うものだから、凜は思わず頷きかけてしまった。そんな筈が無いことは自身が一番分かっている。

「……何を言うかと思つたら、よりにもよつて家族ですつて？ 私にアナタみたいな自分を『ボク』とか呼ぶ妹はいないんだけど？」

「ボクはお姉ちゃんの妹じゃないよ」

「だつたら、私の姉かしら？ それだと、姉の癖に私を『お姉ちゃん』と呼ぶ変なお姉ちゃんつてことになるけど？」

「それも違うよ」

凜の皮肉にもゴシックロリータの少女は首を振るだけであつた。

「……じゃあ、何かしら？ 悪いんだけど、これ以上アナタの妄想には付き合つてあげられないわよ？」

そうは言いつつも、凜は何故かこの少女を素通りすることが出来ないでいた。無視しようと思えばその機会は何度もあつた筈。それなのに、何時の間にか彼女から目を離せないでいる。

「ボクはね……」

ゴシックロリータの少女はくいつと顔を上げ、喉を見せる。そこにはくつきりと喉仏の形が見えた。

「まさか、アナタ……」

女子でここまで喉仏が隆起しているのはかなり珍しい。だが、ハスキー気味な声と

骨つぼく少し肩幅広めな体格を併せて鑑みると、別の答えが浮かんでくる。

「……ボクはね、お姉ちゃんの『弟』だよ」

ゴシツクロリータの少女……改め、少年は躊躇なくそう言い放った。

凜は唾然とする。

「弟……ですつて?」

「うん。そうだよ。ボクはお姉ちゃんの弟!」

「……呆れ果てたわね。家族を騙るストーカーの上に女装の変態とか。そんなのが私の家族だなんて笑わせないで。仮に本当に生き別れの弟でもこちらから願ひ下げだわ」

この時、凜は嫌悪感とは別に、胸の奥にざわつくような感じを覚えていた。有り得ないことだが、彼女……いや、彼の言っていることが真実なのではないかという懸念。それを振り払うかのように凜は彼へ否定の言葉をぶつけるのであった。

「……遠坂時臣も男だったってことだよ」

少年が何食わぬ顔でそう言うのと凜の表情がサツと変わった。

「……父さんを侮辱するつもり?」

「事実を言ったただだよ。お姉ちゃんが知らない家族ってことは、つまりはそういうことだよ」

「いい加減にしなさい。何処で父さんの名前を知ったか知らないけれど、今すぐその不

快な口を閉じないとただじゃ済まさないわよ」

「……そんなに怒るってことは、お姉ちゃんにとつてはいいお父さんだったのかも知れないねえ。遠坂時臣は」

クククと少年は笑う。

「……だったら、ボクに協力してくれるよね？お姉ちゃん？」

「協力……ですって？」

凜は眉を顰める。同時に嫌な予感もしていた。

「お姉ちゃん、ボクと一緒に聖杯戦争で戦ってよ！」

「!!」

聖杯戦争。

その言葉をこんな人物の口から聞くと、凜も流石に思ってもみなかった。聖杯戦争が何かを彼女はよく知っている。関係者どころか参加者であったのだから。かつて、この冬木町にて起き、彼女の体験した出来事の数々。それらには聖杯戦争が関わっていた。忌まわしくも懐かしい記憶である。

「……ようやく合点がいったわ。どうしてアナタみたいな奴にこんな胸騒ぎを感じていたのか。感じざるを得なかったのか」

そう言った後、凜は臨戦態勢を取る。

「つまり、アナタは魔術師ってことね？それも、私の敵！」
「ボクと戦うつもりなの？」

少年は身構える素振りを一切見せなかった。まるで、戦いなど起きぬと確信でもしているかのよう。

「……残念だなあ」

「ええ。そうね。アナタにとっては、だけど」

「……アサシン」

「!？」

直後、凜は強い力で後ろから押さえ付けられた。

「サーヴァント!？」

警戒はしていた。油断もしてはいない。少なくとも、周囲には気を張っていたつもりであった。それなのに、こうもあっさりと背後を取られてしまうとは。まるで幽霊の如く、直前までその気配に気付くことが出来なかった。

「……力づくつてのは、なるべく避けたかったんだよね。だって、姉弟っぽく無いでしょ？」

「アナタ……アサシンのマスターだったのね」

「うん。そうだよ」

少年はあっさり認めた。

「それじゃあ、行こうよ。お姉ちゃん」

「行く？ 行かつて、何処へ連れて行くつもり？」

「勿論、ボクの家。緑川にあるから、そこまで遠くないよ」

「冬木町じゃないの？」

「その辺は追々話してあげる。今は姉弟の再会を喜ぼうよ！」

「誰が……くっ!？」

「アサシン。手荒な真似はしちやダメだよ。だって、ボクのお姉ちゃんなんだから」

「……聞かせてくれるっていうなら、その辺のことも詳しく聞かせて欲しいわね。どうもただの与太話じゃ無いみたいだし」

「うん。後でいっぱいお話ししようね！」

そうして凜を連れていこうとして、少年はハツとなつて立ち止まった。

「……そう言えば、名前をまだ言つてなかったね」

少年は凜を見下ろしながら自らの名を告げた。

「ボクの名前は真。フルネームは草壁真。真つて呼んでくれると嬉しいな。名字が違うのは察してね」

遠坂凜と草壁真

「……………ここが、ボクの家だよ」

凜が無理矢理連れて来られたのは、とあるマンションの一室であった。ILDKと
いったところか。新築なのか、中も綺麗で、一人で暮らすには十分過ぎる程である。た
だし、家具などは最低限のものしか置いてなくて生活感はあまりない。

「そんなに緊張しないでくつろいでよ。何も無い部屋だけど、お茶くらいなら出せる
し」

「……………」

そんなことを言われたところで敵の根城でくつろげるわけがない。ましてや、敵から
出された飲み物に口をつけるなんて以ての外であろう。

凜は、無言でただじつと草壁真という少年のことを見つめていた。

「着替えるからちよつと待っててね」

そう言つて真は着ているゴシックロリータの服を凜の目の前で脱ぎ始めた。彼女が
見ていることもお構い無しといったところである。

晒された真の体は全体的に華奢な体型と透き通るような白い肌から、女性特有の丸み

こそ帯びてはいないものの、凡そ男性っぽさを感じられなかった。服さえ着ていれば発育不足で痩せ型の女子で騙し通せてしまうだろう。真の女装の理由が趣味なのか他に理由があるのかは凜には分からないが、そのレベルは決して低くはない。現に、凜も初見では彼のことを女子だと思わされたのだから。

「……………ふう」

真の着替えは意外と早かった。女性の服、それもあんなゴシッククロリータの服など、慣れていなければ着るのも脱ぐのも時間が掛かる代物である。彼の女装癖は恐らく筋金入りなのだろう。

真の新たな服装は黒いタートルネックとジーンズという意外にもラフなものであった。髪も前髪をアップにし、輪ゴムで結わえている他、後ろの方もポニーテールのようにしている。

「お待たせ、お姉ちゃん！」

「……………あら。自分の家では女装しないのかしら？」

「その方がいいって言うなら今から着替えてもいいけど？」

「……………結構よ」

相変わらず、彼には凜の皮肉が通じない。いや、皮肉とも思っていないのだろう。

「紅茶でいい？」

「それも結構よ。何入れられるか分かったもんじゃないし」

「砂糖とミルクくらいしか入れないよ。ああ、蜂蜜とかもいいよね！」

真はキッチンへ向かうとヤカンに水を入れ、コンロの上に置いた。そして、換気扇を回した後にカチツと火を点ける。

「……いらないうて言つたつもりだったけど？」

「ボクが飲むんだよお姉ちゃん」

紅茶のティーバッグを取り出しながら真は言つた。それから数分間、彼は無言で紅茶を作っていた。わざわざカップをお湯で温めたりしている割に、市販のティーバッグを使い、砂糖らしき白い粉と蜂蜜を大量に入れている。中途半端に通ぶっているのが何となく凜を苛つかせていた。

「お待たせ！」

真は笑顔で今しがた作った紅茶の入ったカップを持つて来た。甘つたるい匂いが凜の鼻を突く。飲まなくとも、その紅茶がとても甘いことが分かった。これだけ甘くしたら、紅茶の風味も全て台無しになってしまうのでは、と凜は思った。

彼はそんな凜の視線を気にする素振りも見せずにカップへ口をつけて、それをずずつと飲み始めた。

「……………」

凜は思わず胸焼けしそうになる。彼女も紅茶は好きな方で、砂糖も入れるタイプだが、流石にここまでではない。そもそも、こんな糖分の塊を体に取り入れたら、すぐに病気になるってしまうだろう。

「……あく、美味しかった」

カップの中身を飲み干した真はそう言って一息ついていた。

あまりに無防備で、凜のことを舐め切っていると思われるも仕方ない様子。まだまだ勉強中とは言え、魔術師である者と一緒にいる態勢とは思えない。

だが、そこを突いて脱走しようにも、感知出来ないサーヴァントの存在がどうしても気に掛かる。サーヴァントの力量について、凜は理解しているつもりだ。少なくとも、今の彼女が真正面から戦って倒せる存在ではない。しかも、相手はあらゆる捌め手を得意にしていると思われるアサシンのクラスのサーヴァントである。今もその刃を彼女の喉笛に当てているかも知れない。迂闊に動くのは得策でない以上、いくら相手が隙を見せていても、それに乗じるわけにはいかない。

「……ねえ」

凜は一先ず会話から情報を得ることにする。このような相手と会話するのは彼女的には勘弁ならないが、四の五の言っていられる状況じゃないのは百も承知であった。

「アンタ……」

「マコトって呼んでよ。姉弟なんだからさ」

「……アンタ、一体何者なの？」

「お姉ちゃんの弟だつて言ってるじゃない」

「さつきも言つたけれど、私に弟なんていない……少なくとも、私は知らないわ。父さんだつてそんなこと一言も……」

凜は父親である遠坂時臣を家族としても、また一人の魔術師としても敬愛している。彼女にとつて、時臣という人間は理想の男性像でもあるのだ。それ故に、時臣が母親や凜に隠れて別の女性と……などと考えたくもないのが正直なところであつた。

「まあ、時臣の口からそんなこと言えるわけが無いからね。でも、ボクはお姉ちゃんのことを知っていたよ」

真はそう言うのと、首に下げていたロケットを取り、中を開いて見せた。そこには、凜の幼い頃の写真が入っていた。何時撮られたものかは分からないが、紛れもなく本人である。

「これは、お母さんがボクに遺してくれたもの。ボクの最後の家族の手掛かり……。そう、お姉ちゃんのことだよ」

真は愛おしそうな目で凜のことを見る。今の彼の口振りだと、彼の母親はもうこの世にはいないように聞こえた。

「……あなたの母親は一体何者なの？」

真が本場に自身の異母姉弟であるかは一旦置いておき、凜は素朴な疑問をぶつける。

「ボクのお母さんに興味を持ってくれるなんて嬉しいなあ。いいよ。教えてあげる。ボクのお母さんの名前は草壁真理。魔術の研究一筋の人生を送った本当の意味での研究者だよ。あ、でも、ボクのことを放ったらかしにせずにはちゃんと育ててくれたから、そこまで一筋でもないか」

「魔術の……研究？」

「うん。時臣ともそれで出会ったんだって」

「……………」

凜は幼い頃を思い出してみるが、草壁真理という女性など全く記憶に無い。少なくとも、彼女の行動範囲にそんな人物はいなかったという確信がある。

「その、草壁真理さん、だっけ？その人はもう……」

「うん。事故だね。呆気ない最期だったよ」

真の口からは凜が予想していたことと同じ答えが返ってくる。もしも彼女が生きていたならば、一目会って見たかったが、それでは仕方が無い。

それにしても、自分の母親の死をそんな軽く言えるものだろうか、と凜は思った。彼女でさえ、亡き父親の話をする時には、今でも多少は寂しさを感じるのだ。真のように、

何も感じていないような目など到底出来ようも無いだろう。ますますもって、相容れない存在であることを認識させられる。

「聖杯戦争の参加者ということとは、アンタは魔術師ってことかしら？」

「まあ、そういうことになるね。ボク以外の参加者がどうかは知らないけどさ」

「サーヴァントは魔術回路を持つ者しか召喚出来ない。それが、聖杯戦争の大前提よ」

「お姉ちゃんが参加した聖杯戦争はそうかもね」

「……どういふことかしら？」

まるで、凜の知っている聖杯戦争とは別の聖杯戦争があるような言い方であった。凜が一年前に参加した聖杯戦争よりも更に昔に聖杯戦争が行われたことは知っているが、それらは同一のものであるというのが彼女の認識だ。

「私が戦った聖杯戦争とアンタの聖杯戦争は別物だって聞こえるんだけど？」

「うん。そうだよ」

真は即答する。

「今、ボクらが参加している聖杯戦争は、魔術回路を持たない人間でも参加資格を持っている、全く新しい聖杯戦争なんだ」

「全く新しい聖杯戦争ですって!？」

凜は思わず大きな声を上げていた。彼女の知る聖杯戦争は、歴史ある伝統的なもので

ある。故に、模倣した偽の聖杯戦争が行われたことは過去に幾度もあった。凜は真つ先にそれを連想する。

「……つまり、偽物つてわけね」

「さあ。どうだろうね？」

真はそう言うに止めた。何か確信めいた表情に見えるのは気のせいだろうか。ただ、偽物に踊らされているようにはあまり見えない。

「……アンタの目的は一体何なの？ 聖杯戦争……ということは、当然叶えたい願いがあるってことよね？」

聖杯戦争に参加するということは多大なリスクを負うことになる。最悪の場合、命だつて奪われかねない。それでもその戦いに身を投じようとするのは、聖杯が叶える願いがあからである。中には、凜のように魔術師としての実力を証明する為に参加するような者もいるが、そういった人物は稀少な存在と言えるだろう。

もつとも、凜の考えからすれば、本当に聖杯が得られるかどうかは甚だ疑問ではあるが。

「うん。勿論あるよ」

「良かったら聞かせてくれるかしら？」

「いいよー」

真はあつけらかんと言つてのけた。隠すつもりが無いのかブラフなのかは分からないが、ここまで淀むことなく答えてくれると疑いの気持ちの方が強くなる。

「ボクの願いはねえ……」

真は凜の顔をじつと見た。ねつとりと舐め尽くすかのような視線に凜は一瞬怖気が走る。

「家族皆で一緒に暮らすこと！」

「家族皆で？」

「うん！お母さんと時臣とお姉ちゃんとおボク。あ、お姉ちゃんのお母さんも、かな？……ああ、それともう一人いるらしいけど、それは別にいいや。だって、もう家族じゃないんでしょ？そいつ」

「……要するに、アンタの願いは死んだ人間を生き返らせたってことかしら？」

真の願いを叶える為には、少なくとも鬼籍に入った者たちの蘇生が不可欠である。無論、仮にそうなったとしても、凜は真と一緒に暮らしたいなどと微塵も思つてはいないが。

「まあ、確かにそれは必要になるね。でも、間違えないで。ボクの願いの本質は “一緒に暮らすこと”だ。一緒に暮らせれば、本当に生きてるかなんて些細な問題だよ」

「何ですって!？」

死んだ人間は生き返らない。それが変えることの出来ない自然の摂理である。だからこそ、生は尊ぶべきものであるし、死は不可侵の領域であると言える。真の願いはそれを滅茶苦茶にするに等しい。

「……命への冒瀆ね。死者の尊厳を踏み躪る気なの？」

「お姉ちゃんだって、また家族皆で一緒に暮らしたいでしょ？」

「確かにまた会えるものならば父さんに会いたい。けれども、その感情と禁を犯すことは別よ。悪いけれど、アンタの願いには賛成出来ないわ」

「救える命は救いたい。だが、既に失われてしまった命を取り戻すことは絶対に許されない。それは生者と死者を分ける明確なルールなのだから。」

「そっか。でも、きつとお姉ちゃんも考え方が変わると思うよ。ボクと一緒に戦ってくれたらね」

「愚問よ。有り得ないわね。アンタみたいな異常者と一緒に戦うなんて。ましてや、一緒に暮らすなんて想像しただけで鳥肌ものだわ」

「ふふふ……」

真は不気味に笑う。

「今はそれでいいよ。でも、ボクは信じてる。お姉ちゃんもきつと分かってくれるって」

「……………」

うつとりと凜のことを見つめる草壁真。まるで、自分が言ったことが実現すると信じて疑っていない。凜の拒絶さえ意に介していない様子である。

凜は何故だか、嫌な予感が拭いきれないでいた。

男は今日も仕事へ行く

「いやあ〜。本当によく働いてくれるわあ〜」

お気に入りのゴルフクラブを磨きながらそう言うのは、田川良男。某所の小さな雑居ビルに事務所を構える金融会社、田川ゴールドの社長である。田川ゴールドは、高い金利を課す代わりにどんな相手へでも金を貸す、言わば闇金と呼ばれる会社であった。

「はあ……」

特に感情もなく馬堀は相槌を打つ。元々口数が多い方では無いが、田川との会話を出来ればしたくはなかったのだ。

「馬ちやくん。褒めてんのよ？喜びなさいよ」

「はあ。有り難うございます」

「んもう、イケズなんだから〜」

お姉口調で田川は言った。明るい物言いだ、目は全く笑っていない。

「相変わらず可愛くないわね。馬ちゃん。まあ、そんなところがいいんだけどね。……それにしても」

田川はチラツと横へ視線を向ける。そこには、一人の外国人がいた。物珍しさから

か、室内を物色し回っている。彼は先日、馬堀の前に突然現れ、「アーチャー」と名乗った男であった。

「馬ちゃんがここに知り合いを連れて来るなんて珍しいこともあるのねえ。それも外国人なんて」

「……社長には感謝してます。色々と手を回して頂いて」

「偽造パスポートに偽造身分証明書、偽造ビザ。本当に大変だったんだから。馬ちゃんの頼みじゃなきゃ断ってたわよ」

田川は恩着せがましく言うのと、再びアーチャーを一瞥する。

「……それにしてもいい男ねえ。私好みのイケメンだわあ。ねえ、ちよつと!」

「……俺かい?」

アーチャーが振り向くと、田川は満面の笑みを浮かべる。

「あらあら、真正面から見てもやっぱりイケメン! ねえねえ、アンタの名前は?」

「アーチャー。そう呼んでくれて構わない」

「アーチャー! いい名前ね!」

オカマのハイテンションほどうざったいものは無いと馬堀は眉間に皺を寄せている。今回のことも含めて、田川に恩こそあるが、決して彼に好意を持っているわけではない。寧ろ、馬堀の個人的にこの世から消えて欲しい人物ランキングの上位を常に位置してい

るような人物であった。彼は金貸しとしては優秀だが、人間としては下衆の極みでしか無いというのが馬堀の見解である。

もつとも、それは馬堀もまた同様であり、彼自身も自覚していることなのだが。

「……ああ、そうそう。馬ちゃん」

何かを思い出したかのように田川が話し掛けてきた。馬堀の思いを知ってか知らずか、ただニマニマとした顔を向けている。表面通りに受け取り難い、何とも微妙な笑顔であった。

「お仕事よ。ちよつと、行つてきて頂戴」

「はあ」

相変わらずな馬堀の返事。否定に限り無く近い肯定の言葉である。金貸しの仕事が嫌なのではなく、田川という男の指示に従うのが嫌なのであった。この態度は今に始まったことではなく、田川に出会つてからずっとこのような感じで通している。当初は当然の如く叱責の対象であり、指の骨を全て折られたこともあったが、馬堀は決してその態度を改めることは無かった。向けたくもない敬意は初めから出さないというのが、彼の信念である。一念岩をも通すとは言ったもので、貫き通すことで、逆に肝が座つていると気に入られることになったのはある意味では皮肉なのかも知れない。

「詳細は何時ものようにメールで送つてあげるからチェック忘れずにね。あと、見終

わつたらすぐに消すのよ」

「……分かりました」

馬堀は立ち上がり、事務所の出入り口まできつきと歩いていく。まるで、一秒でも早くここから出て行きたいと言わんばかりであった。

「！一人で出歩くのは良くない。私も付いていくとしよう」

「あ、アニキ！俺も行きやす!!」

アーチャーとサブがそれぞれ馬堀の後を追う。仕事であるサブは当然としても、アーチャーが付いてくるのは馬堀にとって不可解でありうざったい以外の何者でも無かった。

思い出せば、このアーチャーという男と出会った時も不可解でしかなかった。借金の取り立てに行つた先で対象者が自殺。現場にあつた魔方陣から突如、男が出現。男は自らをアーチャーと名乗り、馬堀のことをマスターと呼び、付きまとう。明らかに普通ではない。通常であれば、こんな輩は殴り飛ばして終わりなのだが、このアーチャーという男はその佇まいが只者ではなかった。この仕事を始めてから何度も危うい目に遭つてはそれを切り抜けてきた馬堀だからこそ、彼の纏う不穏な何かに気が付けるのである。

——この男はヤバい。

だから、アーチャーが付きまどつてくることに對して、馬堀は目を瞑ることにしていった。もつとも、言つたところで全く聞かないから面倒臭くなつたというのもあるのだが。

「……………」

馬堀は改めてアーチャーという男を見た。長身の自分よりも背が高い黒髪の西洋人。ガタイも良く、探検家のような格好も相俟つて明らかに周囲と浮いている。顔は少々垂れ目がちなところが柔和な印象を与えるものの、その実様々な修羅場をくぐり抜けてきたことを物語るように達観している。年齢的には、馬堀よりも上であろうが老熟した感じは見受けられない。三十代後半〜四十代、といったところか。それでこれだけのオーラを発するなど、並大抵の人間では無いのだろう。そもそも、人間かどうかも怪しい。

「どうしたい？ マスター？」

馬堀の視線に気が付いたアーチャーがそう尋ねてきた。マスターと呼ぶ割に、かなりフランクな喋り方をしてくる。

「……………何でもねえよ」

ふと馬堀は右手を見た。今は黒い革手袋をしているが、その下には妙な紋様が何時の間にか刻まれていた。この紋様が何なのかは分からないが、アーチャーと何らかの関係があるのは間違いないだろう。そういうことも含めて、この男には不信感しか抱いてい

ない。

「行くぞ」

取り敢えず、今は目の前の仕事を片付けようと馬堀は二人を連れて外へ出た。

「まくたその話か、アーチャーよお」

目的地へ向かう道中、サブがアーチャーに言った。アーチャーは二人の前に現れてから、事ある毎にあることを馬堀へ話してくる。それは、聖杯戦争という戦いについてのことであった。

「アーチャーよお。向こうじゃそういう映画かゲームが流行つてんのかい？」

「違う違う。今、起きていることだ」

「今は仕事中だろアーチャー」

サブはやたらと上から目線でアーチャーへと話し掛ける。彼にとって、馬堀をマスターと呼ぶアーチャーは自身の後輩という解釈なのであった。

「聖杯戦争なんつーもんはなあ。仕事が終わってからだよ。分かったかアーチャー？」

「そうか」

アーチャーは顎の無精髭を擦りながら言った。

「……じゃ、この話は後つてことで。俺はマスターの仕事が終わるまで待たせて貰うこ

とにしますかね」

「馬鹿！てめーも手伝うんだよ！このアホ外人!!」

「うるせーぞサブ!!」

馬堀が声を張り上げた。

「……お前、何時から他人に指図出来る程偉くなったの？」

「す、すみません!!調子に乗りました!!」

「素人に中途半端に手伝われると色々面倒なんだよ。……おい、てめーも手貸そうとか思い上がんじゃねーぞ」

「マスターがそう言うなら、手出しはしませんよ」

「フン」

三人はその後、無言で歩いた。

中背中肉のサブはともかく、大柄な馬堀とアーチャーが二人並んで、ただでさえ目立つ。その上、アーチャーの格好はどうも鼻屑目に見てもコスプレにしか見えず自然と衆目を集めてしまう。これまで馬堀はそういったものは全て無視していた。あまりにうざったい時にはひと睨みしてやれば、蜘蛛の子を散らすように周囲から人がいなくなるのだが、そこまでしなくとも好奇の視線にはいい加減慣れていたので、そのまま電車へ乗り、目的地へと向かった。

「……………か」

田川のメールにあつた住所へ辿り着いたのは会社を出てから二時間程度であつた。冬木町の駅に降りてから少し歩いた所にその家はあつた。

「……………ここが衛宮の家か」

馬堀はそれを確認すると、呼び鈴を押しした。

「……………こんにちは。衛宮さんいますか？」

僅かな違和感

「はー」

呼び鈴を押してから一分も経たない内に入り口の戸が開いた。出て来たのは一人の高校生くらいの少年であった。今は土曜の午後なので、学生も部活動などが無ければ帰宅している時間ではある。また、最近では土曜日が休みという学校も多いという。馬堀の学生時代にはそんなものは無かったが、そもそもそんな恩恵を受けられる程まともな学校では無かったのだ。土曜の午後にはのほほんと家にいられるなんて、十分恵まれているんだなという感想を抱くのみであった。

「衛宮切嗣さんいますか？」

馬堀は少年へ尋ねた。いくら何でも目の前の学生風情が自分のところに金を借りに来るとは考え難いし、少年からは債務者特有の後ろめたさは感じられなかった。彼は衛宮切嗣では無いだろう。

「……親父の知り合い、ですか？」

少年が警戒した様子で聞き返して来る。流石に馬堀が堅気の人間には見える訳も無し。無理もないだろう。

「親父……つてことは、アンタ息子さん？」

「そうだけど……」

「ふーん」

馬堀は衛宮切嗣の息子と名乗る少年のことを改めて見つめた。訝しげな目でこちらを見てはいるが、馬堀のような大男を前に一切物怖じしてはいない。この年齢にしては、随分と肝が据わっている。まるで、それ以上に何か壮絶な体験でも経てきたかのようだ。

「……早速で悪いんだけど、ちよつとアンタの親父さんをここに呼び出して貰えない？」
だが、そんなことは関係なく、馬堀は淡々と自分の仕事をすることにする。相手が、一筋縄ではいかなそうな学生だろうと、それは変わらない。

「……親父に何の用だ？」

その質問は当然であろう。こんな不審な男が急に訪ねてくるなど普通は有り得ないのだから。

「アンタの親父さんが借りたものを返して貰いに来た。これだけ言えば分かんדר？」

「親父が……借りたもの？」

「そ」

「アンタたち、どう見ても借金取りにしか見えなけれど、まさか……？」

このリアクションは父親が借金をしていたことを知らないパターンの典型であった。そして、次を取る行動も大体決まっている。父親へ確認を取るのだ。ここで下手に自分たちのことを知らされると目当ての人間に逃亡される恐れがある。

「取り敢えず、何も言わずに衛宮切嗣をここへ連れて来てくんない？」

「……それは無理だ」

「てめえ!!何ふざけてんだゴルア!!」

急にサブが間に入って来た。相変わらずただ喚くだけである。

「サブ、いいからテメーは引っ込んでろ」

「ですが、アニキ……」

「引っ込んでろ」

「……はい」

馬堀が睨み付けると、サブは大人しく下がっていった。力押しで返済を迫るのは下の下のやり方である。やり過ぎれば反発されたり警察沙汰になってしまうからだ。こういうところが素人だと馬堀は心の中でため息を吐いた。

「……で、今、無理とか言った？」

馬堀は声のトーンを一段階低くする。

「無理でも何でも連れて来い」

「……っ！親父はもう死んでる。死人は連れて来れない」
「何？」

馬堀の表情が僅かに変わる。

「死んだ？それ、何時？」

「五年前……いや、六年前になるか。何れにせよ、親父はもういない」

「あっそ」

馬堀は首を傾げる。債務者の生死は重要な情報である。昨日今日死んだというのならばともかく、何年も前に死んでいるのであれば、そういった情報は共有される筈なのだ。

しかし、田川から送られてきたメールにはそんな情報は全く無かった。まさか、田川程の人間がそんな初歩的なミスを犯すとは考え難い。人間としては見下げるような男でも、金貸しとしては優秀極まりないからだ。彼の取り立ての果てで人生を終わらされた人間を馬堀は何人も知っている。だからこそ、この仕事の上では信頼出来る人間でもあるのだ。それに、約八年前の借金を今更取り立てに行くというのも今考えれば不自然ではある。

(……何か、きな臭いな)

それは馬堀の直感であった。田川がこのことを知っていたにせよ、知らなかったにせ

よ、別の何かの思惑が働いているかのような違和感を覚える。

だが、それはそれ。今は仕事。債務者が未返済のまま死んだりとんずらした場合、保証人から受け取るのが決まりである。馬堀の持つ借用書には保証人として身内を立てるといふ記載がある。本来ちゃんとした借金であれば、このような表記では通らないのだが、そこは馬堀たちの会社が特別であった。あまりルールに則り過ぎれば相手が警戒して借りるのを止めかねない。故に緩くしている部分でもある。この場合、身内であるこの少年に全額返済して貰うのが常套であろう。

ただ、この手の仕事は法律に反する金利を設けているが故に債務者には返済の義務が生じないのがネックである。その上で金を取り立てなければならぬのだから相当な技量が必要とするのだ。

「……だったら悪いんだけどアンタが払ってくんない？アンタの親父の借金をさ」

「ちよつと待ってくれ。親父が借金してたなんて初耳なんだ。本当なのか？」

「これ、借用書ね」

馬堀は少年へ借用書を見せた。無論、奪われないようにしつかりとこちらで持っている。

「……確かに親父の筆跡に似ている。けど、やっぱり信じられない」

「信じる信じないはこの際重要じゃないんだよね。大事なのは、返すか返さないのか。」

それだけ。で、返せんのか？」

「こんな大金、あるわけないだろ！」

借用書に記載されていたのは、凡そ一人で返しきれぬ額では無かった。まともな社会人ならともかく一介の学生ではほぼ不可能と言えるだろう。

もつとも、馬堀たちの狙いは全額返済ではなく、利子分の返済を出来るだけ長く続けてくれることである。貸した分に乗せ返して返ってくる金額がそのまま会社の儲けとなるのだ。だから、借りて即返済されるのも実はあまりよろしくない。

「なら、取り敢えず金利分でもいいよ。ウチはトサンだからその八年分でこんくらいになる。まあ、今回は初回サービスってことでこんだけにまけてやるよ」

馬堀は携帯電話の電卓を少年へ見せる。

「こんなん払えるわけないだろ!!」

「借りたのはそつちだろ？」

「だとしても! いや、そうじゃなくて……」

「土郎。何、大声出してんの？」

玄関でのやり取りを不振がったのか、家の中から女性が声を掛けてきた。すぐにドタと足音が向かって来る。

「どつたの土郎？」

「藤ねえ!？」

声の主は妙齡の女性であった。母親にしては年が若い。姉か親戚、或いは年の離れた彼女といったところか。

「……何よあなたたちは？」

藤ねえと呼ばれた女性は訝しげな目を向けて来た。こういう視線には慣れているので、今更どうということはない。

「アンタ、こいつの家族？」

「いいえ。でも、家族みたいなものです」

「つまり、コレか？」

馬堀は小指を立てた。それを見て彼女は顔を赤くする。

「な、何で私が土郎と!？」

「家族でもない女を家に上げてるのなら、普通はそう思うだろう？」

「ち、ちくがいまくすうく!!」

「別にアンタが何処の誰でもいいけど、無関係ならすつ込んでてくんない？面倒臭いから」

「無関係じゃないわよ！大体、あなたたちは何なのよ!？事と次第によつては警察呼ぶわ

よ!？」

「んだとアマア!？」

「またもサブが出て来る。サブはどうも沸点が低い。」

「調子こいてんじゃねえぞこのドブス!!」

「誰がドブスですって!？」

「てめーだよ! 見るからに行き遅れが!!」

「行き遅れえ!？」

「その言葉が彼女の琴線に著しく触れたようで、一瞬で目が吊り上がる。」

「上等じゃない!!」

「そう言うのと、何処からか木刀を取り出して構えた。」

「お、おい、藤ねえ!」

「どうせ、ろくでもない連中なんですよ? こんな連中、すぐに追い払って……」

「と、その時、馬堀が木刀の先をガシツと搦んだ。」

「なっ!？」

「……………」

「う、動かない…………」

「…………で、誰を追い払うって?」

「馬堀は冷めた目で彼女を見下ろす。」

「こちらにも非があるつつつても、暴力は感心しねえな」

「つ……………」

「…………おい、サブ。てめえ引つ込んでろつつつたろ。誰が勝手にしゃしゃり出ていいつつつた？」

「…………!!す、すんません!!」

「駄目だな。謝って済む段階はとづくに終わってんだよ」

そう言うのと、馬堀は空いている方の手で握り拳を作り、そのままサブの顔面を打ち貫く。

「グアハ！」

サブは鼻血を噴き上げながら、後ろへと倒れ込んだ。馬堀の拳には鼻の骨が折れる感触があった。あの鼻血はすぐには止まらないだろう。

「ず、すんませんでした……………」

「部下が馬鹿で悪いな。で……………」

馬堀は木刀を掴む手に力を込めた。すると、バギツと鈍い音を立てて木刀の先端が折れる。

「返すの？返さないの？どっち？」

先程のやり取りで場が一変する。引き気味の女性とは別に、土郎は馬堀たちを睨み付

けたまま一歩も引き下がらない。

不穏な空気が周囲に漂い始めていた。

「……これでよかつたのかしらん？」

「ええ。有難う御座います」

「馬ちゃんを騙すのは流石に少し心苦しいわねえ」

「少しだけ……ですか」

「そうよ。少しだけよ」

田川はニカツと笑った。

「それにしても、アナタもそんなにいい顔して、結構悪どいのね」

「お褒め頂き、至極光榮です」

「ねえ。何処の教会なの？私、礼拝行っちゃう！」

「神はどなたでも歓迎いたします。是非とも来て下さい」

「こちらこそよん♪」

「では、私はこれで……」

「また来てねえん♪」

そう言って田川は男を見送った。

「……何を考えているか全く読めない。あんな人間は初めて。……そもそも、人間なのかしらね？」

田川は近くにある煙草を一つ取り出すと、火を点け一服する。紫煙の中、その目だけは得たいの知れぬ男への警戒を忘れてはいなかった。

暴力

「どうしたの?」

この場へまた新たな登場人物が現れる。それは、銀髪の少女で明らかに日本人ではない。容姿の幼さから、恐らくは士郎少年よりも年下であろう。士郎少年との繋がりはよく見えないが、訪問してきたにしてはラフで薄手な格好なのを見るに一緒に住んでいるのでは無いかと推測される。

二人の同居人と思われる者たち、それもどちらも兄弟や親類では無さそうで、年代の違う女性。おまけに片方は国籍も違う。学生身分でこの生活環境は、どう見ても不自然極まりない。あれだけの借金をしてもおかしく無いようにさえ思えてきた。

「……おじさんたち誰?」

銀髪の少女は物怖じせずに尋ねてきた。馬堀の外見を見てもリアクションが薄いのを見るに、見た目よりも肝は座っているようだ。或いは、幼さ故の無知か。

こういう事態に幼い子供を巻き込むことはよくあることだ。大概はその親であったり保護者の自己責任で彼らに罪は無い。

「……ガキは引つ込んでろ。大人の話だ」

だが、それとこれとは話は別で、取るものはきっちり取らねばならない。一度でも仏心を見せて猶予を与えようものなら、こういう連中は付け上がるだけからだ。

もう一日待つて下さい。

もう一日待つて下さい。

という風にずるずる引つ張つて、いずれ逃亡や出し抜くことを考え始める。そうさせない為にも、金は取らねばならないのだ。

例え、小さい瞳がこちらをじつと見ていても馬堀は一切の手加減をしない。

「今日の分も出せないなら、ちよつと面貸して貰うことになるけどいいか？」

「何をする気だ？」

「いいバイト紹介してやるよ。知ってる？人間の臓器つてさ、高く売れるんだよね」

「臓器!？」

藤ねえと呼ばれた女性が悲鳴のような声を上げた。無理もない。ドラマや映画でしか聞いたことの無いような台詞を現実で聞いたら誰でもそうなる。しかも、それが冗談の類で無ければ尚更だ。

「取り敢えず肺と腎臓だな。どっちも二つあるから一つ無くなつても問題無いしな」

実際は片方が無くなると実生活に多大な影響を及ぼすのだが、そんなことは馬堀の

知ったことではない。

「まあ、最近は不景気のせいで臓器もあまり高く売れないんだがな。一つ二十万つてところか。利子分には少し足りねえかな？」

「勝手に話を進めるな。大体、こんな明らかに闇金じゃないか！」

「そ、そうよそうよ！闇金の借金は支払う義務は無いのよ！」

反撃の糸口を見つけたのか、二人は果敢に言い返し始めた。

「……そもそも、親父が借金したって話自体が疑わしい」

士郎少年のその言葉に銀髪の少女がピクリと反応を示す。

「……キリツグがどうしたの？」

「どうもしない。こいつらの言い掛かりだ！」

「び、びた一文だつて払いませんからねっ！」

「……言い掛かりとか払わないとか、盛り上がんのは勝手だけどさ」

馬堀はそう言うと、顎の髭を一撫でした。

「借りたもんは返して貰うよ？どんな手を使つても」

「……………」

二人は同時に黙り込んだ。馬堀の醸し出す威圧感がそれ以上の言葉を許さなかつたのである。それでも、士郎少年は敵意を込めた視線を逸らそうとはしなかつた。本当に

度胸のある少年である。まるで、馬堀と同等かそれ以上の何かと何度も対峙してきたかのような慣れであった。そして、その態度が馬堀を僅かに苛立たせる。

「……………」

「……………」

一触即発の空気。

藤ねえと銀髪の少女は固唾を飲んで見守っている様子である。

「……………ん?」

と、馬堀は急に視線を右側へ逸らした。士郎少年はそれに釣られて馬堀と同じ方向へ視線を向ける。

「……………!!」

馬堀はその瞬間を逃さず、距離を詰めた後に拳を士郎少年の鳩尾目掛けて打ち込んだ。僅かな意識の外をついた一撃。それが、見事に決まる。

「……………ッ!」

腹部へ重い衝撃を受けて士郎少年は思わず膝をつき、胃液を吐いた。あまりに不意だったので、この衝撃に対する準備が出来ていなかったようである。

「士郎!!」

「シロウ!!」

蹲る士郎少年へ藤ねえと銀髪の少女が駆け寄る。

藤ねえの方がキツと馬堀のことを睨み付けた。

「何をするの!?!」

「教育だよ」

「教育!?!」

「そうだよ。このガキさつきからずつとタメ口だったからな。年上にはちゃんと敬語使えないとろくな大人になんねーぞ。俺らみたいにな」

馬堀は表情を変えずにそう言い放った。

「で、俺らはろくな大人じゃないから、取り立てでもろくなことしかしない。この意味、分かるな?」

「……………!!」

「このガキを無理矢理連れて行ったら、それは拉致になる。でも、ガキが同意してついてきたってことならそれは犯罪でも何でもない。俺らはそういう風に来るってこと分かる?」

「い、今のは明らかな暴行罪じゃない!私、この目で見たわよ!!」

「違うよ。それはそいつが腹痛起こしたただけだ。それとも俺がやったって証拠あんの?」

目撃証言だけでは今時警察も動かない。カメラで撮影していたとかであればともかく、そんな素振りは無かったし、外傷も無ければ暴行の証拠も無いだろう。その為に、腹部を狙ったのだ。鳩尾へのブローは低威力でもダメージが大きく、外傷も残らないから脅しには最適なのである。

「そもそもそんなこと言い出したら先に木刀振りかざして来たのはテメーらの方だろ？
仮に俺が殴ったとしても、これは正当防衛だよ」

「む、無茶苦茶よー！」

「よく分かってんじゃねーか」

馬堀は藤ねえへ顔を近付ける。

「これは戦争なんだよ。ルールも何も無い、金の戦争」

「……………」

藤ねえは歯噛みすると、財布を取り出し、一枚のカードを馬堀へ渡した。

「……………これが私の全財産よ！くれてやるから帰って頂戴！」

それはキャッシュカードであった。彼女が何の仕事をしているか知らないが、推定年齢から考えれば、そこそこは貯めているといったところだろう。

「じゃあ、今から金下ろしに行くから、お前もついてくるよな？」

馬堀は背後へ立つと、そのまま彼女を押し出すように歩く。無理に連れて行くのでは

無く、あくまで自身の意思で歩いて行かせる。その為のプレッシャーであった。

「っ！」

「行くぞ」

「へ、へい！」

外へ呼び掛けるとサブの威勢だけはいい返事が聞こえてきた。くぐもった声なのが、未だに彼の鼻血が止まっていないことを物語っている。

「……おい、藤ねえをどうするつもりだ？」

顔を上げた土郎少年がそう聞いてきた。ボディブローのダメージが抜けていないのか、息も荒くまだ立ち上がれないようである。ボクシングなどでは後から効いてくると称されるボディブローであるが、正確に鳩尾を狙えば一撃必殺の技になる。所謂ソーラープレキサスブローという奴である。学生時代から喧嘩慣れしている馬堀にとってはこのくらいは容易であった。

馬堀は土郎少年を見下ろす。

「あん？今言つたら？金下ろしに行くんだよ」

「藤ねえを……離せ……！」

「金を無事に下ろせたら返してやるよ。ただし、嘘だったり途中で逃げようとした場合は……」

馬堀は藤ねえへ視線を移す。

「売る臓器が増えるだけだ」

「し、士郎……」

藤ねえは絞り出すような声で士郎少年の名前を呼ぶ。

傍から見れば、明らかに馬堀たちは悪人なのだが、それを通報するような人が周囲にいる様子は無い。故に誰かが横槍を入れるということも無かった。もつとも、馬堀たちはそういうタイミングを狙って訪問したのではあるが。昼の中途半端な時間というのは、意外と人は外に出ないのだ。

「じゃ、行くか。幸い、ATMはすぐそこにあるからな」

「止め……ろー！」

「士郎ー！」

士郎少年の叫びも空しく、馬堀たちは藤ねえを先頭に歩かせて、その場を去って行く。この時、馬堀は気付いていなかった。士郎少年を気遣いながらも、その行方を心配そうに見つめている銀髪の少女の視線に。

「……よし、取り敢えずはこれで許してやるよ」

藤ねえの口座には思っていたより金が入っていた。そこから利子分だけを引き落と

させ、それを馬堀たちは受け取る。ここで全額受け取らないのがポイントで、後で利子分を延々と返済させる。それが、金貸しのやり方であった。

「また来るから、今度は素直に渡せよ？」

「……………」

藤ねえは何も言わず、馬堀たちを睨み付けた後、憤りを隠さぬまま先程の家へと帰って行った。

「流石はアニキだ。回収成功ツスね！」

「何おめでたいこと言ってるんだテメーは。これはまだスタート。こっからだろーが」

「へ、へえ……………」

「……………ふむ」

出しゃばるなど言われ、それを遵守していたアーチャーが感心したように馬堀のことを見ている。その視線に気付くと、馬堀は眉間に皺を寄せた。

「何見てんの？」

「いやはや。我がマスターは素晴らしいと思ってるな」

「んだテメエ？今更気付いたのか？」

サブがまるで自分のことのように言った。

「アニキが凄く無きやこの世にすげえ奴なんていねーよ！」

「……………うるせーぞサブ」

「ひっ—」

馬堀の声にサブは反射的に身構える。馬堀はいつもと変わらないテンションでキレる為、何時先程のような鉄拳が飛んでくるか分からない。流石に一日に二発も食らいたく無いのか、サブは完全に沈黙してしまった。

「で、さっきのは、どういう意味だ？」

馬堀の矛先が今度はアーチャーへと向けられた。

「素晴らしいって何が？馬鹿にしてるってことでいいの？」

「馬鹿になどしてないさ。マスター、あなたは素晴らしい。人を支配することに長けてる」

「……………アホくさ」

馬堀は心底うんざりしたように言った。

ふと、腕時計を見ると、もうすぐ夕方であった。金も回収出来たので、一旦会社へ戻ろうとしたその時であった。

「……………ねえ！」

「……………あん？」

声のした方を振り返ると、そこにいたのは士郎少年の家にはいた銀髪の少女であった。

銀髪の少女

「おい、アーチャー。これで水買ってこい」

馬堀はそう言つてアーチャーへ千円札を渡した。

「いくらためえが世間知らずの外人でも買い方くらい分かんたら？」

「ああ。それは構わないが……」

「行つてこい」

「……分かつた」

アーチャーはやれやれとその場を離れていった。

邪魔者はいなくなつたと馬堀は満を持して振り返る。

先程、背後から声を掛けてきたのは、土郎少年宅にいた銀髪の少女であつた。

「お前は確か、あのガキの所にいた……」

「私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルンよ」

「……で、そのイリヤが何しに来た？」

「あなたたち、キリツグのことで来たんでしょ？」

銀髪の少女——イリヤは、怯えを見せぬ視線で真つ直ぐと馬堀たちを見据えた。

「お前、衛宮切嗣の関係者か？」

「そうよ」

イリヤはコクリと頷いて見せた。彼女が本当に関係者であるならば、士郎少年の家にいたとしても、何の不思議もない。だが、そんなことは馬堀にとつてはどうでもいいことであつた。

「あつそ」

「キリツグの不始末なら、私が何とかする」

「ふーん。じゃ、とつとと消えろ」

馬堀は素つ気なく突き放し、踵を返した。まるで、お前と付き合うのは時間の無駄と告げるかのように。

「待って！」

「おおつと、嬢ちゃん！」

イリヤが馬堀の後を追おうとすると、その進路をサブが塞ぐ。

「こつから先は嬢ちゃんみたいながキんちよが来るところじゃねえ。大人しく帰りな」

「……頭の悪そうな人」

「んだとゴルア!?!」

小さな少女の一言にサブは脊髄反射的にキレる。こんな子供に対して実に大人気な

い。この沸点の低さには馬堀もほとほと呆れ果てる。

「……おい、頭の悪い人。ガキ相手にみつともねえぞ」

「で、ですがアニキ……」

「……………」

「す、すみません……」

このやり取りも一体何度目になるのだろうか。全く反省しない男である。いつそのこと一人でやった方が効率もいいし、余計なストレスも溜めないのではないかと、馬堀は時々思うことがある。

「……てめえもてめえだ。ガキが年上に馬鹿とか言ってるじゃねーよ」

「……………」

「あと、その反抗的な目もだ。そんな態度だと何されても文句言えねーぞ」

「……………」

先程とは打って変わって、イリヤは馬堀が何を言っても、ただ無言でじつと見つめてくるだけであった。どうやら、先程からの馬堀たちの態度に気分を害したらしい。

「おい、外人のガキ。日本語分かんねーか？……いや、構う時間が惜しいな」

梨の礫に、馬堀もすぐに匙を投げる。そもそも、無視しようとしていたところをサブが勝手に絡んでいったせいで、こうして凶ならずも一言二言口になることになってしまっ

た。取り立て中ならば完全無視を決め込めるのだが、そうでない時にはこういう隙が生まれてしまうこともたまにはある。

「やれやれ、だな」

馬堀はイリヤへ背を向け、この場から去ろうとする。

「……………」

か弱い靴音が耳に入る。イリヤが無言で馬堀たちの後を追おうとしているのがよく分かった。

馬堀は足を止め、彼女へ向き直ると、そのか細い首へ喉輪をかます。

「!？」

「おい、外人のガキ。てめえ、舐めてんだろ？舐めてるよな？」

「……………ツ!!」

「あまり舐めたことしているとガキでも容赦しねえぞ？」

淡々とした低い声で馬堀は言った。言って聞かない奴には、調子に乗っていたら自分がどうなるか、それを示してやるのが一番効果的なのである。例え相手が子供であろうが少女であろうが、馬堀は容赦をしない。

「マスター。小さい子に乱暴は良くないぞ？」

そう声を掛けてきたのは、何時の間にか戻って来ていたアーチャーであった。先程買

いに行かせたペットボトルの水を抱えている。

「子供は世界の宝だ。大人が傷付けるのはとても良くない」

「……お前は少し黙ってろ」

「あ、あなた、やつぱり……」

イリヤがアーチャーの顔を見て驚いたような表情をしている。それに気付いた馬堀は彼女の首から喉輪を外した。

「ケホツ、ケホツ、ケホツ……」

「おい、外人のガキ。こいつのこと知ってんのか？」

馬堀はイリヤへ尋ねた。彼女はコクリと頷く。

「……サーヴァントね、あなた？」

イリヤはアーチャーを見ながら言った。

「その通りだリトルレディ」

アーチャーは即答すると、気障つたらしく帽子を取って頭を下げる。

「俺は此度の聖杯戦争でアーチャーの名を拝することになった。以後、お見知り置きを」

「聖杯……戦争!？」

イリヤは更に驚いた顔を見せた。何やら事情を知っていそうな、そんな様子である。

「おい、外人のガキ」

「イリヤ！」

「外人のガキのイリヤさんよ。この胡散臭い外人のこと知ってそうな口振りだな？」

「……あなた、何も知らないの？」

「ああ、知らねえな。知りたくも無いけどな」

成り行き上、一緒に行動はしているが、馬堀自身アーチャーのことは何も知らない。もつと言えば、一緒に行動しているつもりも無い。アーチャーが勝手に付きまとつているだけという認識である。知り合いであれば、彼女にアーチャーを引き取って貰いたいと思っていたが、どうもそんな雰囲気では無いようだ。

「サーヴァントを召喚したマスター……ってことはあなたは魔術師じゃないの？」

「お前、ガキの癖にハーブでもやってんのか？」

「……本当に何も知らないのね」

そのことにも彼女は驚きを見せているようであった。

「リトルレディ。どうやら君は色々と知っているようだね。なら、我がマスターに説明してやってくれないか？ どうも俺の言葉は信用してくれないものでね」

飄々とした様子でアーチャーが頼み込んだ。

「サーヴァントであるあなたの言葉を信じないのに、私の言葉を信じると思う？」

「たった一人が説明しても、そりや信じて貰えなくて当然さ。でも、二人、三人と、この

ことを説明する者がいたら、信憑性つてのも増すと思わないか？リトルレディ」

「……おい。てめえらはまさかあんな与太話が本当にあるとか言うんじやねえだろうな？願いを叶える聖杯だの、それを巡る戦争だの」

流石の馬堀も表情が僅かに変化していた。

「そこまで聞かされていて信じて無かったの？」

「そうなんだよりトルレディ。分かるだろ？俺の苦勞がさ」

「……よく今まで他のマスターに殺されなかったね」

「まあ、他の奴が襲つて来たら、俺が撃退すりゃいいだけの話だからな。その為に四六時中一緒にいるわけだし」

「おいおい、誰がアニキを殺すつてえ？」

「またも話に割り込んできたのはサブである。何度言われても懲りない男であった。」

「アニキはなあ。殺す方なんだよ！分かったかドサンピンが!!」

「……………」

「いでっ!?!」

馬堀は言葉も発さずにサブの臀部へ思い切り蹴りを放った。重いキックの威力にサブは悶絶したまま崩れ落ちる。

「……………で、誰が俺を殺すんだって？」

馬堀は煙草を一本啜えて尋ねる。

「他のマスターさ。俺のようなサーヴァントを連れて、他の参加者を落とそうと考えている連中、だ」

アーチャーはにべも無く答えた。

馬堀は眉間に思い切り皺を寄せる。

「つまり、てめえの言う与太話を信じたキチ野郎がてめえみたいなのを連れて俺を殺しに来る。と、そう言いたいのか？」

「何度も説明したじゃないか」

「……本当よ。あなた、このままじゃ死んじゃう」

イリヤもアーチャーに同調する。

「……別にあなたが死んじやってもどうでもいいし、その方がいいかも知れないけどね」
「仮に俺が死んでも別の奴が取り立てに来るだけだぞ？外人のガキのイリヤさんよ」

「……………」

イリヤは改めて馬堀のことを睨み付けた。

「大体、俺を殺したいなんて思ってるような奴は腐るほどいるからな。それが一人二人増えたところで、今更ビビるようなことじゃねえよ」

仕事とはいえ、馬堀はその手で何十何百の人間を不幸の海へと突き落としてきた。恨

みなど買い過ぎて、恨まれてる感覚さえ鈍ってきているくらいである。

もつとも、アーチャーたちが言っているのは、そういうのとは別口のようなではあるが。「俺を殺す気なら、面倒だからとつと来いって話だ。当然、殺すつもりなら殺される覚悟もあるんだろうしな」

「分かった」

「じゃあ、殺してあげる」

突如、馬堀の耳に入った声。それは、二人の少女の声であった。

「!？」

馬堀が声の方へ振り向くよりも僅かに早く轟音が鳴り響く。そして周囲は大爆発を起こした。

開戦～アーチャーVSライダー～

「……………?!？」

あまりに突然のことに馬堀は何が起きたのか理解が出来なかった。ただ、周囲から漂う焦げた臭いと強烈な突風から、何かが発射したのだという予測は出来た。すぐに爆弾というキーワードが脳裏に浮かぶ。

(……………一体、何がどうなっただいやがる?)

いくら人気が無いとはいえ、ここは住宅街の一画である。そんなところでこんな大爆発を起こせば、すぐに事件沙汰であり、警察や野次馬がどつと押し寄せて来るだろう。また、被害の方だって、決して小さい訳がない。馬堀を狙ったとしても、あまりに行動が短絡的過ぎる。

「何処の誰かは知らねえが、イカれてやがんのか……………」

そう言うと同時に、自身が何故無事なのかという疑問にぶち当たる。それについては、すぐ目の前に答えがあった。

「無事か? マスター?」

アーチャーの背中。どうやら、先程の爆発から身を呈して守ってくれたらしい。しか

も、殆ど無傷である。この時、ようやく馬堀はアーチャーという人物がただの胡散臭い外人とただけでは無いことを理解する。

「てめえ……」

「おっと、マスター。今は敵を排除する方が先だ」

アーチャーの視線の先。そこにいたのは、立派な体躯の馬に乗った西洋人であった。

馬堀は、そいつがアーチャーと同種の存在であることにすぐに気が付く。

「……何だあ？てめえ？」

「……………」

その男は馬堀の呼び掛けには答えず、ただ涼しい顔で眼下を見下ろしていた。まるで、これから仕留める獲物を品定めするかのように。

「仕留め損ないましたか……」

「ええ」

再び、少女たちの声。見ると、男の後方に同じ顔の少女が二人立っている。

「双子……？」

少女たちは、共に巫女装束のようなものを着込んでいた。コスプレにしては堂に入っている。この惨事を引き起こしながらも、男と同様に涼しげな顔であった。

「白昼堂々と爆破テロか。沸いてんじゃねえのか？」

それが馬堀の率直な感想であった。同時に、周囲の異変にも気付く。

(……何で誰も来ねえ?)

これだけの爆発があつて、警察どころか野次馬の一人さえ来ない。明らかにおかしい状況である。

「……結界のようなものを張っているんだ」

そう言ったのはイリヤであつた。

「結界? 何言つてんのお前?」

「ここだけ隔離されてるんだよ。分からないの?」

「分かりたくもねえよ。クソツ」

しかし、現実として目の前では不可思議なことが起きている。流石の馬堀も、これには舌を巻かずにはいられなかった。

「ライダー」

「おやりなさい」

「……御意」

相手は馬堀の戸惑いを他所に行動していく。

少女たちは男のことをライダーと呼び、男は少女たちの命令に答える。何となくは分かっていたが、この男をけしかけたのは、やはりこの少女たちのようだ。

「……マスター、なるべく下がっていかれると助かる」

アーチャーが何時になく真剣な声音で言うのと、馬堀は無言で頷き、後退っていく。馬堀がアーチャーの指示に意外と素直に従ったのは、今が自分の手に負える事態では無いとすぐに理解したからであつた。

馬堀はサブとイリヤの二人を連れてこの場から逃げ出そうとする。

「あ、アニキィ、逃げるんスか〜?」

「何当たり前のこと聞いてんの?」

「アニキならあんなイケすかない奴、一発で伸せるんじゃないですか〜?」

「……………」

この期に及んでサブはまだ能天気なことを宣つていた。いくら馬堀が喧嘩慣れしていたところで、それは所詮普通の人間に対してである。どう見ても目の前の奴は普通ではない。そして、そいつと対峙するアーチャーもまた普通の人間ではない。で、あれば、ここはアーチャーに任せるのが最善の策であつた。寧ろ、ここ以外で彼が役に立つシチュエーションなど存在しないだろう。

「おい、お前」

「何だい、マスター?」

「死ぬなよ」

「……オーケー」

何時もの口調に戻してそう言うと、アーチャーは巨大なボウガンを手にして構えた。その後ろで馬堀たちはさっさとこの場から去って行く。

「ライダー、この場は任せました」

「私たちはあいつらを追います」

「あまり時間を掛けずに倒してしまいなさい」

「そしてすぐに追い掛けてきなさい」

「御意」

少女たちもライダーにそう告げると馬堀たちの後を追った。同時にライダーも彼女たちを庇うように動き、アーチャーに狙わせないようにする。

やがて、この場にはアーチャーとライダーの二人だけとなった。

「……さてさて、どうやらこの場は俺とお前さんだけとなったわけだが」

アーチャーは改めてライダーと向き合う。

「こちとら化け物退治は得意なんだがね。英霊とはいえ、人間相手にどう戦ったもんかね？」

「……それが貴様の武器か、アーチャー？」

「ま、こちとらアーチャーと名乗らせて貰ってるんでね。一応、弓矢の類は使わせて貰わ

ないとな」

「果たして、それで余を倒せるかな？」

ライダーは見下したように言った。アーチャーと違って、彼は武器のようなものを持つていないように見える。

(……と、思わせておいて、何か武器を隠し持つてるのは間違いないだろうな。でなければ、さっきの爆発の説明がつかない。それに、どうせ宝具もあるんだろうしさ)

アーチャーは地面にペツと唾を吐き捨てる。

(ま、そいつはお互い様なんだがね。さあて、どう動いたものか……)

アーチャーとライダー。互いに対峙したまま次の動きが無い。共に次の動きを思案している、といったところだろうか。しかし、表情からライダーの思考は読み取れない。相変わらず涼しげな顔で馬上からアーチャーのことを見下すように見つめるだけであつた。

「……………」

「……………」

「!!」

先に動いたのはアーチャーであつた。

バックステップで距離を取ると、すかさずボウガンをライダーへ向けて乱射する。

「ハイヤー!!」

「ブルルル!!」

ライダーが手綱を握ると、馬も勇ましい嘶きを上げる。そして、器用に馬を操って、放たれた数多の矢を紙一重で交わしていった。同時にアーチャーとの距離も一瞬で詰める。

「!?」

「……踏み潰せ」

「ヒヒイーーーン!!」

アーチャーの目の前。ライダーが手綱を強く引くと、馬が大きく前足を上げた。

「ちいっ!!」

前足が振り下ろされる直前にアーチャーは斜め後ろに飛んで交わした。そして、空中で体勢を崩しながらもボウガンの矢をライダーへ向けて再度放つ。

「フッ」

ライダーは余裕の笑みを浮かべながら、前足を地面へ叩き付けた馬にその勢いを利用して、高くジャンプさせた。矢は文字通り空を切っていく。

「流石に空中なら自由に動けねえだろ!」

アーチャーは地面にもう片方の手をつくくと、くるりと一回転して体勢を立て直しつ

つ、未だ飛び上がったままのライダーへ向けて三度矢を乱射した。

自身へ向かつてくる矢の雨の前にライダーは表情を変えず、手綱を強く握ると、馬はすぐさま何もない空中を蹴った。すると、まるでそこに壁でもあったかのようにライダーたちは再び飛び上がっていった。

「何!？」

アーチャーは思わずその声を漏らす。

(アレもただの馬じゃ無いってことか。本当に何でもアリだな、こいつあ……)

アーチャーがそう舌を巻く一方で、此度も矢を交わしたライダーはさも当然といった表情をしながら、旧式のマスケット銃を取り出す。彼がその姿を現してから、初めて武器を持った瞬間であった。

馬と共に落下していく最中、ライダーは眼下のアーチャーへと狙いを定める。

「不味い!!」

アーチャーはすぐに先程の爆発を連想した。あの時は爆心地から多少の距離があったので馬堀を守りつつ、自身も無傷で済んだが、直撃を受けてしまえば如何に自身がサーヴァントであろうと、流石に無事では済まない。帽子を押さえながら、アーチャーは全力でライダーと距離を取る。

「……死ね」

ライダーは引き金を引く。

銃声と同時にアーチャーは前転回避で直撃を交わし、来る爆発に備えて歯を食い縛った。

しかし、爆発の轟音も熱も全く来ない。見ると、抉れた地面に鉛弾が転がっていた。銃口から放たれたのはどうやら先程爆発したものでは無いようだ。だが、威力は普通の銃弾とは桁違いである。直撃は決して許されない。

「……………」
ライダーはまるで機械のように動くアーチャーへ狙いを定めては引き金を引いていた。

二発、三発と銃弾がアーチャーを襲う。だが、アーチャーも伊達にサーヴァントではなく、それらをひらりひらりと交わしていった。

やがて、スタッとライダーが地面へ降り立つ頃には、再び両者の間に距離が生まれていった。

「……………」
「……………」

先程の攻防を経て、二人は改めて無言で互いを見つめ合う。どちらもほんの手探りといったところだろう。自らの手の内をあまり明かしていないというのが両者の抱いた

共通の印象であった。

「……やるねえ」

先に沈黙を破ったのはアーチャーであった。

「……しっかし、お前さん。なかなかの馬に乗ってるねえ。流石はライダーの名を冠するだけはあるぜ」

「よく喋る男だな。貴様は」

「お喋りは大好きなんでね」

「ふむ……」

ライダーは口に手を当てる。

「貴様、一見何も考えて無さそうだが、その実、策を弄した戦い方をするのが得意だな？」

「ほう。何でそう思いで？」

「クツクツク……」

突如、ライダーは笑い出す。ここに来てライダーは初めて感情の変化を見せた。

「よく分かるぞ。余も貴様と同じく策を弄した戦いを好むからだ。それに、戦いの中で相手に話し掛ける時は、大概は次の手段を考える時間稼ぎであろうが」

「……へえ、よくお分かりで」

「それに貴様は先程から自らの手の内をあまり明かそうとしてはいないではないか」

「それはお互い様だと思えますがねえ」

「……個人的なことを言わせて貰えば、貴様とはもつと違う戦いをしたかったところだ」
ライダーは少しだけ残念そうに首を降る。

「だが、これは聖杯戦争。そして、マスターの命令は絶対。で、あれば、好まぬ戦いもせねばならない。ここは一先ず力押しとさせて頂こうか」

「……」つちもマスターから『死ぬな』つて命令された身でね。その命令を守る為にも一杯抵抗させて頂くとしますか」

アーチャーは一筋縄ではいかなそうな相手に思わず肩を竦める。一方で、その目は何処か好奇に満ちているようであった。

追う少女たち

あの場から一旦逃れた馬堀たちであったが、すぐに追手——双子の少女たちの存在が付いた。彼女たちが普通の少女であったのなら何も問題は無かったが、どうもそうでは無いようである。決定的に違うのは、同じサーヴァントを召喚した者でも、彼女たちはあのライダーとかいう男を完全に使役しているということであった。馬堀はアーチャーを異なる存在と何処かで感じてはいたものの信じ切ることは出来ずに胡散臭い外国人と邪険に扱っていたが、あの双子の少女たちはその存在を予め理解した上で召喚し、命令を下しているように見える。この差は絶望的なまでに大きいと言えた。

(チツ、何なんだ一体……)

本来であれば体格に勝り喧嘩慣れしている馬堀が彼女たちに負ける要素など無い。だが、彼女たちは明らかに真つ当では無いだろう。真正面からやり合うのは明らかに得策ではない。

「アニキィ、あんなガキ相手に逃げるなんて鬼の馬堀が泣きますよ〜?」

隣でサブがそんな呑気なことを宣っている。いつそのこと、こいつを囮として使つてやろうかという思いが芽生えたが、それは流石に止めることにした。何だかんだでこの

馬鹿な部下を馬堀は嫌いでは無かったからだ。例えるなら物覚えの悪い犬を飼っているような気分である。

「ハア、ハア……」

何時の間にかイリヤも馬堀たちと一緒に息も絶え絶えに走っていた。体も小さく、如何にも運動などしていなさそうな外見を裏切らず、体力的には限界に見える。彼女に関しては完全な部外者だが、置いていこうにも付いてくるし、何よりも聖杯戦争やサーヴァントについて何か知っていそうであった。それに向こうから見れば彼女も仲間と思われているかも知れない。イリヤのことは何も知らない馬堀であったが、仕事でも無いのに彼女を見捨てるほど薄情では無かった。

「えっ?」

「よっ、と」

馬堀は咄嗟にイリヤを抱え上げた。所謂、お姫様抱っこという奴である。

(何だ、こいつ……?)

イリヤのあまりの軽さに馬堀は驚きを隠せなかった。見た目以上に軽過ぎて、逆に違和感を覚える。

「な、何?」

「……じつとしてろ」

馬堀は再び走り出した。

後ろを振り返ると、少女たちは疲れる様子も無く後を追って来ている。馬堀もサブも決して足が遅いわけではない。なのに、段々と距離を詰められている。やはり、あの少女たちは普通ではない。

「何なんだあいつらは？」

「ヒイ、ヒイ……、り、陸上部のエースツスカね？女の癖にはえーししつけーし、何なんスかマジで!？」

「俺が聞きてえよ馬鹿」

「……っーか、ガキ相手に逃げんのはもう止めだ止め!!」

徐にサブが立ち止まり、少女たちへと向き直った。

「おい、クソガキども!!大人舐めんじゃねえぞゴルア!!」

巻き舌気味にそう捲し立てるサブ。どうやら、堪忍袋の緒が切れたという奴であるう。

「……まさか、こゝまで馬鹿とはな」

そうは言いつつも、馬堀はサブのスタンドプレーを内心では喜んでいた。何せ、自ら囀役を買って出たのだ。その心意気は有り難く受けさせて貰うことにする。

「邪魔」

「排除します」

少女たちは目の前に立ちはだかったサブを鬱陶しそうに見つめると、胸元から鳥のような形をした紙を取り出した。

「んだコルア!?!折り紙か?ガキの遊びは家でしろクソガキヤア!」

威勢だけは一人前のサブががなり立てる。見た目よりも喧嘩に弱い彼ではあるが、流石に相手が相手だけに負けるわけがないと高を括っているのだろう。

だが、その相手が不味かった。

「行きなさい」

「最悪、殺してもいいよ」

まるで周囲を飛び回る蠅に向けているかのようには少女たちは冷淡な口調で言った。

彼女の手から放たれた紙の鳥は、まるで生きているかのように飛翔すると、サブ目掛けて急降下していく。次の瞬間、サブの胸が斜めに切り裂かれた。赤い鮮血が周囲に飛び散る。

「ああん?」

自身に何が起きたか、すぐには分からなかったサブであったが、傷口に指で触れて初めて痛みを感じ、やられたということに気が付いた。指先が真っ赤に染まり、鉄の臭いが鼻をつく。

「何じゃこりゃ?!」

なおも紙の鳥はサブのすぐ上を旋回していて、次の攻撃を行おうと狙っている。その生々しい動きは最早、ただの紙ではなく本物の鷲か鷹のようであった。

「次は目を狙いなさい」

「一撃で仕留めるのよ」

少女たちの言葉に呼応するように、紙の鳥は再び急降下する。気が付くと、サブの目蓋の上が鋭い刃のようなもので抉られていた。

「ぐうああああ!!」

思わず呻き声を上げるサブ。幸い、目の部分は無事であったが、流れ出る血で片方の視界が塞がってしまう。

「くそ……クソツツツ!!」

明らかに年下の、それも少女に為す術なくいいようにやられているという現実。彼のプライドはズタズタであった。

「この……ガキヤア!!」

それでも彼は立ち上がり、少女たちの前に立ち塞がった。倒れば楽になれる。なのに、何故立ち上がってしまうのか。

尊敬する馬堀の為か。

それも多少はあるだろうが、理由の全てでは無い。

壊れかけたちっぽけなプライドを守る為か。

そうかも知れない。

サブは昔からそういう人物であつた。弱いのに売られた喧嘩を買い、ボロボロに負ける。彼にとって勝ち負けなどどうでも良くて、ただ相手から逃げることを良しとしない性分であつた。それが彼のアイデンティティーであり、生きる理由。その為ならいくらでも命を張れる。

サブはそういう人間であつた。

「やりなさい」

「殺しちゃえ」

少女たちはうんざりしたような表情で言った。紙の鳥が今度はサブの心臓へと狙いを定める。

「さようなら」

「バイバイ」

彼女たちのその言葉と同時に紙の鳥が弾丸のようなスピードで飛んでいく。

!!!

サブは思わず目を閉じた。

「……あれ？」

痛みも何も来ない。

恐る恐る目を開けると、すぐに大きな拳が目に入った。

「……お前、本つつ当に馬鹿だな」

「あ、あ、ああ……」

「まあ、お前のそういうところ、嫌いじゃないけどな」

「アニキ!!」

そこにいたのは馬堀であった。その手の中にはくしゃくしゃになった紙が握られている。

「式神を……!?!」

「空中で掴んだ……!?!」

少女たちは共に驚きの表情を隠せない。

「……動体視力には自信があんだよ。こう見えてガキの頃に野球やってたからな」

馬堀はくしゃくしゃになった紙を投げ捨てると、少女たちへ向き直った。

「うちの馬鹿な部下が世話になったな。その礼、ちゃんとしてやんねーとな」

拳をパキパキと鳴らす音が辺りに響いた。

金貸しは逃げない

馬堀の足がピタッと止まったのは、サブと別れてから一分もしない内であった。

「……………」

徐に馬堀は抱えていたイリヤを地面へ下ろす。

「……………どうしたの?」

「……………でちよつと待ってろ」

こちらを見つめるイリヤを他所に、馬堀は踵を返して来た道に戻って行った。

(……………俺もあいつを馬鹿と言えねえな)

今は逃げるのが最善の策であることを頭では理解している。戻るのが愚策だということも。だが、それでも心の奥底にある何か馬堀を突き動かしていた。

馴れ合いは好きではない。だが、手の届く身内くらいは守りたい。

そんな思いが馬堀にこの行動を取らせたのであった。

「……………大丈夫か?」

満身創痍の相手に言う台詞では無かったかも知れないが、馬堀は敢えて尋ねた。

「……楽勝ツスよ」

返ってきた言葉は馬堀の期待通りのものであった。息も絶え絶えといった様子ながら、何故か見栄を張っているサブを見て、思わずニヤリと笑ってしまう。

「楽勝つて、お前血塗れじゃねーか」

「ひ、皮膚が切れただけツスよ。致命傷には全然程遠いツス」

「……お前、やっぱ馬鹿だろ」

「それ、今言います？」

サブの顔が綻んだ。出血は酷いが、彼の言う通りダメージは表面的なものだけで内臓などには到っていないようだ。もしも、内部に深刻なダメージを受けていれば、いくら根性があるうが、ここまで喋ることは出来ないだろう。

馬堀は徐に内ポケットから財布を取り出すと、中から一万円札を抜いた。

「……これで病院行って来い」

「え？でも、アニキ……」

「いいから行け、役立たず。今のお前は誰がどう見ても足手まといじゃねーか。まあ、足手まといは普段からだけどな」

「ひつでえ〜」

サブはそう言いながらも一万円札を受け取る。

「……アニキ、後は頼みましたよ」

サブは名残惜しそうに言うのと、この場を去って行く。その背中が、明らかに「アニキと一緒に戦いたかった」と語っていた。

「さて、と」

馬堀は少女たちへと向き直った。何の心遣いかは分からないが、二人は今のやり取りの間、手を出しては来なかった。正々堂々というよりは余裕の現れといったところだろうか。馬堀は軽く舌打ちする。

「おいガキ。狙いは俺なんだろう？ 関係無い奴を狙ってんじやねーよ」

「邪魔をするから」

「自業自得よ」

「いちいち二人で言葉を分けてんじやねーよ。片方が喋ったら、もう片方も喋んねーと死ぬのかためーらは？」

「……不愉快」

「やはり殺しましょう」

少女たちは表情を変えずに言った。言葉の響きには僅かに揺らぎが見られたことから、先程の馬堀の言葉に対して苛立ちを覚えたようである。

「式神よ」

片方の少女が懐から、またも紙で出来た鳥のようなものを取り出した。それも、今度は四つ。

「四羽の朱雀がお前を殺します」

「逃げてでも無駄」

「……だから、いちいち二人で喋んな」

直後、少女の手から四羽の紙の鳥が放たれた。朱雀と呼ばれたそれらは、サブの時と同様に空高く舞い上がり、旋回しながら眼下の馬堀へ狙いを定めている。

一方で、馬堀はゆっくりと少女たちの方へ歩き出していた。一步、また一步と。

「不用意に近付くなんて」

「お馬鹿さんね」

嘲笑うように言うと、少女は上空を旋回する朱雀たちへ何やら合図を送る。直後、四羽が一斉に馬堀へと襲い掛かった。

「……ッ！」

次の瞬間、馬堀の肩や背中が一気に切り裂かれ、血が辺りに飛び散る。馬堀の肉体を抉った朱雀は再び上空へと舞い上がっていった。それらは材質が紙なのに、まるで鉄製のナイフのような切れ味である。そんなものが今も空中から四つも狙っているのだ。丸腰の馬堀には、とても太刀打ちなど出来そうにない。

と、普通なら考えるのだろう。少女たちも例外では無かった。

だが、馬堀は怯む様子も無く、歩みも止めないでいた。一步、また一步と。まるで、ダメージなど受けていないとでも言うかのように。

「痩せ我慢？」

「それとも、本当にお馬鹿さんなのかしら？」

動揺とまではいかずとも、流石に少女たちの顔色が僅かに変わる。馬堀はというと、徐々に距離を詰めていった。

「朱雀！」

少女は再度、合図を送る。再び四羽が急降下し、馬堀の体を扶った。

だが。

「!？」

少女たちは今度こそハッキリと表情を変えていた。それは、馬堀の両手にしつかりと二羽の朱雀が握られていたからである。

「……………」

馬堀は無言で両の手の平に掴んだそれをぐちゃぐちゃに握り締め、地面へと叩き捨てた。原型を留めなくなったそれらはまるで死んだかのように動かなくなる。

「…………有り得ない。魔術師でも無いのに、式神を潰すだなんて」

「狼狽えないで、二葉！式神なんてまた作ればいい！」

そう言つて、少女の片方が懐から新たに三羽の朱雀を取り出した。

「……お生憎様。式神は出そうと思えば、いくらでも補充出来るのよ？」

「む、無駄な努力だったわね！」

勝ち誇る少女たち。だが、馬堀はそんな彼女たちをまるでアホを見るような目で見つめていた。

「……あ、そ。で、補充出来るから何？」

「わざわざ説明しないと分からないお馬鹿さんかしら？」

「あなたがいくら式神を潰しても意味が無いってことよ」

「それに今のは見る限り、無傷で朱雀を掴まえることが出来るわけではない……」

「つまり、どう考えてもあなたが力尽きる方が先つてこと」

「……ふーん」

少女たちの言葉を意に介さず、馬堀はただ歩いている。

「……！言つても聞かないお馬鹿さんは」

「死を持つて知ることね！」

三度の合図。瞬時に朱雀が馬堀の体を切り裂く。そして、彼の手にはまたも朱雀だったものの残骸が握られていた。更に進軍し、相手との距離をどんどんと縮めていく。

「……………」

「……………」

気が付くと少女たちは少しだけ後ずさっていた。後退など有り得ないというのに。

「ひ、一葉……………」

「……………朱雀！」

一葉と呼ばれた方の少女が両の手いっぱい朱雀を取り出し、空中へ放った。それでも、彼女の小さな手では五羽が限度であったが。先程残った一羽と足して計六羽。これだけの攻撃を一度に受ければ、相手がいくらタフだろうと耐えられる道理はない。

「行きなさい朱雀！」

一斉に襲い掛かる朱雀たち。それらは馬堀の体を更に切り裂いていく。

「これで……………」

「……………」

「……………えっ？」

やはり、馬堀の歩みは止まらない。あれだけの猛攻を受けてもなお少女たちとの距離を詰めていく。そして、その両手にはやはり朱雀だったものが握られていた。

「何で…………？」

理解を超える馬堀の行動に少女たちも流石にたじろいでいた。

「何で動けるの!？」

「ああん？」

「ここにきて馬堀が口を開く。」

「簡単なことだろ？脳と心臓さえ守れば即死はしねえ。後は耐えればいい」

さも当然といった表情で馬堀は言った。彼の腕は確かに脳と心臓をしつかりとガードしている。

「そんなボロボロになって、無事なわけが……」

「あ？こんなオートバイで突っ込まれた時に比べたら屁でもねえよ」

会話をしながらもゆっくりと歩み寄っていく馬堀。身体中のあちこちが切り裂かれ、そこから確かに少なくない出血を見せている。だが、虚勢や痩せ我慢の類いではなく、本当にダメージと思っていないようであった。もしかすると、彼が着用している上質のジャケットが多少はダメージを軽減し、深く切り刻まれるのを防いでいたのかも知れないが、それにしてもタフ過ぎる。

「あとさ……」

馬堀は少女たちを見回した。

「お前ら、今まで一度も人殺したことねえだろ？」

「……!？」

馬堀の問いに少女たちはピクリと反応する。彼女たちの表情を見て、馬堀は察した。

「……やっぱりな。さつきから脳と心臓の狙いがぶれてんぞ？」

「そんなこと……」

「人殺すなんて、ど素人じゃまず無理だ。大概はやる前に萎縮しちまうし、いざ相手をするとな度は金縛りにあつたみてえになる。真つ当な神経じゃそこから先へはいけねえよ」

見透かしたかのように言う馬堀に対して、少女たちは動揺を隠せないでいた。もつとも、普通の人間であれば人を殺したことなど無いのが当たり前なのだが。

「あなたは……」

不意に片方の少女が口を開いた。それは一葉と呼ばれた方の少女であつた。

「あなたはあるつていうの？人を殺したこと……」

「……ああ、あるよ。ある意味、な」

やや間を開けてから馬堀は言つた。

「俺の仕事はな。金貸しだ。文字通り金を貸すのが仕事でな。貸すつてことは、当然返して貰うのが前提だ。それも、高い利子をつけてな。俺らみたいな奴から金を借りるよな連中だ。その時点でもう真つ当じゃねえし、返す気だつて最初から無いような奴ばかりだ。知つてるか？闇金には返済義務はねえ。法律上は、な。それを盾にする奴も中

にはいた。だがな、それでも俺はそいつらから取り立てた。ありとあらゆる手で追い込んでいった。結果、自殺した奴だっている。俺が直接手を下したわけじゃねえが、俺が殺したのと同じことだろ？ 少なくとも俺は自分が殺したと思ってるよ」

「……………」

少女たちは思わず口を噤んだ。そうこうしている内に、両者間の距離はかなり縮まっている。

「……俺がてめえらみたい中途半端な覚悟じゃねえって分かるか？ 流石にそこまで馬鹿じゃねえだろ？ その上で言ってるよ」

馬堀はしつかりと少女たちの目を見据えた。

「てめえら『ぶち殺す』ぞ?」

「!？」

強烈な殺気に総毛立つ少女たち。

彼女たちが次に取った行動、それは……。

「……令呪を持って命じる。ライダー、今すぐこちらへ来なさい!!」

言い終わると同時に馬堀の目の前にライダーが現れた。それは、殆ど瞬間移動のようなものであり、流石の馬堀も面食らってしまう。

「……………」

「ライダー！そいつを殺しなさい！！殺して！！」

「了解した」

少女たちの下した命令をただ実行しようと動くライダー。

その時であった。

「令呪を使ってアーチャーを呼んで！！」

甲高い子供の声が馬堀の耳に入る。それは、置いてきた筈のイリヤのものであった。

（使えつつわかれても、使い方なんか分かるわけねーだろ）

馬堀は内心ではそう思いながらも、先程の少女の見よう見まねで口を開く。

「……令呪を持って命じる、アーチャー来い」

言い終わるや否や馬堀の右手の紋様が一つ消え、それと同時にまたも目の前に人物が一人現れた。

「来たぜ、マスター」

「ここ最近、何度も見てきたうざったい背中。それは、アーチャーのものであった。

「……さ、命令してくれや」

「あつそ。じゃあ、胡散臭い外人同士、もうここで決着つけろ」

アーチャーはチラッとライダーを見ると、フツと笑ってみせる。

「……了解。骨の折れそうな命令だけど、頑張るとしますか！」

そう言ってアーチャーは巨大な猟銃を取り出した。

一進一退

至近距離で睨み合うアーチャーとライダー。互いに視線を飛ばし合う中、アーチャーが手にしたその猟銃には、ただ飾つてあるのを見るだけでもため息が溢れそうになる程に美しい細工が施されていた。銀かプラチナか。何れにせよ職人の拘りが細部まで見て取れそうである。

「……それが、貴様の宝具か？」

ライダーが尋ねた。

「……さあて、な」

飄々とした表情でアーチャーはそう言うのと、銃口をライダーの顔へ向ける。

「お前さんもなかなかいい銃を使うようだが、コイツにはちよいつと敵わないと思うぜ？」

「能書きはよい。先程の続きと洒落込もうではないか」

「洒落にしちやあ物騒だけれどもな」

言い終わると同時にアーチャーは引き金へ指を掛けた。と、ライダーは距離を取る。

「愛馬よ！」

ライダーが声を張り上げると、先程乗っていた馬が瞬時に姿を現した。その背の鞍へライダーは素早く飛び乗る。

「さて、改めて死合おうか！」

「死ぬのはお前さんだけだぜ、ライダーさんよ！」

アーチャーはニヤリと笑うと、猟銃を天へ向けた。そして、引き金を強く引く。

周囲に鳴り響く銃声。

銃口から発射された弾丸は空中で軌道を変えると、そのままライダーへと向かっていった。

「ほう……!?!」

ライダーは紙一重でそれを交わすと僅かではあるが、表情を変えた。余裕ぶつた態度はそのままで、好奇心が混じっているのか、子供のような笑みを浮かべる。

「当然、これだけでは終わらぬだろうな」

ライダーは先程のように愛馬と共に高く飛び上がった。その背中を交わした筈の銃弾が襲い掛かって来る。

「やはり、まだ追尾するか……」

それも想定済みだと言わんばかりに、ライダーは空中にて再び飛び上がった。更に上空から自身を追ってくる弾丸を見下ろす。

「ふむ」

彼もまたマスケット銃を取り出し、狙いを定めた。照準の先は例の弾丸である。

「……!!」

引き金を引くと同時に大きな破裂音。地面にポトリと鉄の塊が落ちていった。何と、あの小さな的を狙い撃つて当てたのである。

「ヒュ〜♪」

アーチャーは感心したように口笛を吹いた。それさえ読み通りだとも言うかのよう
うに。

「やるねえ。凄い集中力だ。射撃の腕は達人レベルだな」

「まさか、これで終わりでは無いだろうな、アーチャー？その程度の男では無いだろう
？」

「そちらさんのご期待に沿えるかどうかは分からないがね……」

そう言うのと、アーチャーは再び猟銃を構える。

「当然、これだけじゃ終わらないぞっと！」

改めてアーチャーは引き金を引いた。今度は一度だけでは無い。数多の銃声と共に
弾丸が複雑な軌道を描いてライダーへと向かっていく。

「下手な鉄砲も数撃ちや当たる……ってね」

尚も弾丸を発射していくアーチャー。正に弾丸の雨がライダーへと降り注いでいく。この状況下で、ライダーは動揺するどころかほくそ笑んですらいた。

「……知っているか、アーチャー？ 本当に下手な鉄砲は、決して当たりなどしないのだよ」

「あん？」

「いでよ」

その言葉と同時に、ライダーのすぐ側へ巨大な大砲が現れた。

「いくら蠅が付きまとおうが、一度にまとめて始末すれば良いだけのことよ」

そう言うと、ライダーは大砲と共に高く飛び上がった。だが、今度の跳躍はただ避ける為だけでは無い。空中で大砲を下方へと向ける。その先にはライダーを追尾する数多の弾丸、そしてアーチャーたちがいた。

ライダーが再びほくそ笑むのを見て、アーチャーは思わず表情を変える。

「!? やべっ!!」

「放て、砲よー!」

ライダーが指差すと、大砲から弾が発射された。同時にライダーは愛馬を駆り、空中で更に飛び上がる。

直後、かなりの規模の爆発が起きた。強い爆風と衝撃が周囲に広がる。

「マスター!!」

「!?」

アーチャーは巻き込まれそうになる馬堀とイリヤを庇う為、彼らの元へ急行した。両手を広げ、背中で全てを受け止める。

「くっ……、大丈夫かい? マスターとお嬢ちゃん?」

ダメーჯこそ無かったものの、その動きが隙となる。

「敵に背を向けるのは自殺行為だぞ、アーチャー」

ライダーの勝ち誇ったかのような声。

次の瞬間、アーチャーの右足が大きく抉れた。

「ぐっ!?!」

アーチャーは思わず片膝をついた。何が起きたのかはすぐに理解出来なかったが、彼のただならぬ様子を見た馬堀はごく僅かに顔色を変える。

「おい、どうした?」

「面目ねえ。足をやられちまったようだ」

見ると、アーチャーの右足は、まるで皮一枚で繋がっているかのような状態であった。アーチャーはフツと笑ってみせる。

「……なるほどね。策士様は、こういう汚ないやり方もお手の物ってわけか」

「汚い？これは戦争だぞアーチャー。戦争に綺麗も汚いも無い。汚い手というものがあ
るのであれば、寧ろ積極的に使うべきでは無いか？それが戦術家というものであるう
？」

「ああ、それは確かに正解だ。あんたは間違っちゃいねえよライダー。だがな……」

支えを片方失い、よろよろと立ち上がるアーチャー。普通であれば戦闘を続行出来る
状態ではない。それでも気丈に振る舞うアーチャーを見て、馬堀は人間の精神力ではな
いと思った。

「関係無い人間まで巻き込もうっていうのは、粹じゃあねえな！」

アーチャーはそう言うと、指をパチリと鳴らした。次の瞬間、ライダーの右肩を何か
が貫く。

「何っ!？」

思わぬダメージにライダーは面食らってしまう。

「何を……」

「したの……!？」

それは彼のマスターである少女たちも同様であった。

アーチャーはしたり顔でチツチツと指を振って見せた。

「その大砲は威力も馬鹿でかいが、音も負けじと馬鹿でかいな」

「何……?」

「銃弾はただ追尾するだけじゃない。待機させておくことも出来るのさ」

「!そうか、あの時に……」

大砲が放たれ、アーチャーが背を向けたその刹那、彼はライダーに見えぬように銃弾を発射していたのであった。

「……フツフツ。いいのか?余に話す必要の無かった情報だと思ったが?」

「ハン!何を仰っているんだか。仮に俺が言わなくても、大体の予想はついていたんだろうが。それに……」

アーチャーは軽く舌打ちする。

「俺は眉間を狙ったんだぜ?一撃で殺すつもりだった。なのに、それをすんで交わされたら、もう騙し討ちは効かないってことじゃねえか。なら、隠しても隠さなくても一緒だろうが」

「抜け目ない良い一撃であった。が、余の命にまでは届かなかったな」

「チツ、抜け抜けと称賛しやがって。あくまでそちらさんが上ってことかい」

「信じられぬだろうが、本音で言っている。余にダメージを与えたことは称賛に値するのだからな。だが……」

ライダーは手綱を強く握り締める。

「貴様は余を殺す唯一にして最大の好機を逸した。故にもう勝ち目など有り得ぬ！」
「そうかい……。だが、それでも無いぜ？」

アーチャーはニヤリと笑って見せた。強がりか本当に策があるのか。何れにせよ、馬堀には足の使えないアーチャーは不利にしか見えなかった。

「……宝具の使い時はここじゃあねえ」

と、アーチャーは今度は何処からかロープを取り出した。見た目は至って普通のロープである。

「どのような玩具を用いたところで、余には通じぬぞアーチャー」

「へっ、例え挑発でも宝具を使えと言わない辺り、慎重なこつたな。臆病……とも言えるか」

「そのような安い挑発にも乗らぬぞ」

「まあ、乗らねえよな。……同じ策を練って戦う者同士ってお前さん言っていたな？」
「確かにそのようなことを言った覚えはある。が、それがどうかしたか？」

「……お前と俺とじゃ決定的に違う点が一つある」

「ほう……何が違うというのか、一応聞いておこうか？」

「へっ！」

アーチャーは不敵な笑みを浮かべる。

「お前さんは慎重に慎重を重ねる……。だが、俺は違う。俺は根っからの冒険家なのさあー！」

そう言うと、アーチャーはロープの片側を空高く放った。その先端が電線に巻き付く。

「……つてことで、あばよ!!」

無事な方の足で力強く大地を蹴るアーチャー。次の瞬間、振り子の要領で大きく弧を描くと、その勢いのまま後ろの馬堀とイリヤを抱えて跳んでいった。

「ヒューツヤツハーハー!!鬼さんこちら、手の鳴る方へと!!」

無邪気な子供のような表情でアーチャーは叫んだ。

一方でライダーは無表情のまま状況を見つめていた。

一先ずの決着

「……あれだけデカイ口叩いておいて、結局逃げんのか？」

馬堀が呆れたように言った。だが、その一方で何処か安心したような表情をしている。サーヴァント同士の戦いという途方の無い緊張感から解き放たれ、流石の彼もホツとしたということなのだろう。

「ハツハツハツ!! 知っているかいマスター? 逃げるつてのは、あらゆる策の中で最善の一手なんだぜい」

アーチャーはしてやったりといった表情で言った。器用にロープを操り、次から次へと跳躍していく。

「相手を殺す前提で戦い合ったら、互いに無事じゃあ済まねえ。けど、逃げることに注力すりゃあ、いくら相手がサーヴァントだつて……」

その時、背後から微かに馬の嘶きが聞こえた。振り返ると、案の定ライダーが空中を駆けながら追いかけて来ている。

「……流石はライダーの名を冠するだけのことはありやがんな。移動力はパないってわけかい」

「んな、冷静に分析してる場合か？」

「このままじゃ追い付かれちゃう！」

「安心しな、マスターと嬢ちゃん。こういう時の為の罠って奴だ！」

アーチャーがそう言い終わると同時に背後で甲高い馬の嘶きが聞こえた。

見ると、何か虫のようなものがライダーへ大量に纏わり付いている。僅かに見える黄色から、それらが蜂であるということが分かった。

「へっ、さっきの銃弾がただ火薬詰め込んだだけのものだと思ってたかい？ 一個だけ、キラビーが好むフェロモンを仕込んでおいたのさ！ そこに逃げながら仕掛けたこいつを割れば……」

そう言うと、アーチャーはチラツと別の方角へ視線を向けた。そこにあつたのは電信柱にくくりつけてあつた大きな瓶であつた。中には巨大な蜂が何匹も詰められている。

「何だそれ？」

こんなものを何時の間に仕掛け、そして割つたのか、馬堀には見当がつかない。

「おや？ マスター、随分と不思議そうな顔をしているじゃないか。差し詰め、さっきの罠を何時どうやって仕掛けたのか不思議でたまらないってところかい？」

「……さあな」

馬堀はアーチャーに見抜かれるのが癪だとばかりに、素っ気なく答えた。

「簡単な話、ここいら一帯だけじゃなく、この街全体、あらゆる所に罠は仕掛けられているのさ」

「!? それこそ、何時の間に、だな」

「ま、準備だけはちゃんとしておきたいタイプなんでね、俺は」

「……今思い出せば、てめえが時々いなくなってたのはこんな下らねえことをする為だったのか」

「ま、その下らないことの積み重ねが大事なんだけどね。さて、こいつであちらさんが死ねばそれでよし。死ななくとも、多少の足止めにもなりやこつちのもんだ!」

アーチャーの思惑通りライダーの動きは明らかに鈍っているようであった。

「さあ、今の内に逃げるぜマスター!!」

「でも、たかが蜂だろ? 足止めにすらならねえんじやねえか?」

「あれは俺が育てた特注の蜂、そう易々とは死なねえさ。それに、いくら蜂たちを駆逐する為でも、流石に至近距離であの大砲を爆発させたりはしないだろ。奴は慎重派だからな。今が好機だつっても、自らダメージを負ってまで深追いする程じゃあない。あんな雑魚は何時でも始末出来ると高を括ってここは退くと思うぜ。奴はそういう奴さ」

何ら根拠の無い発言であるが、相対した者だけが感じる何かがあったのだろう。

実際に、ライダーはそれ以上の追跡をしては来なかった。

「……………な?」

「な?……………じゃ、ねえよ馬鹿」

「ま、結果オーライってことで」

まんまと逃げ切ることに成功した馬堀たち。

その一方で、ライダーもまた不敵にニヤリと笑っていた。

「……………フツ、それでいい」

(万全でない貴様を潰したところで面白が無いというものだ。次は互いに得意分野で思い切りやり合おうではないか)

ライダーは先の戦いを労うかのように、軽く嘶く愛馬の首を撫でていた。

「……………ライダー!」

「何故追わなかったのです!?!」

数分後、二人の少女からの叱咤が飛んでいた。しかし、ライダーは至って平静を崩さない。

「ならば令呪を使い、そう命じれば良かったではないか? さすれば、余とて退かずに追跡していたぞ?」

「……………たった一人のサーヴァントにこれ以上令呪の無駄遣いは出来ません」

「無駄遣い。確かに無駄遣いであったな。先を見据えるのであれば、あれは使うべき場面では無かった」

「……ッ!!」

双子の少女たちは同時に険しい表情へ変わった。痛い点を突かれたといったところであろう。

「……そもそも、あなたがアーチャー相手に遊んでいなければ、無駄に令呪を使うことも無かったのでは無いですか?」

「これはあなたの失態でもあるのですよ、ライダー?」

「ほう、そういう考え方も無くは無いな。だが、今は無駄で不毛な責任の擦り付け合いをしている場合でも無いと思われるが如何かな?」

「……それも、そうですね」

洩々、といった感じで、少女たちはそのことを認めたようであった。

「逃げられたものは仕方ありません。今は次のことを考えましょう」

「私もそう思います一葉」

「それが賢明な判断というものだマスター」

ライダーがフツと笑うのを少女たちは苛立ちを隠さぬ顔で見つめていた。

そんな彼女たちの不満を知りつつも、ライダーは反省の色を見せない。寧ろ、何も分

からぬ小娘だと言わんばかりに肩を竦めて見せる。

(……やはり、従えるだけの女にこの昂りなど理解出来よう筈も無いか。折角の好敵手、ここで易々と潰してしまうのも面白くないではないか。余は久方ぶりに楽しんでおるのだ。ボトルに詰めたワインが日に日に熟成していくのを待つようにな。アーチャーよ、貴様との決着は今では無い。互いに期が熟すのを待つとしようではないか)

次の瞬間、ライダーは自らその姿を消してみせた。まるで、必要の無い時は現れることもない。とでも主張するかのよう。

「ライダー。確かに強いサーヴァントですが、実に癖が強い。果たして、私たちに御しきれるかどうか……」

少女——一葉と呼ばれていた方は難しい表情のまま、つい先程までライダーの立っていた場所を見つめていた。

「……そうですか。ライダーとアーチャーが」

「ええ。ミス・ユリエ。アーチャーが逃げ切り、決着は持ち越しの模様です」

「初戦にしては、地味な立ち上がりになりましたか。まあ、こんなものでしょう」

咽せ返るような埃と錆びた鉄のような臭いが充満する中、そう会話していたのはユリエと黒崎であつた。

「私の予想では、ライダーと最初にぶつかるのはランサーだと思っていたのですがね」
「なるほど。マスター同士の性格を考えると、確かにその可能性は高かったかも知れませんがね」

「フフ、私の予想の当たり外れなど、どうでも良いのですよ黒崎。大事なことは聖杯戦争が本当の意味で開戦したこと。その一点のみなのです」

「ええ、その通りです。これでもう後戻りは出来ませんね」

「元より後戻りなどするつもりはありませんよ。時は前にしか進まないのですからね」
「そして、遡らぬ時の中で貴女は何れ界壁を越える……」

「その日はそう遠くはありません。それまでは、特等席でこの祭りを見物させて頂きますでしょうか。お前も一緒にどうですか？」

「御意のままに……」

「……ところで、ようやく“彼”が帰還したそうですね？」

「彼……ああ、“彼”のことですか」

「この戦いの輪に“彼”が加われば、更に面白くなりそうですね」

「ええ。“彼”ならば、我々の予想を遥かに超えて楽しませてくれるでしょうね」

「そうでなくては困ります。その為に“アレ”が“彼”の手に渡るように仕向けたのですから」

「ええ。私もその一部始終に関わっていましたが、よく存じていますよ」

「さて、見せて貰いましょうか。『彼』がこの聖杯戦争をどう戦い抜くのか……」

「やれやれ、久々の日本か」

一人の男が空港から出てすぐにくわえタバコに火を点け、そう呟いた。そして、手に持つ一冊の本をパラパラと捲る。

「……さて、まずはどう動いたものかねえ」

男の目は、ギラついていた。それは、さながら初手から詰めまで見通す棋士のようにもあつた。

「……………」

無言で本を閉じると、ポケットに手を突っ込んで歩き出した。海外からやって来た風であるのに、男はトランクケースの一つも持っていない。殆ど手ぶらの状態である。まるで、電車に乗って隣駅へ行くかのように飛行機に乗って来たのであつた。

「……ま、せいぜい俺を楽しませてくれよな」

男は誰に言うでも無く独りごちると、フーツと煙草の煙を吐いた。紫煙が霧のように男を包む。まるで、これから先の不透明な未来を暗示しているかのように。

勝負師の帰還

「……変わらねえな。日本も」

僅かに揺れるタクシーの中、流れる景色を見ながらプラチナブロードの男——渡口零は退屈そうに呟いていた。何処かこの風景に、諦めに似たような表情を浮かべているようにも見える。

事実、彼は退屈していた。日々の変化の無さと変えようにも変えられぬ現実に。

勝負師渡口零。

彼が初めてギャンブルに携わったのは、幼少の頃であった。

父親に連れられ、パチンコ屋へ入った時のこと。席を外した父親の代わりに玉を打つて欲しいと頼まれた。無論、それはせつかくの良席を他人に取られまいという彼の父親の策であったのだが、子供の頃の彼はそれに構わずレバーを回して人生初のギャンブルを行っていたのだ。それは僅かな時間であったが、ただ雲散していく銀の玉を見つめていて彼は一つの仮説を立てる。

(……ただレバーを捻っただけでもこのゲームを攻略することは出来ない。これには何か

別の思惑が介入している)

事実、その店は出玉の操作を常時行っていた。普通のパチンコ屋であれば、余程のことが無い限りは出玉の操作は行われない。つまり、違法店だったのである。時間にして十分にも満たない出来事。これが一つの切っ掛けとなり、その後の彼の人生を大きく変えたのであった。

(世の中、勝つ為には仕組みを知らなければならない)

その考えは遊戯だけでなく、勉強、スポーツ、恋愛など、世のあらゆる物事へ面白いように当て嵌まった。彼はまず何よりも仕組みを理解しようとした。その上で攻略を考える。百パーセントは無理でも、限りなくそれに近く勝てる方法を。勝つには、その為に必要な方法が必ず存在する。言わば、方程式のようなものが必ず存在する。それさえ解ければ必勝である。

それが、彼の持論であった。

渡口はあらゆる局面で勝ち続けた。結果、地位と名声以外の全てを得た。得ていない地位については、そもそも出世欲の無い彼にとって必要では無かったもので、名声については勝つことによって逆に手放して来たものでもあった。だが、彼は他人からの称賛もまた必要とはしなかった。望むものは全てを得たに等しい。やがて、彼は持つ者の虚無を味わうことになる。欲望とは持たざるものの本能。故に、渡口が抱くことの出

来ぬものであった。いや、かつては持っていたものと言った方が正しい。欲望の無い戦いの何と虚しいことか。そこに意義を見出だせなくなってきた彼はやがて、結果の為に戦うのでは無く、戦いそのものに価値を置くようになっていた。

圧勝の優越、劣勢の焦燥、逆転のカタルシス……戦いは渡口にとつての無二のゲームと化す。人生が戦いそのものなのであれば、彼にとつての人生は正にゲームなのである。一つ一つの出来事はそのイベントの積み重ねに過ぎない。常に第三者的な視点であらゆる物事に挑む彼の姿は端から見れば異様な人間に映ったであろう。

そして、戦い方に関しても変化が訪れていく。必勝パターンを模索するやり方から、やがて運否天賦に任すやり方を好むようになっていったのだ。それは、戦いそのものを娯楽と感じる彼ならではの变化であった。実力では勝利が確実な相手でも、運ではそうはいかない。敗北のリスクを背負うことで得るスリルを享受することが彼にとつての何よりの喜びであったのだ。

だが、勝利の女神というものが存在するのであれば、彼女は渡口の味方らしい。驚いたことに運否天賦でも渡口に敗北は無かったのである。戦えばどう転んでも確実な勝利が渡口の元に転がり込む。約束された勝利と言えば聞こえはいいが、結末の分かりきった戦いなど作業に等しい。戦いすらも退屈に変わるのは彼が思っていたよりも早かった。

そう、渡口は退屈していたのだ。それでも、戦いだけが彼に生きる時間を与えてくれているのもまた事実。故に、戦いを止めることは出来なかった。典型的な勝負ジャンキーの症状である。

刺激的な勝負だけを求め、渡口は世界各地を転々としていった。舞台を変えても、彼の勝ち続ける人生に変化は無かった。ただ、多少なりとも癒しはあった。ありとあらゆる国を周り、最終的に辿り着いたのが母国というのは何とも皮肉めいたものを感じずにいられない。

「お客さん、海外で仕事か何か？」

運転手が愛想笑いを浮かべながらバックミラー越しに尋ねてきた。渡口はその質問に正直なところ鬱陶しさしか感じられないでいた。それが本心からの質問ではないというのが明らかであったからである。この運転手はこうして他人と付かず離れずのコミュニケーションを取ることで、健全で充実した仕事を行った気になりたいだけなのだろう。少なくとも、本当に自身のことを知りたい訳ではない。所詮、自己満足にしか過ぎない向こうのコミュニケーションに応じる義務など無い。と、ばかりに渡口が無表情のまま何も答えずに無視していると、運転手はそれ以上何も尋ねては来なくなった。

無言のタクシーはただ目的地までへの道を突き進んでいく。

「……………」

「……………」

重苦しい沈黙。

普通の人であれば、何とか空気を変えようとラジオでも流したいところであるが、渡口はそれさえもさせないような雰囲気醸し出していった。具体的に何をしているというわけでは無いが、素人にさえそれを分からせるのが彼の無表情の圧なのだろう。

渡口は静かな車内で唯一、手荷物として持っている分厚い本を開く。

「……………」

本に書かれていた文字は、見慣れないものであった。少なくとも有名な言語で無いのは確かである。

しかし、何故か渡口には読むことが出来た。現地で様々な人種の人間と会話することであらゆる言語を話せるようになったからだろうか。頭ではなく、研ぎ澄まされた感覚によつてその文字が何を示すのかを理解していたのだ。黙読で文字を追っていき、幾つかのキーワードを心に留める。

「……………聖杯戦争、サーヴァント、召喚、魔術師」

それらだけ抜き出せば、何とも胡散臭い本なのだろう。だが、渡口にはある種の確信があった。それは、ギャンブルの時、トラブルの時、人生における様々な場面で彼を救つ

てきた天命のような直感。

渡口は一通りページをめくり終わると本を閉じ、後部座席にふんぞり返った。そして、静かに目を閉じる。

(……まずは、緑川だな)

——こうして渡口が緑川へとやって来たのは、直がセイバーと出会う前日であった。

観察する男

——その出会いはあまりに突然であった。

「……お前、参加者だろ？」

目の前に現れたプラチナブロンドの長身の男にそう言われ、直はすぐに身構えた。

参加者。

その一言だけで、目の前の男が自分と同じサーヴァントのマスターであるということが理解出来る。

何故、それが分かったのかは直も理解はしていた。セイバーのような怪しい人間を連れていけば、見る者によっては一目瞭然だろう。

直は今、日常生活の必需品の買い出しに出ていた。外出ということではセイバーに強く同行を求められ、結果的にこうして一緒に行くこととなったのである。

本来であれば、直も彼女を連れて歩くなどしたくは無いのだが、いざという時に身を守る手段が無いのはあまりに愚策過ぎると言えた。

側にいる時のデメリット、側にいない時のデメリット。

双方を天秤にかければ、連れ歩く方を選択するのは自然であるとも言えた。もつとも、直が拒否しようとセイバーならば無理にでも付いていこうとしたであろうし、それを拒否する為に何処の誰かさんみたいに令呪まで使うような愚かし過ぎる真似は直には出来なかつただろうが。

だから、ここまでは直の想定通りであつた。

「……………だと、したら？」

直はなるべく表情を変えずに言つた。いくら想定通りでも、いきなり来られれば多少なりとも動揺はしてしまう。その僅かな動揺を相手に悟られるだけでも、こちらの不利に陥りかねない。鉄壁とまでは行かずとも、ポーカーフェイスに徹することは勝負の定石の一つであると、直は努めて無表情を装う。

「……………ふーん。ああそう？」

プラチナブロンドの男は興味無さげにそう言つた。自分から尋ねておいてこの態度である。その表情からは、相手の意図も思考も全く読み取れない。正に完璧なるポーカーフェイスであつた。

ただ、男に戦意は今のところ見られないようである。すぐに戦闘……という事態にはならなさそうであつた。もし仮に相手に直と戦う気があるとしたならば、こうして正面からの接触というよりは奇襲を選択した可能性が高いだろう。少なくとも、正々堂々と

真正面から挑むにしては不意打ち過ぎるし、すぐに切り出さないのもおかしい。見た目の雰囲気や態度からも騎士道精神に満ち足りているという風には読み取りづらい。

だが、騙し討ちのつもりで近付いたのだとしても、ここまで友好的な雰囲気や排した態度であるとそれも考え難い。

現状の直の目に入る情報から考え得るに、目の前の男は交渉する腹積もりでも、ましてや瑠璃子のような宣戦布告のようにも見えない。とにかく、ただただ不気味であった。

（何が目的なんだ、この男は？）

接触の理由について、直が判断し兼ねていると、プラチナブロンドの男は無表情のまま右手を見せてきた。それを見て驚きの声を上げたのは、セイバーの方であった。

「……!? 令呪が無い？」

よく見ると男の右手には何やら刺青のようなものがあり、それが消えかかっていた。色や形状を見るに直や瑠璃子のもと同種のものである。

瑠璃子は令呪を一度使用したと言って、その印の一部が消えていた。つまり、それが令呪を使用したという証なのだろう。そのことを踏まえれば、目の前の男の場合は二回程使用したということになるかと思われる。令呪の使用回数は、デフォルトでは三回。増やす方法もあるそうだが、それをしていなければ、このプラチナブロンドの男は

あと一度しか令呪を使用出来ないということになる。あくまで、目の前の情報を素直に受けとれば……の話ではあるが。

「……これで、サーヴァントに何でも命令出来るんだってな？」

「……………」

直は沈黙を貫いた。何かを口にすれば、そこから足元を掬われかねない。そんな脅威を相手から感じていた。

「……………令呪を持つて命じる」

「!?」

「肩を揉め」

「なっ……………!?!」

それは奇妙な光景であった。強面の屈強な男が突然現れたと思ったら、背丈こそ高いものの、自身より一回り以上も細いプラチナブロンドの男の肩を揉み出したのである。

（令呪を……馬鹿かこいつは!?!）

直自身は令呪のことを詳しくは知らない。だが、使い方次第では戦況に多大な影響を与えることは間違いないというだけは理解している。そんな重要なファクターを敵の目前で敢えて無駄遣いして見せるという行為。とても、理解不能であった。

（……………動揺するな。動揺すれば奴の思う壺だ）

そう思うことさえ、既に相手の術中なのかも知れない。何故だか分からないが、直には目の前の男が考えも無しにそういうことをするような人間には見えなかった。一見何の意味もない行動や仕草に罠が隠されている。そんな得体の知れなさをこの男から感じていた。

「なあ……」

と、男が突然話し掛けてきた。

「思わないか？」

「……何を？」

「この令呪って奴についてだよ」

「……」

直は何も答えない。

「サーヴァントに何でも好きな命令を下すことが出来る……」

「……」

「それって、本当に必要なのかね？」

「……」

「聖杯戦争……だっけ？この戦いを一つのゲームとした場合、ハッキリ言ってこの令呪ってのは余計だ。言わば、不純物って奴だな」

「……………?」

直には相手の言っていることが理解出来なかった。何を以てして令呪を不要だと見なしているのだろうか。聖杯戦争において、これ程重要なファクターは無いというのに。

「だんまりか」

「……………」

「……………一つ、分かったことがある」

徐に男は呟いた。

細く切れ長の目を直たちへ向ける。

「お前は色々と策を練って戦うタイプの人間だろ?」

鋭い一撃。

出会って、数分も経っていないのにそこまで読み取ってくるとは直も思っていないなかった。必死にポーカーフェイスを保とうとするものの、自身でも上手くいっていないだろうというのが分かる。

「……………ッ」

何も返せない。何か喋れば、そこからまた分析されてしまうかも知れない。

直は、ただ相手の目を見つめ返すことしか出来なかった。

「……用件は一体何でしょうか？」

代わりにセイバーが男へ尋ねた。

「戦うというのであれば、こちらも迎え撃つということになりますか？」

「そうして欲しいなら、お望み通りにしてもいいぜ？」

男は僅かに口角を上げながら言った。

だが、ここは市街地である。衆目がある中で、まさか本気で戦闘を始めるなど有り得ない。と、直は考えていた。

「……そうして欲しいなら、ということとは、そのつもりでは無いってことか？」

「……さあね」

直が尋ねると男はそう交わした。

全く意図を読ませない言動と行動。こういう読み合いの部分では、どうも相手の方が一枚も二枚も上手のようである。更にこの男は、時折論理とは到底かけ離れたことも平然と行うようであった。そのことが直の理解を鈍らせる。

戦う意志があるのか、無いのか。それさえも引つ掛けに過ぎないのか。最早、何も分からぬ。

ただ一つ理解したことは、直は対峙して五分も経たずに相手の術中に嵌まってしまっていた。それだけである。

「……………」

男は無表情のまま煙草の箱を取り出すと、そこから一本を啜えて火を点けた。見たこととの無い銘柄。海外のものだろうか。

「フー……今時、海外の煙草なんて何処にいても買えるぞ？俺個人を分析する材料としては弱いんじゃないか？」

「……!？」

視線を向けただけで、まるで心を読まれているように考えを当てられてしまう。

直は戦慄した。

(…………認めなければならぬ。この男は俺の遥か上を行っている!!)

直は自分が他者よりも優れているなどと自惚れる程に自身を高く評価しているわけではないが、低く見積もっているつもりでも無かった。瑠璃子と相対した時にも、大体が自身の想定通りに物事が進み、戦わずしてイニシアチブを取ったという自負もある。そんな矢先でのこの男との遭遇であった。思わずギリリと歯噛みする。

(幸運だったのは、これが実戦では無かったことか……。いや、それさえも断定するにはまだ早過ぎる。俺が背を向けた瞬間に牙を剥いてもおかしくないのだから)

少なくとも相手もサーヴァントを連れている。武器は手にしているということだ。しかも、最初はサーヴァントの姿が見えなかったことを考えると、この男は魔力の供給

とやらが行えるらしい。つまり、魔術師。或いは、それに準ずる何かであるということ。今もサーヴァントの姿は何時の間にか消えている。

「……やれやれ、こいつは思っていたよりも退屈そうなゲームだな」

男は一言、そう呟いた。

心底、残念そうな表情である。

「まあ、暇潰し程度にはなるか……」

頭をポリポリと掻きながら男は背を向けた。

あまりにも隙があり過ぎるその背中。だが、直は一步も動けなかった。そして、男の姿が見えなくなるまで、ただ目で追うことしか出来ないでいる。

「……………ッ！」

男が衆人の中に消えたところで、直は齒噛みして悔しさを表現した。

(暇潰し、だど？クソッ!!)

圧倒的な力の差を見せ付けられたような気分。これは、完全なる精神的敗北であり最大の屈辱である。

だが、その中でも得るものはあった。

(……名前も知らない男。お前は一つ、ミスを犯した。それは、俺の前に姿を現せたことだ)

相手の実力の片鱗さえ知らぬまま、実戦としてあの男と相対していたら、確実に直は負けていただろう。逆に、相手にとつてはチャンスであったと言える。それを見す見すと逃してくれたのは幸運以外の何物でもない。

(余裕か……?だが、相手を見くびるようなタイプには見えなかった。それに……)
直はあの男に、まるで獲物を観察する猛禽類のようにじつと見られていた。出会つてから去つて行くまで一秒たりとも欠かさず。対峙しているだけで神経はすり減つていく。

そして、その観察は直に止まらずセイバーにも及んでいた。

「……不気味ですね。まるで、心の奥底まで覗き込まれた気分です」

セイバーも直と同様に感じていたのだろう。そう言つてあの男に対して強い警戒心を抱いていた。

「……………チッ」

気付かぬ内に直は隣にいるセイバーにも聞こえる程の音を立てて舌打ちをしていた。

(負けられない戦いだというのに……クソッ!!)

その戦いを暇潰しと言つてのけるあの男。

直の前に新たな壁が現れた瞬間であった。乗り越えることのもとも困難な高い壁。

(……心しなければならぬ。あの男ですら、最頂点では無いのかも知れないと)

この邂逅がもたらす未来。
それは……。